正　誤　表

頁	行	誤	正
7	13	土期	土器
	21	堀之内形式	堀之内型式
	27	箱清水形式	箱清水型式
10	14	塚畑・原畑	塚畑・花塚・原畑
11	19	南新間	南浅間
14	18	縄文中期，晩期，土器片	縄文中期・晩期土器片
22	12	曽利1式	曽利Ⅰ式
23	23	川越正義	山越正義
25	21	125cm	12.5cm
26	22	女鳥羽遺跡	女鳥羽川遺跡
	24	西沢寿幸	西沢寿晃
27	5	土器片は角	土器片は角が
30	23	一般　器	一般什器
33	12	ま厚手となり	や厚手となり
40	19	縄文土器群	無文土器群
41	2	黒母	雲母
	4	緩かる	緩かな
53	19	突期	突起
59	20	磨減痕	磨滅痕
62	8	麻石的	磨石的

なお　遺跡名は「大村遺跡群柳田遺跡」としたが、柳田遺跡は浅間温泉地籍にあるので、本事業終了以後は「松本市浅間温泉柳田遺跡」と改める。

序

このたび調査いたしました大村遺跡群柳田遺跡の発掘は、長野県企業局の南浅間住宅団地造成工事に先立つもので、計画当初より企業局の文化財保護に対する深いご理解とご協力及び県教育委員会の指導の下に事前に発掘調査が実施され、記録保存が図られました。

調査は松本市教育委員会の委託を受けた日本考古学協会員中島豊晴氏を代表とする大村遺跡調査会によって、猛暑の中調査会及び関係者の熱意と協力によって進められ、住居址及び貴重な遺物が多数発見され、この周辺地域の古代の様相を探る貴重な資料を得る事ができました。又、ご承知の通りこの遺跡の周辺には多数の古代の遺跡が発見確認されておりますが、これらとの関係からも今回の調査は非常に意義深いものがあると思われます。

本書は、その結果を集録したものでありますが、今回得られた資料を広く紹介すると共に、この地域の古代史の解明及び今後の文化財保護の一助になれば幸いに存じます。

終りに、今回の調査に際しまして、多大なご協力、ご理解を示された関係者各位に心から謝意を表して序といたします。

昭和54年12月

松本市教育委員会

教育長　赤羽　誠

例　　言

1. 本書は昭和54年7月8日～7月16日，8月5日～8月31日までの実質24日間にわたって行なわれた，松本市大村遺跡群柳田遺跡分布確認調査の報告書である。

1. 本調査は県企業局の委託によるものであり，別記調査団を編成して行なった。

1. 報告書の執筆分担は下記の如くでありその内容の責任は執筆者にある。

第1章第1節	森義直・宮城孝之氏
第2節	倉科明正氏
第2章第1節	事務局
第2節	白崎卓・山本紀之・丸山正一郎氏
第3章第1節	(1)宮城孝之・(2)大久保知巳・(3)三村肇・山越正義氏
第2節	(1)大久保知巳・(2)三村肇・山越正義氏
第3節	西沢寿晃・浅輪俊行氏
第4節	宮城孝之・白崎卓氏
第4章第1節	(1)三村肇・山越正義・浅輪俊行氏　(2)大久保知巳氏 (3)三村肇・山越正義氏　(4)山田瑞穂・浅輪俊行氏 (5)宮城孝之・白崎卓氏
第2節	(1)～(3)中島豊晴氏　(4)宮城孝之氏
第5章第1節	西沢寿晃氏
第2節	森義直氏
第6章	中島豊晴氏

1. 本書の編集は主に事務局が当ったが，三村・山越・浅輪氏の助力を得た。

1. 写真，作図等は各執筆担当者が行なったが，土器の復元には高野昌英，三村竜一君の協力を得た。

1. 出土遺物は松本市，日本民俗資料館に保管してある。

松本市大村遺跡群柳田遺跡分布確認調査団

団　　長	中島豊晴
調　査　員	大久保知巳・山田瑞穂・小林康男・倉科明正・三村肇・山越正義・浅輪俊行・西沢寿晃・森　義直
補助調査員	宮城孝之・白崎　卓・矢口晋司・石渡俊一・太田守彦・谷崎史門・八田京子・細田勝重・荻原妙子・奥山元彦・田中正治郎・大竹庄司・上野山恭和・有賀隆夫・込山・二宮・永井・角田・木村・小高（以上信大考古研究会）山本紀之（専修大）　丸山正一郎（独協大）　向山かほる（金沢大）　三村泉（駒沢大）
発掘調査協力者	横田作重・手塚操子・砂原弘明・松商学園高校地歴部（代表　赤岩洋子）高野昌英（深志高）　中込孝一郎（穂高高）　三村竜一（豊科高）　赤木宏康（美須々丘高）　島村和孝・堀江真吾（県ケ丘高）　小山剛・宮田和明（女鳥羽中）　湯本雄一・畑田一彦・宮沢弘行・宮沢昭利・牛山博仁・藤野俊昭・竹村淳良・高木慎二・上原利明・後藤康訓（本郷小）　本郷公民館　本郷小学校　浅間16町会
土器洗い	旭町中学校生徒
事　務　局	松本市教育委員会社会教育課長　小川好治・文化係長　神沢昌二郎 主事　大日向栄一・清野陽子

目　　次

序　　文 …… 1
例　　言 …… 2
目　　次 …… 4

第 1 章　遺跡とその環境 …… 6
　第 1 節　遺跡周辺の自然環境 …… 6
　第 2 節　遺跡周辺の歴史的環境 …… 7

第 2 章　調　査　経　過 …… 12
　第 1 節　調査に至る経過 …… 12
　第 2 節　調　査　日　誌 …… 14

第 3 章　遺　　構 …… 19
　第 1 節　住　居　址 …… 19
　　(1) 第 1 号住居址 …… 19
　　(2) 第 2 号住居址 …… 20
　　(3) 第 3 号住居址 …… 22
　第 2 節　集　　石 …… 23
　　(1) 第 1 ・第 2 号住居址上面集石 …… 23
　　(2) 第 3 号住居址上面集石 …… 25
　第 3 節　縄文晩期遺物出土地点 …… 26
　第 4 節　その他のグリット …… 26

第 4 章　遺　　物 …… 30
　第 1 節　土器・土製品 …… 30
　　(1) 第 1 号住居址出土土器 …… 30
　　(2) 第 2 号住居址出土土器・土製品 …… 33
　　(3) 第 3 号住居址出土土器・土製品 …… 37
　　(4) 第 3 号集石出土遺物 …… 41
　　(5) 縄文晩期遺物出土地点出土土器・土製品 …… 44
　　(6) その他のグリットよりの出土土器 …… 53
　第 2 節　石器・石製品 …… 57
　　(1) 第 2 号住居址上面集石中の石器 …… 57
　　(2) 第 3 号住居址上面集石中の石器 …… 59
　　(3) 縄文晩期遺物出土地点（ C地区 ）集石中の石器 …… 62
　　(4) 住居址内及びグリット出土石器 …… 68

第 5 章　動　植　物 …… 74
　第 1 節　動　　物 …… 74
　第 2 節　植　　物 …… 75

第 6 章　結　　語 …… 75

挿　図　目　次

第１図　遺跡附近の柱状図 …… 6
第２図　松本市本郷地区遺跡地図 …… 8
第３図　グリット図 …… 18
第４図　第１号住居址実測図 …… 20
第５図　第２号住居址実測図 …… 21
第６図　第３号住居址実測図 …… 23
第７図　第１・第２号集石実測図 …… 24
第８図　第３号集石実測図 …… 25
第９図　縄文晩期遺物出土地点実測図 …… 27
第10図　A～Dグリット集石およびセクション図 …… 29
第11図　第１号住居址出土土器実測図 …… 30
第12図　第１号住居址出土釣手土器実測図 …… 34
第13図　第２号住居址出土遺物実測図 …… 35
第14図　第２号住居址出土土器実測図 …… 36
第15図　第３号住居址出土遺物実測図(1) …… 38
第16図　第３号住居址出土遺物実測図(2) …… 39
第17図　第３号住居址出土遺物実測図(3) …… 40
第18図　第３号集石地出土土器実測図 …… 42
第19図　縄文晩期遺物出土地点出土土器実測図(1) …… 45
第20図　縄文晩期遺物出土地点出土土器実測図(2) …… 47
第21図　縄文晩期遺物出土地点出土土器実測図(3) …… 48
第22図　縄文晩期遺物出土地点出土土器実測図(4) …… 50
第23図　縄文晩期遺物出土地点出土土製品実測図(5) …… 52
第24図　Aグリット出土土器実測図 …… 54
第25図　Bグリット出土土器実測図(1) …… 55
第26図　B，Cグリット出土土器実測図(1) …… 56
第27図　C，Dグリット出土土器実測図 …… 57
第28図　第２，第３号住居址上面集石中の石器実測図(1) …… 58
第29図　第３号住居址上面集石中の石器実測図(2) …… 61
第30図　第３号住居址上面集石及び縄文晩期遺物出土地点集石中の石器実測図(3) …… 63
第31図　縄文晩期遺物出土地点集石中の石器実測図(4) …… 64
第32図　第１号住居址出土石皿実測図 …… 69
第33図　Aグリット出土石器実測図(1) …… 70
第34図　Aグリット出土石器実測図(2) …… 71
第35図　Aグリット出土石器実測図(3) …… 72
第36図　B，Cグリット出土石器実測図 …… 73

図　版　目　次

図版１　柳田遺跡全景（北西より） …… 79
図版２　第１号集石および第１号住居址 …… 80
図版３　第２号集石および第３号集石 …… 81
図版４　第２号住居址および炉址・炉址内出土土器 …… 82
図版５　第３号住居址 …… 83
図版６　釣手土器および出土状況 …… 84
図版７　鉢型土器および出土状況 …… 85
図版８　第１号住居址および遺構外遺物出土状況 …… 86
図版９　第３号住居址出土土器 …… 87
図版10　第３号集石および第３号住居址出土遺物 …… 88
図版11　縄文晩期遺物出土地点及び出土遺物 …… 89
図版12　第２，第３号集石出土石器(1) …… 90
図版13　第３号集石出土石器(2) …… 91
図版14　第３号集石および縄文晩期遺物出土地点出土石器(3) …… 92
図版15　縄文晩期遺物出土地点出土石器(4) …… 93

第１章　遺跡とその環境

第１節　遺跡周辺の自然環境

遺跡の自然環境

本遺跡は松本市の市街地北東部，浅間温泉に所在する。従来，付近一帯は水田及び畑が多かったが近年本遺跡付近の宅地化が進んでいる。地形的には，遺跡の西方 300 m離れて女鳥羽川が北から南へ向かって流れ，遺跡東辺に沿って大六沢がやはり北から南へ向かって流れている。さらに東方約 300 m付近から遠く美ケ原高原へと続く山々がはじまり，この山々と女鳥羽川のつくる自然堤防とによって遺跡は若干低い位置にある。全体に北から南へ向かって地形が低くなっており，そのため，遺跡の北端と南端との間に３段の段差をつくっている。尚，遺跡の東辺に沿う大六沢は最近まで付近住民の用水として使われていた事を付け加えておく。さらに本遺跡付近は，従来，しばしば洪水に見舞われており遺跡の地層の状態からも洪水による堆積土層が確認され，出土遺物は同一層内でもかなりの時代的広がりをもっている。

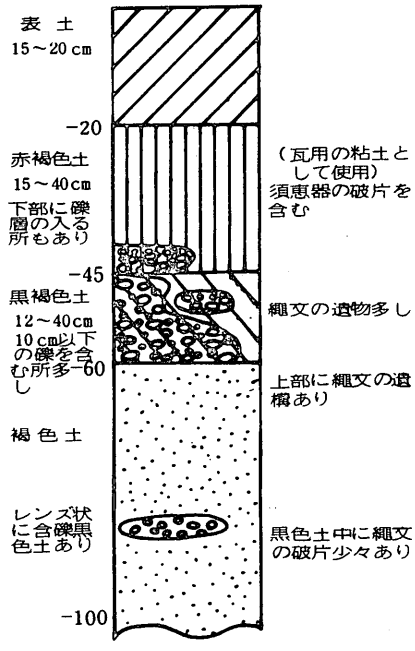
（宮城孝之）

遺跡周辺の地形・地質

本遺跡は，ほゞ北から南に流れる女鳥羽川の堆積物によって形成された，旧はんらん原上にあり，東側は，美ケ原高原の山地で，その山麓が約 400 mの近くまで迫っている。山麓には，西流する沢がいく筋も発達し，土砂を女鳥羽川による堆積物上に押し出している。本遺跡の地質は，この両者が複雑に入り混ざった堆積をしており，数m離れると堆積物の様相を一変するなど，モデル化して地質柱状図を作るのが困難である。

地形上からは，女鳥羽川により南の方へ約 1°，沢からの押し出しによって，西の方へ約 1°傾斜している。即ち全体として南西方向へゆるい傾斜をした地形となっている。

発掘地点に限れば，下部の大部分は女鳥羽川の堆積物であり，その上に，東山の大六沢からの堆積物と女鳥羽川のはんらんによる堆積物とが入り混ざって堆積している。礫の岩質は，安山岩が大部分をしめ，その外に，緑色疑灰岩，砂岩などがある。



第１図　遺跡付近の柱状図

（森　義直）

第２節　遺跡周辺の歴史的環境

本遺跡をとり巻いている本郷地区内の遺跡遺物について，これを考古学的見地から編年的に述べる。

本郷地区内における最古の遺物は今のところ三才山字本郷山中の渋池（標高 1,115 m）附近から晩期旧石器時代の切出形石器が採集されている。

縄文時代に入ると早期の粕畑式か上ノ山式が同所より出土している。

前期になると下島直後様式が同じく同所から出土し，またこれより東方の袴腰山（標高 1,600 ～ 1,700 m）の西側中腹斜面より諸磯Ｂ式が若干ながら発見されている。

洞の不澄池（標高 860 m）附近から，繊維土器が採集されている。下って原の下屋敷遺跡（標高 630 m）から，黒浜式・諸磯Ａ式土器が若干であるが出土している。

本遺跡に隣接する浅間温泉県営野球場の西北にあるゴルフ練習場からも先年諸磯Ｂ式が出土し，大村の原畑からも少量ながら前期土器が発掘されてはいるがともにその量が少なく，遺跡を形成するまでに至っていない。

中期の初めの土期は洞のすまず池附近でわずかに採集されているのに過なく，中葉になると勝坂式土器が原の五反田遺跡（標高 630 m）と三才山の七本松遺跡で発見されている。

つづく加曽利Ｅ式の土器は，三才山の芦の田池（俗称美鈴湖・標高 985 m）遺跡，稲倉の和田遺跡・塩辛遺跡，洞の塚田・樋渡し遺跡がある。この稲倉・洞地籍のこれらの遺跡はともに女鳥羽川右岸段丘上に連なる濃厚な遺跡である。

つぎに浅間温泉地籍内では，下浅間の西石川旅館や手塚農林など街地内から土石器や敷石遺跡が発見され，本遺跡に隣接する前記ゴルフ練習場からも多量に発掘されている。

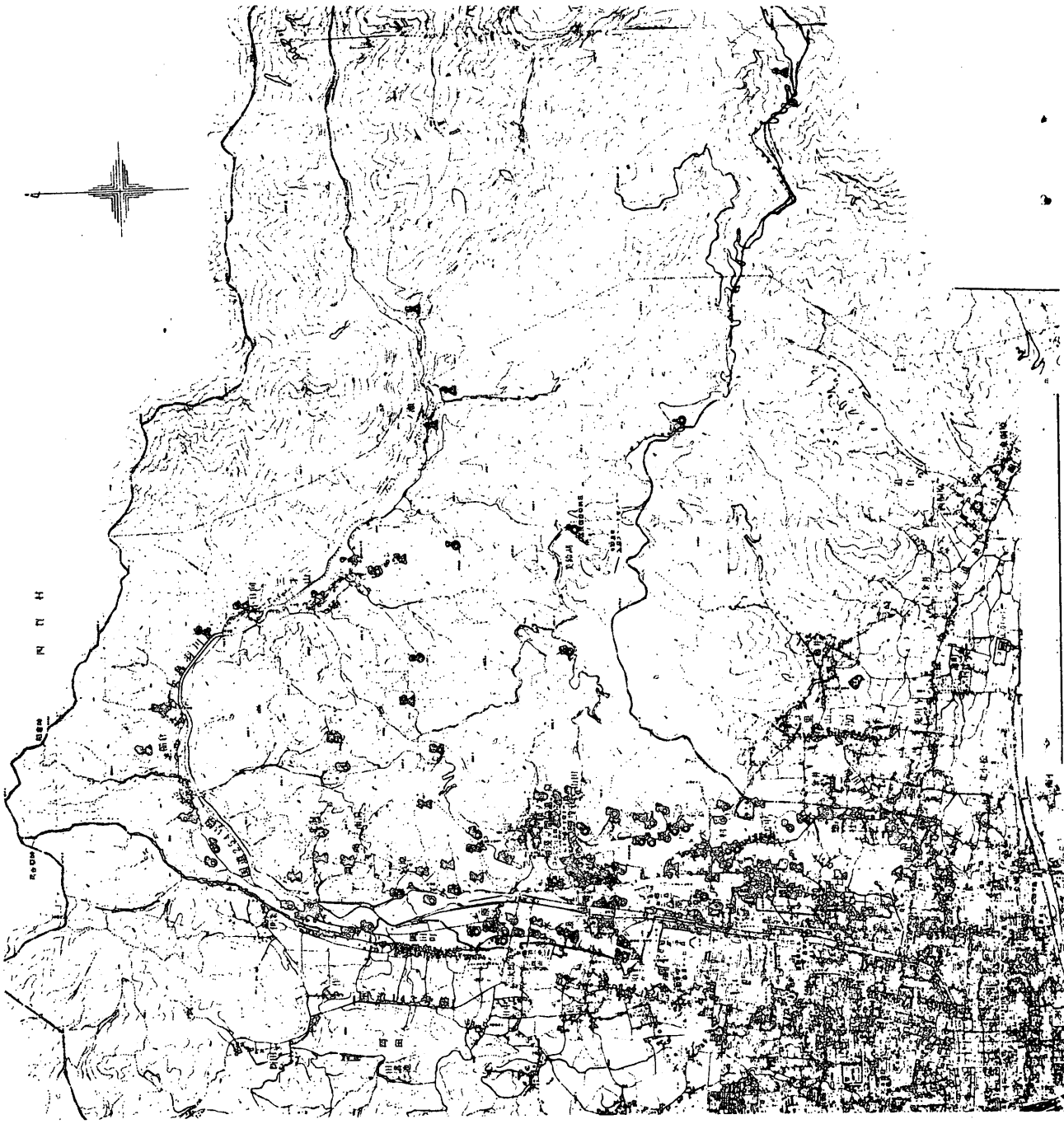
大村では立石・原畑・塚畑・花塚などの広範囲に亘る遺跡からは，多量の前記同様式の土石器が出土しているほか，後期の堀之内形式土器が伴出されている。

後期遺跡は非常に少なく，上記遺跡と本遺跡のみである。

晩期になると更に少なく，本遺跡を除けばわずかに大村の原畑から検出されるに過ぎないのである。

弥生式時代の遺物としては，三才山の女鳥羽川上流中の沢入口附近から片刃石斧，同じく一の瀬集落内から太型広刃石斧，原の西原から太型広刃石斧，浅間温泉の大音寺址から太型広刃石斧，浅間橋東側附近から太型広刃石斧が出土している。

土器としては，浅間温泉と大村との境の妙義山古墳の第三号墳の墳丘から後期箱清水形式の土器が若干出土し，また横田の東裏で同期の壺が発見されている。このほか三才山芦の田池・番場池，洞の栗和田池周辺から箱清水式土器が発見されていると報ぜられているが，確認していない。何れにしても本郷地区内での遺物の発見も少なく，遺跡も確認されていない。



第２図　松本市本郷地区遺跡地図

第1表　本郷地区内遺跡，遺物分布表

○遺跡　△遺物　□消滅古墳

遺跡名 大字・地名 ＼ 編年	考古学時代区分 旧石器	縄文時代 早期	縄文時代 前期	縄文時代 中期	縄文時代 後期	縄文時代 晩期	弥生時代 中期	弥生時代 後期	古墳時代 土師器	古墳時代 須恵器	古墳時代 古墳
1 三才山・渋池	○	△									
2 ・袴腰			△								
3 ・赤羽畑				△							
4 ・芦の田池				○				△	○		
5 ・中の沢								△			
6 ・一の瀬								△			
7 ・小寺尾				○							
8 ・高松入				○							
9 ・宮の前				△					△		
10 ・がうしが入									○	○	
11 ・泣坂									△	△	
12 ・本村				△							
13 ・新田原									△		
14 ・小日向				△							
15 ・七本松				○					○	○	
16 稲倉・柏尾				△							
17 ・高井の入				○							○
18 ・衣下				△							
19 ・鎮守				△							
20 ・和田				○							
21 ・桜田				○							
22 ・塩辛				○							
23 洞・竹の上				△							
24 ・樋渡し				○					△	△	
25 ・高山				△							
26 ・日影				△							
27 ・古堂				△							
28 ・栗和田				○					△	△	
29 ・山城											○
30 ・土取場											○
31 ・塚田				○							□
32 ・不澄池			△								
33 原・塚田(1)									○	○	□
34 ・穴田前				△					○	○	○
35 ・穴田入				△							
36 ・宮地坂				△							
37 ・北の久保				△							
38 ・根利尾				△	△						
39 ・宮の上									○	○	
40 ・宮の下									△	△	
41 ・西原				○				△	○	○	○
42 ・下屋敷			△	○					○	○	○
43 ・五反田				○					○	○	
44 ・塚畑										△	○
45 ・杵坂				○							
46 ・塚田(2)				△						△	□
47 ・小屋清水				△							
48 水汲・杵坂				△							
49 ・夕テ				△						△	○
50 ・西原				△							○3
51 ・油田											○
52 ・水汲				△							
53 浅間温泉・雨堤				△					△	△	
54 ・本社峯				△							○
55 ・茶臼山				△							□

遺跡名 大字・地名 ＼ 編年	考古学時代区分 旧石器	縄文時代 早期	縄文時代 前期	縄文時代 中期	縄文時代 後期	縄文時代 晩期	弥生時代 中期	弥生時代 後期	古墳時代 土師器	古墳時代 須恵器	古墳時代 古墳
56 浅間温泉・高田				△					△	△	
57 ・横谷入				△							○
58 ・山田入				△							
59 ・大音寺								△			
60 ・上浅間				△							
61 ・鳥居前									△	△	
62 ・沢添				△							
63 ・念仏田				○							
64 ・下浅間				○							
65 ・下高田				○							
66 ・柴田								△			
67 ・大屋敷				△					○	○	○2
68 ・柳田			△	○	○	○		△	△	△	
69 桜ケ丘(土引山)											○
70 ・飯治洞									○	○	
71 ・真観寺										△	
72 ・妙義山								△			○2
73 ・細田									○	○	
74 大村・堂田									○	○	
75 ・新切									○	○	○
76 ・寺田									○	○	
77 ・赤田									△	△	
78 ・くね添									○	○	
79 ・堰添									○	○	
80 ・塚畑(1)									△	△	
81 ・塚畑(2)									△	△	
82 ・塚畑(3)				○	○				△	△	
83 ・原畑				○	○	○			△	△	
84 ・立石				○					△		
85 ・花塚				○					△	△	
86 ・道添									○	○	
87 ・大輔原				○					○	○	
88 ・塚田				○					△	△	
89 ・玄向寺山											○
90 ・上村									△	△	
91 ・雪中									△	△	
92 南浅間・国司塚									△	△	○
93 横田・宮ノ後									△	△	
94 ・念仏寺跡									△	△	
95 ・五反畑									○	○	
96 ・西裏									△	△	
97 ・古屋敷									○	○	
98 ・八反田				△							
99 ・東裏				△				△	△	△	
100 惣社・宮北				○					○	○	
101 ・車塚									△	△	○
102 ・小松境				△							
103 ・町屋畑									△	△	
104 ・宮西									△	△	
105 ・惣社				△							
106 ・雁金									△	△	
107 ・猫田									△	△	

土師器・須恵器の時代になると，急に遺跡の数が増大し，その遺跡には歴史時代に入る灰釉陶器を伴っている。

三才山では宮の前・郷士ケ入・泣坂・高松入・七本松などがある。稲倉には顕著な遺跡もなく，下って洞では樋渡し・里畑附近と早落の水田下から出土している。

原においては，宮の上・宮の下・五反田・下屋敷など女鳥羽川右岸段丘上の諸遺跡と左岸段丘上の塚田・穴田前からはこれらの包含層が発見されている。

水汲では西原地籍にて若干の遺物を見るも，集落西側河岸段丘斜面に築かれた五基の古墳を支えた大遺跡は発見されていない。

浅間温泉地籍では，女鳥羽川左岸添の大屋敷（浅間橋より本郷高校まで）と東の山麓飯治洞，大村境の細田などから多量に発見されているほかは，浅間街地方面からの発見は少ない。これは北から宮の入沢と東から横谷入沢・山田沢（塔の入沢）の小谿流による押出しと，数次にわたる山の崩壊と堆積によって2～5mが埋没しているので遺跡の発見は困難である。

大村地籍に入ると，堂田の大村廃寺址を始め，塩辛・寺田・赤田・くね添・堀田・塩水と続く大村集落東側の水田地帯と同じく西側の畑地帯塚畑（3ケ所ある）・国司塚・大輔原・塚畑・原畑・立石などから遺物包含層があり多量に発見されている。なかでも塚畑地籍からは鍛冶屋跡が発掘されており，また集落東北方の山麓字新切からは須恵器窯跡が1基と土師器・須恵器と混って鉄鎌が発掘されている。

横田では宮の後・原・西裏・東裏から若干ずつ発見されているほか，南部の古屋敷からは，多量の発見を見ている。

惣社では南部の宮の北・町屋畑・水付・下の丁などから出土しているが，特に宮の北からは蚕業試験場桑園として天地返しが行われた際には多量の発見があった事が報告されている。

古墳は去る昭和30年に学術発掘された浅間温泉の字土引山にある桜ケ丘古墳は5世紀末から6世紀始めの築造と言われ，これに続く古墳としては，明治23年に発掘された横谷入古墳を当てているが，これらよりも更に古いと目されているのは，街地の北方字茶臼山の山頂に築造された茶臼山古墳であろう。この古墳は直径20m余の円墳（中世城砦として利用されているため破壊されている）は，浅間温泉以南の地帯を目下におさめ得る景勝の地にあるところから，この古墳を以て桜ケ丘古墳より若干古いものと推定している。これから述べる本郷地区内の古墳は惣社の車塚古墳と大村桃仙園古墳を除いて6世紀末から7世紀にかけてのものと思われる。

茶臼山古墳から東北方約100mの山上には横穴式石槨を有する本社峯古墳がある。またこの東方宮の入沢を距てた御殿山の中腹に1基の古墳があった事を「松本市史」上巻では伝えている。このほか平坦地の大屋敷には1号と2号の2基の古墳がある。

浅間温泉以外では，稲倉の高井の入古墳，洞の山城古墳・高根古墳（現在市内岡田町地籍に属する

も地形的には洞地内と見られる）・土取場古墳と塚田（かつて古墳があったことを示す地名）がある。

原では西原古墳・下屋敷古墳・杵坂古墳（地字塚畑）と塚田の地名が1ヶ所あり，女鳥羽川左岸の穴田前には穴田前古墳と300m位はなれて塚田の地名が残っている。

水汲では西方河岸段丘の斜面を利用した古墳が南北に5基連なっている。

大村地籍では新切山（浅間温泉の妙義山古墳3基を指す）に昭和30年代に学術発掘調査の行われた妙義山古墳群がある。

このほか玄向寺山の西南麓の桃仙園のところに1基の古墳がある。この古墳から甲冑の出土を伝えているところから，浅間温泉の桜ヶ丘古墳と同年代の築造と推定している。またこの外平坦部にあっては，かつて古墳があったことを示す塚畑が3ヶ所，花塚，塚田の地名が各1ヶ所残っている。

南浅間は昭和49年に大村から新しく分離独立したところで，ここには国司塚があり地名国司塚が広い範囲に亘っている。但しこの塚は天慶7年（西暦942年）この地で没した信濃守紀文幹の墓とする説があるので古墳と断定することはできない。

惣社では，市内里山辺下金井と接する，惣社共同墓地の南に若干の覆土の一部を残す車塚古墳がある。この車塚は元禄13年（1700）惣社新切検地に「御車塚」として開墾されている。この車塚の地名は東に接する下金井地籍にも広がりを見せているところから，かつてここに前方後方墳か前方後円墳が存在したことを明示している。

以上本郷地区内における遺跡の概要を述べたものであるが，詳細については第2図及び第1表を参照されたい。

（註）本郷地区内の大字は，三才山・稲倉・洞・原・水汲・浅間温泉・大村・南新間・横田・惣社の10ヶ所にわかれている。

（倉科明正）

参考文献

1. 本郷村誌編纂資料第三巻－昭和31年－本郷村・本郷村誌編纂会
2. 信濃浅間古墳－昭和41年－本郷村
3. 浅間附近における弥生・土師・須恵遺跡とその遺物－昭和41年－本郷村教育委員会
4. 東筑摩郡・松本市・塩尻市誌第二巻上－昭和48年－東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会
5. 東筑摩郡・松本市・塩尻市誌別編地名－昭和51年－東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会

第2章　調　査　経　過

第1節　調査に至る経過

（1）

（第1次）

昭和54年4月7日（金）曇，県文化課丸山指導主事，県企業局寺島主査，市教委神沢らにより，現地にて打合せ。表面採集によると土師器の小破片が僅かに見られる程度であるが北側住宅および西南約200 m附近よりも遺物の出土をみているため分布確認調査を行うこととする。

6月14日（水）曇，市教委より中島豊晴氏に調査受託依頼。

7月 6日（木）曇，中島氏宅にて，中島・信大生・神沢らで調査体制打合せ。調査員には中信考古学会員の全面的な協力を得るべく各会員にお願いすることとする。調査補助には信大考古学研究会があたることとする。

（第2次）

7月17日（火）　第1次調査の結果，特にAトレンチおよびCトレンチについては更に拡張調査する必要を感じ，調査団による協議の結果，第1次と同程度の調査を行うこととする。これをうけて，市教委では，県教委に報告し，第2次調査を行うこととする。

なお第2次調査は，調査体制の立て直しのため，8月5日より1週間の予定とする。

（2）

埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書

昭和54年6月26日

委託者　長野県公営企業管理者　赤　尾　邦　男

受託者　長野県松本市長　和　合　正　治

委託者，長野県公営企業管理者赤尾邦男（以下「甲」という。）と受託者松本市長和合正治（以下「乙」という。）とは，甲が行なう松本市大字浅間温泉字柳田地籍の南浅間住宅団地予定地内における埋蔵文化財包蔵地（以下「遺跡」という。）の発掘調査の実施に関する業務（以下「業務」という。）に

ついて次のとおり委託契約を締結する。

（信義誠実の義務）

第1条　甲、乙両者は，信義を重んじ誠実に本契約を履行しなければならない。

（委託業務）

第2条　乙は，別紙発掘調査計画書に従って業務を実施するものとする。

2　乙は，法令に基づく発掘調査に係る諸届出等を甲に代って行うものとする。

（委託期間）

第3条　委託期間は，昭和54年6月26日から昭和54年9月29日までとする。

ただし，発掘作業は昭和54年8月31日までとする。

（委託料及び支払方法）

第4条　委託料は，金50万円以内とし，うち28万円については業務開始後30日以内に概算払をする。

（業務の実施）

第5条　乙は南浅間住宅団地造成予定地内，5,200㎡の分布確認調査を実施し，遺跡の広がり性格を把握するものとし，業務の実施にあたっては，事前に甲と連絡をとり，甲の施行する業務の工程に支障のないように努めるものとする。

2　乙は，業務の施行にあたっては，作業か所に作業表示旗を掲げ，関係者に腕章等を着用させるものとする。

（作業日誌の作成）

第6条　乙は，発掘作業中，作業日誌を作成しなければならない。

（出土品の取扱い）

第7条　発掘出土品の処置については，甲乙協議のうえ，乙が甲の名において，法令の定めるところにより処置するものとする。

（決算及び精算）

第8条　乙は，業務が完了したときは，業務に要した費用について決算を行い決算書を甲に提出するものとする。

2　甲は，前項の決算書の提出を受けたときは，当該決算書に基づき第4条により概算払した金額の残額について，約定した金額の範囲内において，乙と協議して精算を行なうものとする。

（業務完了届の提出）

第9条　乙は，業務が完了したときは，調査報告書に作行日誌を添えて，発掘調査完了書を甲に提出するものとする。

（疑義の決定）

第10条　この契約に定めるもののほか，この契約の実施に関し，疑義があるときは，甲乙協議して決

定するものとする。

上記契約の締結を証するため，本契約書２通を作成し両者記名押印のうえ，各自その１通を保有する。

なお８月14日に第２次調査の委託契約を結び，期間は８月14日から９月29日までとしたが，９月29日に12月31日までと変更した。

費用は50万円で，１次２次合計で100万円である。

（事務局）

第２節　調　査　日　誌

第１次調査

o昭和54年７月８日（日）　晴

信大生によるグリット設定。北東の微高地を主として，南北にA－１～５，B－１～６，C－１～７，D－１～７の計25グリット100㎡を設定。（第３図参照）

o７月９日（月）　晴

発掘作業開始。中島，倉科，信大生14名らにより，A－１～５，B－１～５の各グリットに入る。全般に土師，須恵小破片少量出土。

o７月10日（火）　晴

中島，倉科，信大16名らにより前日に引き続き掘り下げる。なおC－１～４，グリットにも入る。全般的にみると須恵器片は少なく縄文中期，晩期，土器片，凹石，石鏃等縄文期の遺物が多い。A－５，C－１・２よりは第２層粘土層下，第３層（黒色土層）最上部より人頭大よりこぶし大の礫層が検出された。

o７月11日（水）　曇

中島，倉科，大久保，信大生15名らにより前日の継続のほかD－１～３・５グリットも掘る。他にA－４・５，B－５のセクションをとる。遺物は一部土師，須恵，灰釉があるが，中心は縄文土器である。遺構はどのグリットにも検出されない。

o７月12日（木）　晴

中島，信大生18名，松商生徒14名らにより前日の継続作業。B－２の第Ⅲ層最上部層の礫は東から西へ傾斜しており，そこより縄文土器片が出土する。B－３も同様であり加曽利E式土器片出土。A－４，B－３・４，C－２のセクションをとる。C－５よりは第Ⅲ層より有柄石鏃１点，打石斧１点が出土。C－４グリット発掘開始。本郷小学校生徒見学に来る。

o 7月13日(金)　曇

中島，信大生19名，松商生徒14名らにより前日の継続作業。A－2グリットの北側拡張部をA－6とし，A－1の南北を拡張し，A－7・8とする。遺構はどのグリットも確認できない。

o 7月14日(土)　晴

中島，大久保，小林，三村，山越，信大生17名らにより，A－1の拡張部，A－8の掘り下げ，B－6，C－4～7，D－3・4の各グリットの掘り下げの他，セクション図をとる。特にC－7は礫層の上に縄文晩期の土器片が多数出土。D－3・4からは何も出土しない。C－4からは縄文中期土器片，磨石，凹石等が出る。

o 7月15日(日)　曇

中島，大久保，三村，山越，森，浅輪，信大生18名，豊科高生3名らにより，A－1の拡張部(A－9，A－11)，A－2の拡張部(A－10)およびDグリットを中心に掘る。A－11隅より釣手型土器が立った状態で出土。その東南は一面に焼土があり，厚い。C－7からは縄文晩期土器片多数出土。全体測量を行う。当初15日で完了の予定であったが，釣手型土器が出たため1日延長する。

o 7月16日(月)　晴

中島，倉科，信大生13名らにより行う。A－11とA－1の対角線を結んだ地点より小型の埋甕出土。そのほかA－1東壁より縄文中期土器片が出る。落ち込みになるらしい。他に北東隅に炉石出る。またその近くよりは土器片が多く住居址が重なっているらしい。しかし今回は作業日程が終ったのでとりあえず，第1次調査は終了する。夕刻A－1拡張部分とC－7を残して各グリットを埋める。

(白崎　卓)

第2次調査

o昭和54年8月5日(日)　曇のち晴

調査団。中島，倉科，大久保，三村，小林，横田，補助員。三村(駒沢大生)，向山(金沢大生)，山本(専修大生)，丸山(独協大生)，中込(穂高商高生)，高野(深志高生)，手塚，砂原。事務局，神沢。

朝8時半に現場に集合。今回は第1次調査におけるA－1およびC－7の2箇所を拡張し，調査することに決定。8時45分，バックホーによりA－1拡張区の表土(灰褐色土)を現地表面より－20cm程度除去する作業を開始する。引き続き11時半よりC－7拡張区の表土はぎをバックホーにて行なった。

〔A－1拡〕東方向へ3m，北および西方向へ2mずつ拡張を行なう。表土除去後，遺物包含層である黒褐色粘土層の掘り下げを行なったが，極めて粘性強く・硬い土質のため作業は難行する。こ

の層からの出土土器片はかなり脆い状態で，かつ勝坂期・曽利期・加曽利B期・及び須恵器片が混在していた。さらに掘り進めたところ，午後になって北拡内（第2号住居址上面集石）と東拡内（第3号住居址上面集石）の2箇所で集石が確認された（現地表より－60cm前後）。前者は円礫中心，後者は角礫中心と特徴があり，主な出土遺物としては前者直上に土製円板1，凹石1，後者直上に打製石斧1，凹石1，小型石棒1がみられた。

〔C－7拡〕北および東方向へ2mずつ拡張を行なった。表土除去後，黒褐色粘土層の掘り下げを行ない，堀之内式期の土器片および磨製石斧，打製石斧が出土した。

午後5時半作業を終了する。

o 8月6日（月）　曇のち雨

中島，倉科，三村，山越，西沢，手塚，向山，三村（イ），丸山，中込，三村（リ），小山，宮田。

午前8時半作業開始。

〔A－1拡〕昨日確認された集石の検出作業を行なったが，東拡内の集石中に多量の土器片が混在していたため，かなり時間をとられてしまった。縄文中期の土器片および石鏃，打製石斧等が出土。また，西側拡張部を精査したところ，この部分には黒褐色粘土層がみられず，表土下層の暗褐色土直上に直径1m前後の2箇所の円形集石を確認した。

午後5時前後より降雨のために30分程作業を中断したので，本日は午後6時半まで作業を延長する。

o 8月7日（火）　雨のち曇

中島，神沢，大久保，西沢，倉科，三村。早朝より降雨激しく，作業の開始があやぶまれたが，午前9時半ころ雨も止み10時より作業を開始。　本日はA－1拡のみ調査を行なう。降雨により溜った水を除去し，昨日に続き各集石の検出作業を行なう。無文の土器破片，石鏃，凹石，剝片石器等が出土。本日より集石の実測を開始し，夕方までに80％程度終了。　明日より集石の石を取り除き，第1次調査で発見された集石下の炉址を中心とした住居址（第2住）の調査を始めると決定。午後5時半作業終了。

o 8月8日（水）　晴

中島，西沢，大久保，倉科，三村，横田，神沢，山本，向山，三村（イ），丸山，手塚，高野，中込。

〔A－1拡〕午前8時半作業開始。午前中に集石実測図およびグリット内集石位置図作製を終了。まず北拡内の集石除去を行なったところ，集石下より多数の土器個体が出土。作業は，覆土と床面との差違判断が非常に難かしかったため，すでに発見されている炉址から床面を追う形をとったが，本日はピットおよび壁の一部を確認するにとどまった。なお，床面直上には加曽利E期の土器個体1が見られただけで，他の土器個体は床面から5cm～10cm程浮いて出土していた。東拡グリット南壁集石直上部からコップ形小型土製品出土。

〔C－7拡〕拡張部の掘り下げを行ない，土製円板3点，注口土器注口部を含む多数の土器片および打製石斧，磨石等が出土。午後6時半作業終了。

o 8月9日(金)　晴

中島，倉科，山田，三村，西沢，手塚，山本，向山，三村(イ)，丸山，島村，堀江，中込，赤木。

〔A－1拡〕午前8時半作業開始。昨日に引き続き，住居址の床面・壁の検出，精査および東拡内の集石除去作業を行なう。床面はあまりはっきりしておらず，炉址の周辺に焼土・炭化物が厚さ2～3cm程堆積していた。壁は現時点では北壁の一部がはっきりしているだけである。また東拡内の集石下は他と比べ覆土が深いため，もう一軒住居址(第3住)があるものと思われ，掘り下げてみたところ土器個体が密集していた。典型的な縄文中期土器廃棄形態と思われる。なお集石中に石皿，打製石斧が含まれていた。

〔C－7拡〕昨日に引き続き掘り下げを行なったところ，拡張区全面に渡って集石が確認されたのでその集石の検出作業を行なう。土製円板2点をはじめとする多量の土器片は集石中に食いこむ様に出土しており，縄文後・晩期特有の出土状態であった。石鏃出土。午後5時半終了。

o 8月10日(金)　晴

中島，大久保，三村，倉科，山本，向山，三村(イ)，丸山，三村(リ)，高野，本郷小学生10名。

A－1拡は第2住炉址内の精査及び第2住床面と壁の精査。炉址内上層覆土より骨片を検出，また炉址床直上中央部分に八角形の土器が逆位に置かれていた。本日で第2住の精査を終了。第3住は昨日に続き掘り下げを進めるが，土器が多く難行する。第2住南東部床面が第3住の上に貼り床されているものと判明。凹石，石鏃等が出土。C－7拡は集石の検出作業。東拡内より高坏脚部(?)が出土。連日猛暑が続き参加者全員がバテぎみであった。

o 8月11日(土)　晴

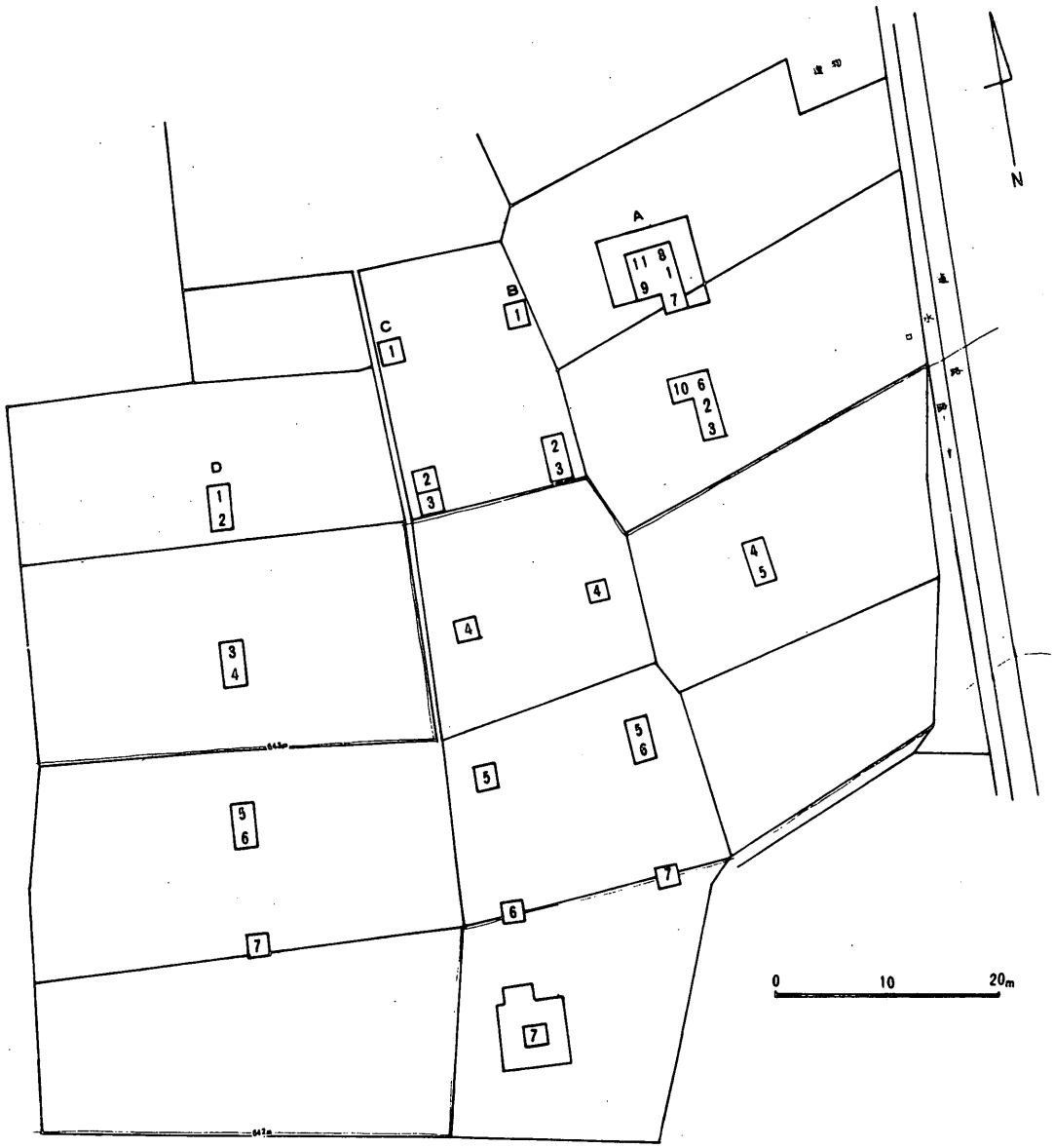
中島，倉科，大久保，浅輪，三村，西沢，丸山，向山，三村(イ)，山本，三村(リ)，中込，高野，小学生9名。

A－1拡は第2住の清掃，写真撮影及び実測図作製。第3住は掘り下げを継続するが，土器個体が多く，いまだ床面に達せず。石槍，凹石出土。C－7拡は，集石の写真撮影，実測図作製。終了後，石を取り除いたところさらにその下に石が続き厚い堆積の集石と思われ，遺構としての確認は難かしい。土偶胴部出土。

o 8月12日(日)　晴

中島，山越，三村，倉科，浅輪，神沢，横田，向山，山本，三村(リ)，高野，中込，宮沢，高木，牛山，上原，竹村，宮沢(ア)。

午前9時作業開始，午後5時半終了。A－1拡は第2住実測図作製終了。炉址内土器の取り上げ炉址床の精査。炉址床直上には石が3個平坦に置かれ，他は粘土。焼土層も不明確で火熱を強く受け



第3図　グ リ ッ ト 図

た状態ではなかった。貼り床内に炭化物が散乱。第3住，出土土器を写真撮影後取り上げる。勝坂期のものと思われる。C－7拡は集石の精査。多量の縄文晩期土器片，石鏃，打製石斧等出土。遺構としての確認はできない。本日で一応第2次調査は打ちきりとし明日からは残務整理期間とする。作業終了直前，激しい降雨にみまわれたため，急拠，遺物を団長中島豊晴氏宅へ搬入する。

o 8月13日(月)　晴

神沢，宮城。第3住床面確認、精査。昨夜来の降雨のため溜った水の除去に手間どる。

o 8月14日(火)　晴

横田。C－7拡部西北隅集石の精査，掘り下げ。

o 8月15日(水)　晴

中島，横田，島田。A－1拡は第3住床面確認終了。床面の精査。C－7拡は昨日に引き続き集石の掘り下げ，精査。薄手の鉢，星形石鏃等出土。

o 8月16日(木)　晴

中島，横田，三村，島田。第3住の床面精査。C－7拡は集石の精査。土偶顔面等出土。A・C両区ともシート等で覆いをかける。テントの撤収。

（山本紀之・丸山正一郎）

8月29日(水)晴　西沢，横田，神沢，大日向にてC－7集石遺構北側精査および集石測量。

8月30日(木)晴　西沢，横田，神沢，大日向にて前日に引き続き作業を行なう。

8月31日(金)晴　西沢，横田，神沢，大日向により作業を行ない，本日をもって完了させる。

9月18日(火)晴　夜，中島団長宅にて，中島，倉科，大久保，山田，三村，西沢，神沢らにて，報告書執筆分担および，遺跡名について検討し，当初使っていた〝からおけ遺跡〟を柳田遺跡とする。

（事務局）

第3章　遺　　構

第1節　住　居　址

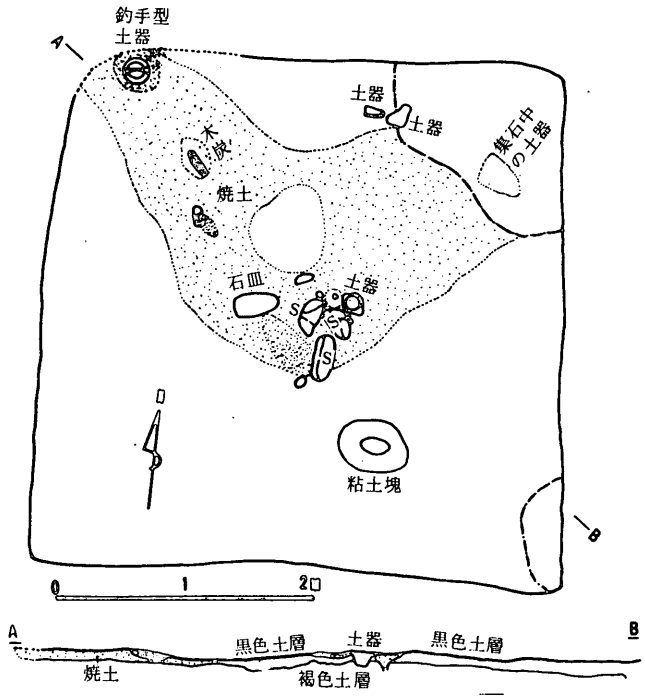
(1)　第1号住居址　（第4図・図版2）

本址は発掘地点の北側で第2，第3号住居址に接してあり，グリッドNaではA－1，8，9，11にあたる。しかし，第2，第3号址との切り合い，及び柱穴，壁の不検出等により，そのプランは不明であるが，一面に焼けた焼土を中心として，この遺構を第1号住居址とした。

本址の覆土よりは遺物の出土は僅少でありその中央とも思われるA－1北側より焼土及び炉石らし

き石が検出され，また灰色の粘土塊を検出した。また東側最下層部の粘土層中より，かなり大きな土器片が発見され，これが後日の調査により，第3号住居址の「土器だまり」の一部と判明した。

全体の北側寄りには拳大から人頭大の礫があり，その礫下には一面に焼土が広がっており，その厚さは4～12cmで，その北西端より釣手土器がほぼ完形のまま立った状態で検出された。釣手土器より南東約45°に長さ37cm，径3cm内外の生焼け炭木・栗材が途切れ途切れに連って検出された。



第4図　第1号住居址実測図(1:60)

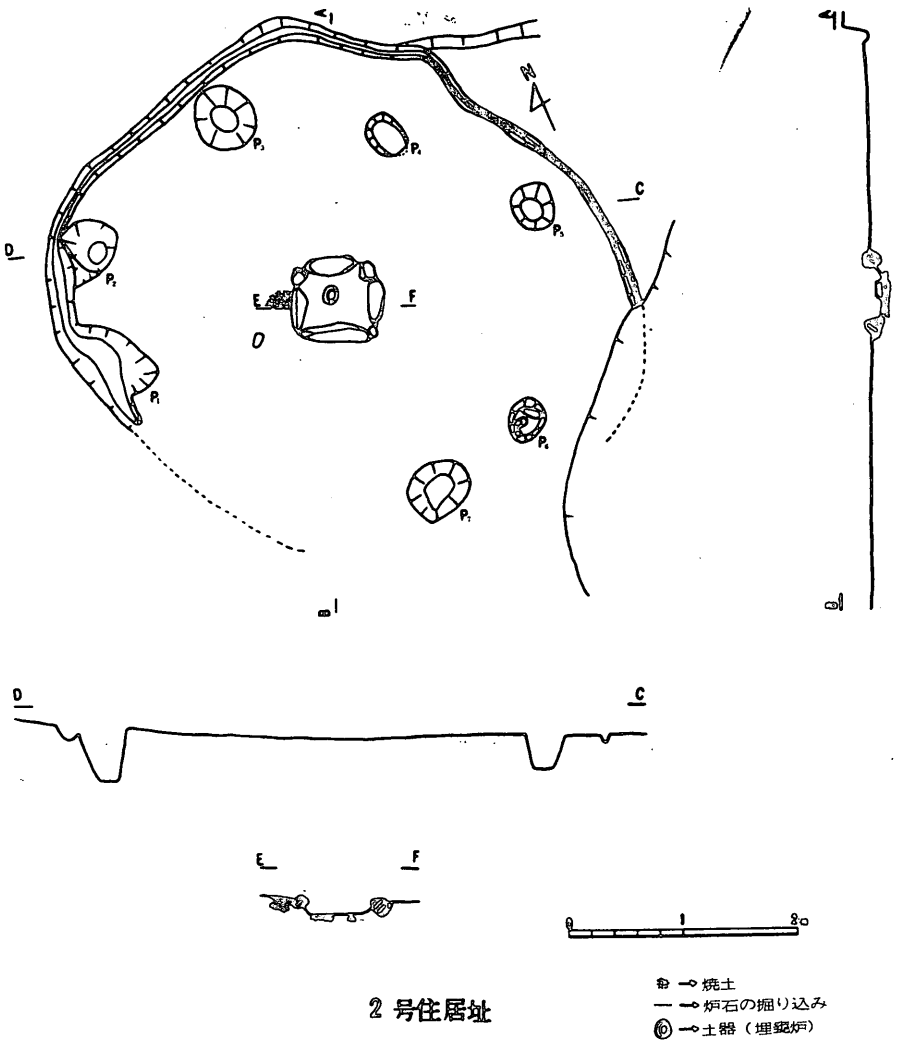
釣手土器の検出状態は，その上端を第3層（黒色土，－60～－100cm）に底部は第4層（褐色砂土）に位置していた。釣手最上部より約120cm下った位置から，胴部浅鉢の口唇部の立ち上りやや下まで，釣手型土器を中心にして，東西径30cmの範囲で，東側は15cm，西側約7cmの焼土が被われていた。底部には焼土の附着はなく，2～3cmぐらいの褐色粘土まじりの砂層に埋没し，その直下は固い小円礫まじりの黄褐色砂層が検出された。更に釣手土器より数cm西北焼土下には，強固な立ち上りが認められ，或いは第1号住居址のプランの一部かとも推察される様相を示していたが，遺構が褐色土層中であり，円礫等の混入があったため，確認できずに終った。

また当初炉石かと思われた石の西側に長径38cmの石皿（第32図）が伏った状態で検出され，東北に接して焼土の中から小型の完形鉢型土器（第11図2）が立った状態で検出された。その南約1mに60×50cmの青色粘土塊が検出された。

（宮城孝之）

（2）　第2号住居址　（第5図・図版4）

第2号住居址は，その南部が南接する第1号住居址との間で一部切り合いがみられ，明確な全体像を掌握することはできなかったが，今回の発掘調査においては，唯一のかなりまとまった竪穴住居址として，とらえることができた。規模は，その上面径がほぼ東西方向に525cmを記録し，南北方向は，



第５図　第２号住居址実測図（1:60）

南部の輪郭を欠くものの，推定される長さは約460cmで，全体としては，不整円形乃至は隅丸方形状を呈するものであった。

周壁のつかめた南西部から北部，東部にかけては，竪穴内の壁にそって周溝がめぐっており，その巾は約10～20cm，深さは5～12cm程度であった。壁高は，西壁が約13cm，北壁が約17cm，東壁が約0～5cmで比較的浅く，南部では確認できなかった。ピットは址内に7箇所認められた。P_1は西壁に接しており，その上面径が東西54×南北80cmを記し，深さ約25cmの不整形を示しており，P_2は上面径50×50cm，下面径15×20cm，深さ51cm。P_3は上面径55×60cm，下面径20×25cm，深さ47cm。P_4は上面径30×40cm，下面径20×35cm，深さ18cm。P_5は上面径35×40cm，下面径15×20cm，深さ30cm。P_6は上面径30×40cm，下面径20×25cm，深さ15cm。P_7は上面径45×

55 cm，下面径 20 × 30 cm，深さ 21 cmをそれぞれ記録する。この中，本址の主柱穴とみられるものは，P_2，P_3，P_5，P_7であろうと推察される。P_3 のピット内には，黒褐色土に混じて柱を固定したと思われる石詰が若干認められる。P_4 は浅く，穴の方向が北を向いていて，本址とは直接関係がない様に思われるし，P_6 も浅く，内部にはこぶし大程度の石 3 個が認められる。床面は平坦で固い仕上げとなり，凹凸なく状態は良好であった。址のほぼ中央部に石囲炉が検出された。石囲炉の外径は，東西方向に長軸をとって 80 cmを数え，短軸は南北方向に 65 cmを記録する。内径は東西 60 cm，南北 43 cmであった。炉は 4 面を石で囲い，その平面径は，南側の石が 18 × 67 cm，西側は 15 × 38 cmと 12 × 15 cm，北側は 15 × 48 cm，13 × 16 cm，東側は 15 × 36 cm，6 × 9 cmの石が組合わされていた。炉床部は，こぶし大の礫を敷きつめ，その上に約 2 cmの粘土を張り，炉床を固めて調整し，仕上げをよくしており，炉底は意外に浅く，その炉壁の高さは，北と南が約 14 cm，西が 13 cm，東が 9 cmであった。炉内には木炭化物の粉末を含む黒味をおびた土と，その底部にうすい焼灰を残す堆積が認められ，中央ほぼ西寄りの炉床に，口縁部をつけて倒立する，曽利 1 式相当の小形欠損土器が，1 個おかれていた。土器内には，炉内と同様の木炭化物が入り，動物の火焼骨の細片が 2，3 認められる。又，炉址の西側の石に接して，その外方に 15 × 20 cm，厚さ 5 cm程の焼土の堆積を認める。

（大久保知巳）

（3） 第 3 号住居址 （第 6 図・図版 5 ）

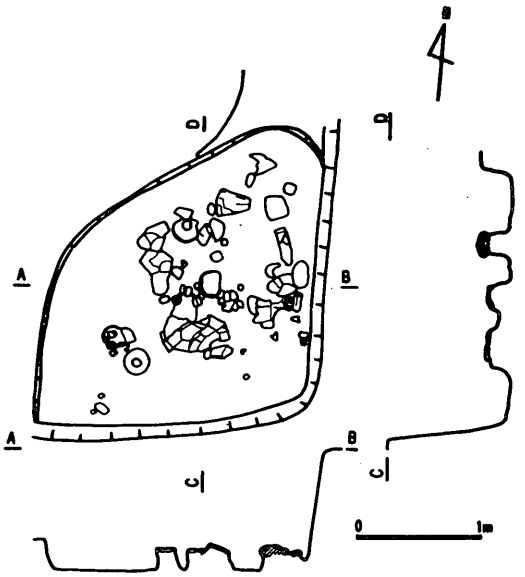
本址は第 2 号住居址の調査の過程で，拡張グリット東南部に存在が推定され，調査終了直前に床面が確認された竪穴住居址で，本址直上第 3 号集石の精査中に深い落ち込みとなって発見された。表土下 91 cm，第 4 層（ 褐色砂土 ）より－25 cmを計り，床面より約 4 cm上部には厚さ 18 cmの一括土器群が検出された。本址が検出された東南部拡張グリッド設定範囲はその東側で筒井通矩氏の私有耕作畑地に境界し，南側は大量の排土が集積されていて，拡張作業は期間その他の制約により不可能であった為に東側，南側ともに未掘をよぎなくされた。西側及び北西部は第 2 号住居址によって切られ，レベル差 25 cm上部の第 2 号住居址の貼床の下部に埋没覆われているものと推定される。従って，プラン及び規模については全く不明のまま調査を打ち切った。

遺物は床面直上約 4 cmの極めて粘着力の強い第 3 層（ 黒褐色粘土層 ）の覆土より検出された石槍 1 点，凹石 5 点の石器と，掘り下げ範囲及び周囲の側壁内全体に約 18 cm内外の厚さで，足の踏み場もない程の大量の土器が，強固な粘土に張りついた状態で，大部分が横体位で散乱状に出土した。土器個体数は約 20 個に及んだが半完形品ないし，それに近いものと破片のみで完形品の出土はみない。

尚，未掘部分の四方に拡がっている埋没土器片の追求を断念したことは，その全貌を知る為にも誠に遺憾に堪えない。東西 200 cm，南北 200 cmの不整方形状の確認範囲が余りにも狭小の為，南西部隅側

壁下の床面上に炭片の散乱を検出したのみで住居址を確認する何等の遺構，遺物を他に床面上に検出されていない。尚，検出された床面も褐色砂土なるが故に乱れも見られ明確さに欠ける嫌いがあった。

第3号住居址は，5〜20cm上部の覆土より出土の遺物の遺存状態から推察して，かゝる大量の勝坂様式土器の半完形品の蝟集状態は，土器捨て場，中期中葉勝坂期に類例の多い吹上パターン（松本平に於ても，古くは塩尻市平出，片丘小丸山6号住，東筑波田町麻神，朝日村熊久保，南安三郷村南松原遺跡等がある）所謂る土器溜り的な様相を呈し，竪穴住居址廃絶後の凹地を利用しての二次的な特殊遺構面とを併せ持つ竪穴住居址と推定される。



第6図　第3号住居址実測図（1：60）

即ち，本址廃絶後，この凹地を利用し，何等かの宗教的な行事が行なわれたものと推定される。

本址の時期は覆土より出土した土器勝坂式をもって，中期中葉勝坂期に位置するものと思われる。

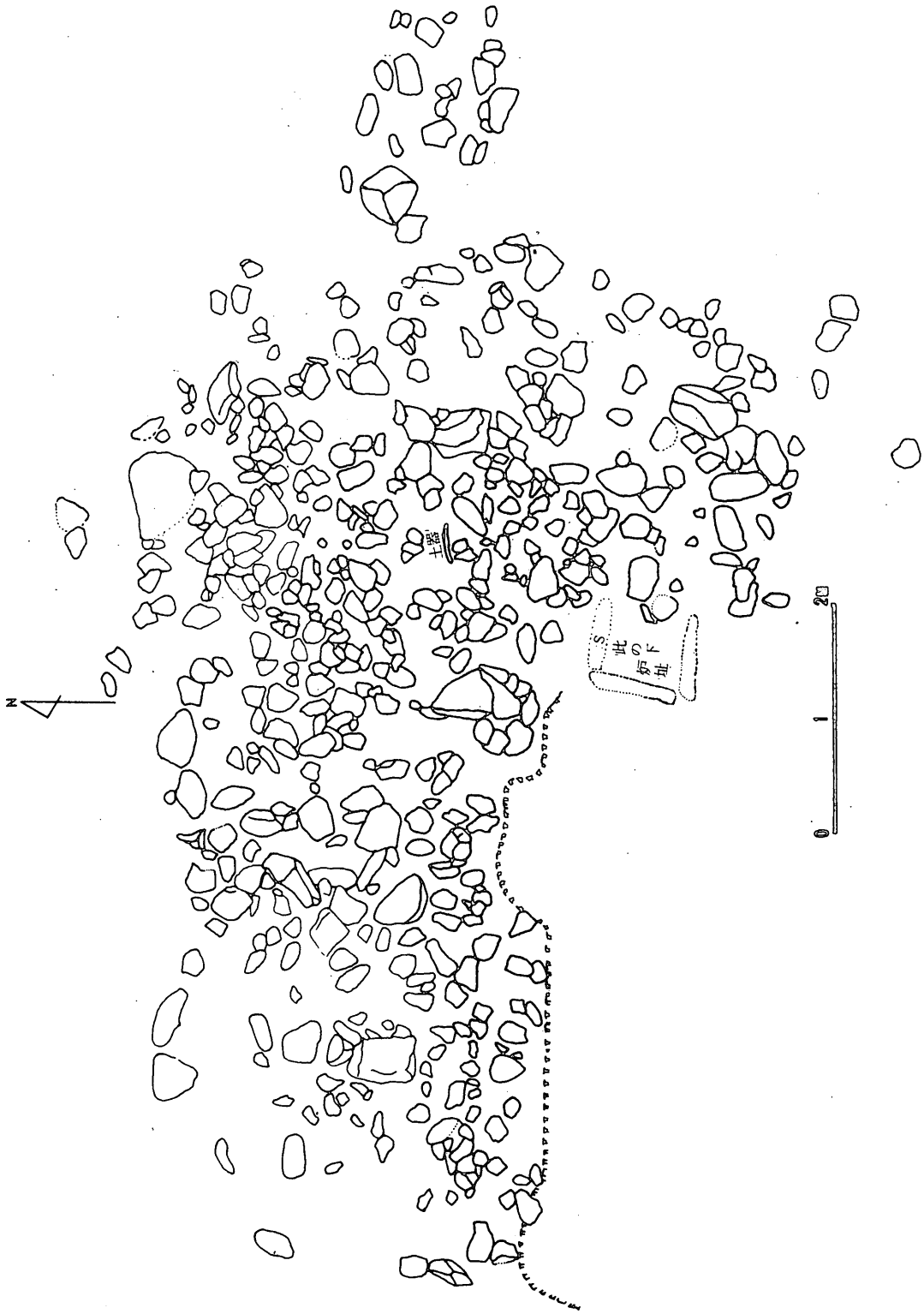
発掘精査後セクション断面図作成時，南東隅部側壁下に炉石と思われる露出部10cm×12cmの長石が検出され，探索の結果表土下107cm（第5層小円礫混り黄褐色砂層）より下層にかけて拳大〜小児頭大の円礫が東壁から南壁にかけて乱れ落ち込んで検出され，東側壁面下には平板状円礫にはさまれて，斜目に口縁部を下方に向けて，横体位の状態で土器片が出土した。明らかに第3号住居址とは異なるものと思われる。それらの礫は炭片を噛み，明らかに火を受けた痕跡が観察された。

（三村　肇・川越正義）

第2節　集　石　遺　構

（1）　第1，2号集石　（第7図・図版2，3）

本遺跡の，1号及び2号住居址の上面に所在した集石遺構は，第2次発掘調査時において，表土下約30cmの第2層内に検出される。然しその南西部は，第1次発掘調査時において，発掘された該当範囲が僅かであったのと，上方よりの土石流出による堆積と判断されて，すでに除去されており，失われていた。従って，集石は完全な姿ではとらえることはできなかったが，その分布範囲は，1号住居



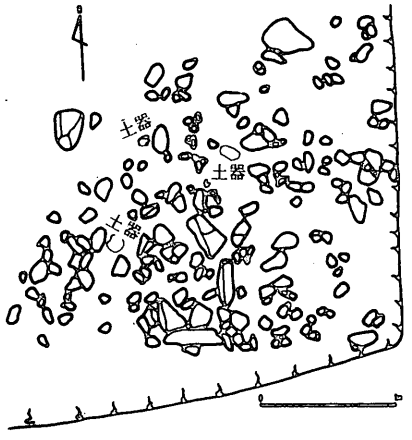
第７図　第1,第2号 集石実測図(1:60)

址の1部の上面と，2号住居址の上面にわたるものであって，ほぼその輪郭はつかむことができた。それによると，規模は東西方向に長軸が走り約450cmを数え，短軸は南北方向に走って約340cmを記録し，隅丸の長楕円状の堆積を示していた。集石密度はかなり濃く，下層調査のため除石した際の調べでは，総個数が約468個であった。集石を構成した石は，地元産の粉岩質の角のとれた自然転石で殆んどしめられており，割石は全体の1パーセント程度で，量的にはすくなかった。石の大きさは，大が8×25×37cm，15×21×30cm，10×30×30cm程度で約10個位，人頭大のもの若干の他は，こぶし大程度の礫が大部分をしめていた。この集石内より，別項詳述の凹石，石鏃等石器類と，個体のややまとまった土器を含む土器片等が混在した。土器類は，縄文中期中葉の，加曽利E式の初期段階の施文を示すものが多く，集石構築時期の解明に手がかりを与えている。

（大久保知巳）

（2） 第3号集石 （第8図・図版3）

本址は，第2号住居址の調査の為設けられた拡張区の東南部発掘中に発見された。表土より－40cm，第2層（赤褐色粘土層）に遺存し，径東西290cm，南北240cmを計り，やゝ不整方形であったが一部西側は第2号住居址を覆っていた。併行して検出された第2号集石と同レベルから東南に－10cm深く傾斜状に落ち込んでいた。尚，第2号集石の円礫に比し本址は角礫が主体をなして一部焼け石が混在し，不鮮明ではあったが，第2号集石と本址との間には区画が見られ，明らかに相違が感じられた。集石の直上及び集石内には大量の土器が蝟集していた。更に中央部には11cm×125cmの方形ミニ石囲いが検出され，鉄平石の蓋で覆われていた状態で検出され，祭祀的な特殊遺構の様相を示していたが精査の結果，遺物の検出を見なかった。然し，少し離れて径2cm，長さ4cmの土偶の下肢部が1点発見された。本址を構成している石材は安山岩河原石が主体で，拳大がもっとも多く，最大は40cm×30cmであった。総数は約127個を数えた。尚，本址の包含層の第2層（赤褐色粘土層）は乾くと強靱となって移植ごてが曲る程の固いブロックとなって発掘作業を困難とし，土器表面の紋様が剝れ，不鮮明となる恐れもあり，水まきをしながら調査を行なった。



第8図　第3号集石実測図（1:60）

遺物は，10数個の打製石斧，黒曜石片，凹石の石器と大量の土器片が出土した。土器片は加曽利E期に比定されるものが全体の大部分をしめ，他に2点の須恵片が混入していた。

本址の集石は自然堆積より人為的な働きかけによるものと推察しても大過ないものと思われる。一

部ではあるが火熱を受けた痕跡のある角礫，２次焼成を受けたと思われる土偶の打ちかゝれた脚部１片の出土，そして，ミニ石囲いを見ても明確であろう。

（三村　肇・山越正義）

第３節　縄文晩期遺物出土地点　（第９図・図版11）

本地点はＣ－７グリットを中心とするものであり，集石とともに多数の縄文晩期遺物を検出した地点であるが，遺構の確認ができなかったため，表記のような呼称をもって記述するものである。

本地点は今回分布確認調査の中央南端に位置し，遺跡全体としてはほぼ中央に当るものと思われる。なぜならば今回調査以後も，この南側水田土手より縄文晩期遺物包含層が表出しており，かなりの土器片が採集され，一部には生活面を感じさせる焼土の存在があるからである。

本地点は縄文中期土器を出土している第１～３号住居址に比して南へ 70 m隔たり，比高は第２号住居址床面より60cm高い。

耕作土層，褐色土層の次に黒色土層があり，この層中に礫および遺物が散乱しており，扁平の大型の石は北西－東南方向にやや直線状に数個，同一レベルで連なり，一部の石には焼痕，擦痕も認められた。また長径 25 cm程度の石が集中的に敷かれた部分が，東北部に１基（８ヶ）北部に１基（５ヶ）あり，これらの石に限定すると，やや円型の基盤をつくる。

北側部分の集石は北奥へ拡大する傾向であり，遺物包含層は北方へやや傾斜して上る。北西部には黒耀石剝片が集中的に多く，やや大型のブロック状の剝離痕のあるものも多い。トレンチ西壁の南寄りで集石が直線上に断絶する。

集石は直径 10 cm程度の礫下に扁平な大型石が存在しているが，礫と土器片との関係，あるいは生活面の確定などができず，また範囲についても調査面積は少なく，判断が下せない。

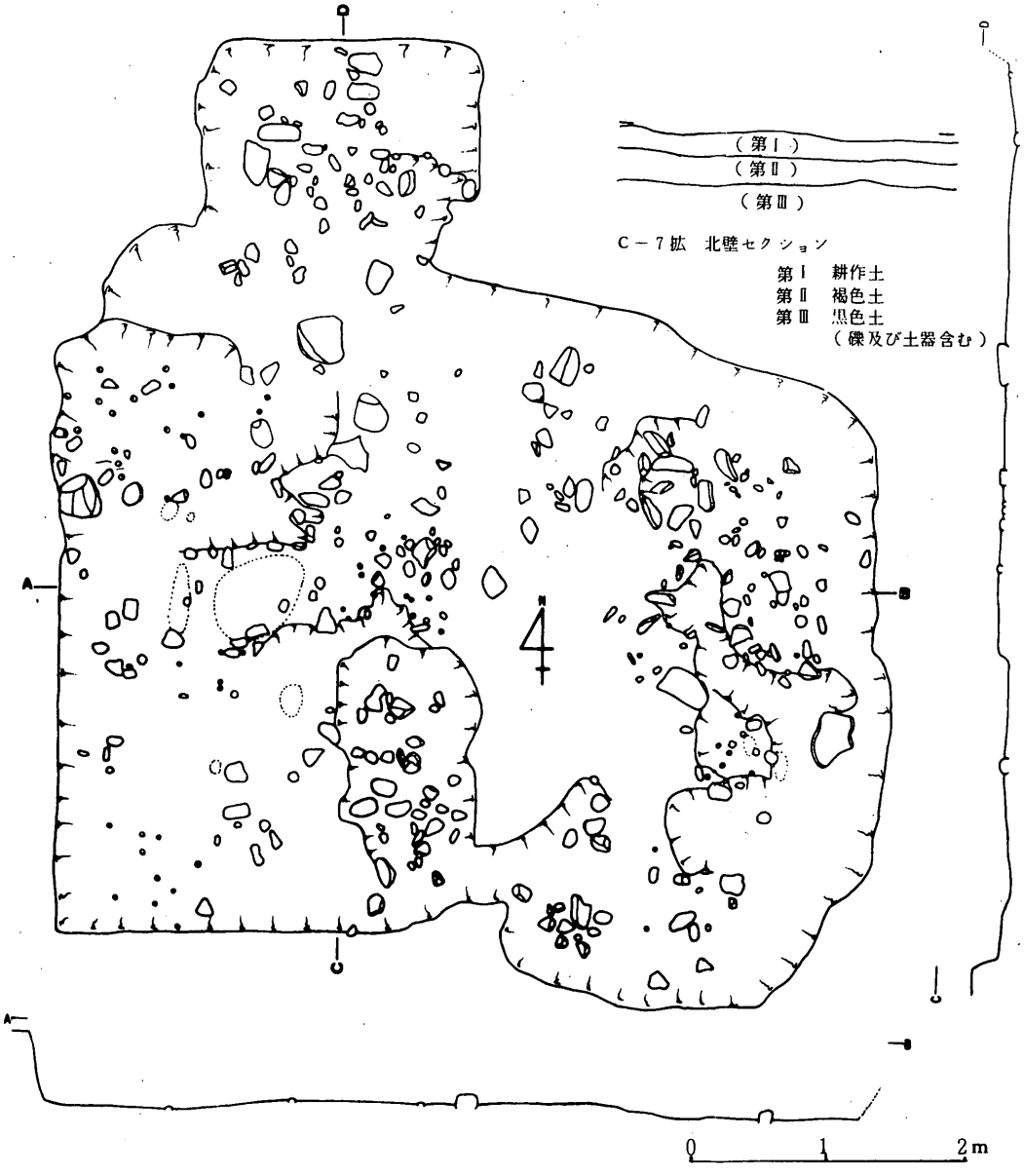
ただ周辺ではほぼ真南へ約900 m隔てた大村 312番地地籍で同様な集石状態で，多量の縄文晩期土器片が出土しており，また2,200m南西よりの女鳥羽川河床における女鳥羽遺跡からも同様状態で遺物の出土をみていることなどから，同時期の遺跡と思われる。

（西沢寿幸・浅輪俊行）

第４節　その他のグリット　（第10図）

（１）　Ａグリット

Ａグリットは遺跡の最東部の南流する水路から約 20 mの地域に 2×2 mのグリットを北から１，２



第９図　縄文晩期遺物出土地点実測図（1：60）

・3，4・5と設定し，1と2，3と4グリットの間隔は各10ｍであり，A－1では住居址検出のため拡張し，A－2，3では北側に6，10と拡張した。

A－1を中心とした地点は住居址の項で述べているのでここではA－2を中心とした地点とA－4，5の地点について述べると，A－2地点では拳大から人頭大の石が多量に出土し，特に北側寄りに厚くあった。これらの礫と共に土器・石器が混入していたが，集石遺構とも言い難く，また土器片は角

摩耗しているなど，自然流を思わせるものである。

地層は耕作土，茶褐色土，黒色土，褐色土層で，遺物は第2層最下層より第3層の黒色土層に散在していた。

A－4，5地点では黒色土層に至るまでに漸移層があり，遺物は黒色土層に多いが，礫，土器片の量は少なく，遺構はない。出土土器片は縄文中期がほとんどで，僅かに土師，須恵の小片が混っている。

（2） Bグリット

Aグリットの西側12m離れて，南北にB—1～7までに，5ブロックにほぼ10mおきに設定した。この間には3段の落差があるが，B－2の場合，地表下50cmの第4層黒色土層上面より縄文中期土器片が検出され，地表下80cmの黒色土層中に砂礫，人頭大の礫があり，マイナス100cmで摩耗のはなはだしい小土器片1点を検出し，更に150cmでは黄褐色の砂礫層に変っている。これらによると河川の氾濫による堆積と思われ，上部黒色土層面では遺構の検出ができなかった。

この他のグリットについても大同小異であり，地表下40～50cmの黒色土層より遺物が検出されている。

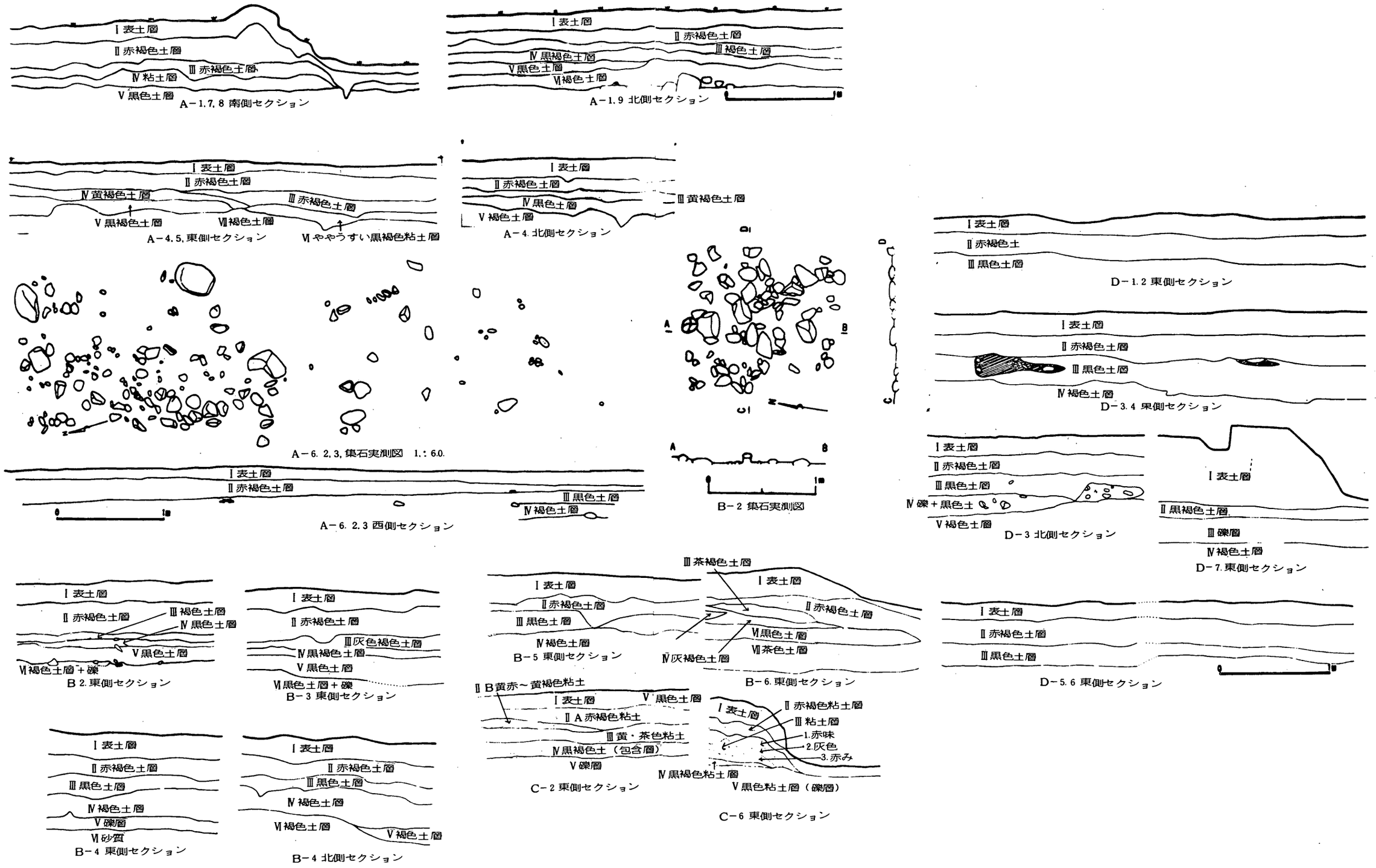
（3） Cグリット

Bグリットの西側12m離れて南北にC—1～7まで，2，3の連続を除いて10mおきに設定した。C－7では縄文晩期遺物の出土が多く，拡張調査して別項で述べてあるので省くが，C－4を中心として全般についてふれると，遺構は1ヶ所も検出されなかったが，各グリットには遺物の出土があった。C－4では地表下65cmの小礫を含む黒褐色土層より 縄文中期土器片および凹石・磨石等が検出された。土器片はいずれも摩滅している。C－4では比較的土器片がまとまって出たが，他グリットは散発的である。

（4） Dグリット

遺跡の西側にあり，Aグリットから30cm西で北からD—1～7の7グリットを設定した。D－1，2，D－3・4，D－5・6はいずれも接している。各グリットとも遺構の検出はなく，遺物も他グリットより少なく，石鏃1の他縄文土器片，須恵器片少礫片を出土したにすぎない。

（宮城孝之・白崎　卓）



第10図　A～Dグリット集石およびセクション図

第４章　遺　　物

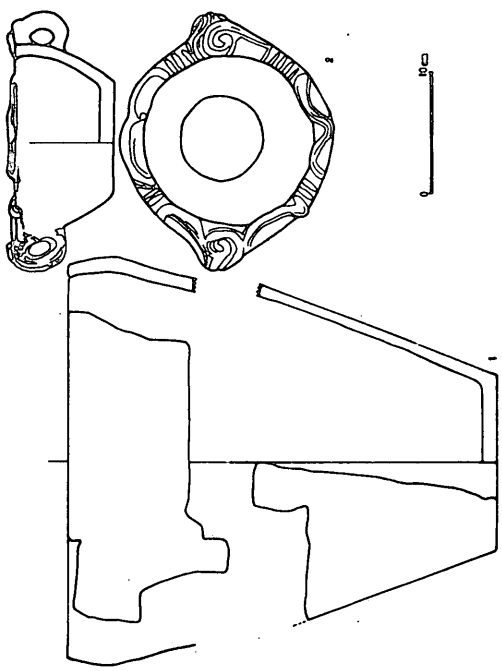
第１節　土器・土製品

（1）　第１号住居址出土土器　（第11・12図・図版６・７）

第１号住居址およびその覆土からは比較的遺物が少なかったが，優品の釣手型土器と小型の鉢型土器の出土があった。

１は，無文深鉢の口縁部とその底部であるが，中間胴部がなく，全体の高さは不明であるが，ほぼ35cm程度と思われる。器厚は0.8～12mmで，底は無文の平底である。色調は，黒灰色を呈し，胎土はよわくもろい。１号住居址東側より出土。

２は，後述の釣手型土器とほとんど同時期の完形の鉢型土器で口縁上部に施文があるほかは無文である。丸い小ぶりの把手が一対あり，その上部は平らで口縁と連なり，隆帯の唐草文が施され，口縁には，大きな波状にも似た隆帯が２ヶ所あり，唐草文と波状文の間の４ヶ所にたてに，二本の隆帯を施している。胎土は良いが，焼成がややよわく，やわらかな感じを与え，色調は胴部は，茶褐色であるが口縁は，黒色を呈しており火にあたったことをうかがわせる。この土器の使用については，文様が上面のみに施されている点からして，上から見下すような低い位置におかれていたものと思われ，後述の釣手型土器とともに一般　器とは思えない。



第11図　第1号住居址出土土器実測図（1：6）

３は，釣手型土器であり，特殊な形態であるので出土状況をも含めて　　項を改めて詳述する。

（宮城孝之・白崎　卓）

釣手土器出土状態及び考察　（第12図・図版６）

釣手土器はA－11グリットの西北隅の堆積土を除去，焼土レベル迄の掘り下げ作業中に発見された。

第3層（黒色土）に直立した形状で南々東に正面（或いは裏面）を向けて，釣手の頂上部分が片面の貼りつけ隆起渦巻紋が削り取られて出土した。上端は表土下50cmに位置していた。第1号住居址検出の竪穴地床炉より，A－11グリット西北隅の側壁に向かって拡がりを見せる焼土は，4～12cmの厚さを持ち，その先端は山形を呈し，釣手土器をすっぽり包む状態で終っていた。尚，炉の中心から釣手土器の方向に倒れ込むような状態で検出された炭化材との関連性が伺われた。

釣手土器の埋没状態は釣手頂上部より約12cm下った位置より胴部浅鉢の口縁よりやや下った位置まで焼土に被われていた。底部は褐色粘土まじりの砂層に接し，その直下は固い小円礫まじりの黄褐色砂層となっていた。更に釣手土器より数cm西北焼土下には1号住居址の側壁とも感じられる土層が認められた。

尚釣手土器は底部外面に焼土の付着が見られる所から，黄褐色粘土混り砂土に置かれた可能性が強く感じられた。底部の特徴的なヒビ割れは落下時の衝撃によるものと考えられる。又第1号住居址の焼土の厚さと拡がりは1度や2度の火災による堆積とは考えられない点や，60×50cmの青色粘土塊及び焼土内から検出された完形小型浅鉢を併せ，特殊遺構に伴う祭祀的要素を有する釣手土器の位置付けが必要かも知れない。

釣手土器は，底径12.5cm，最大巾径24.5cm，高さ26.5cm，重さ2.5kgで，口縁部（鍔）の巾約5cm cm，器厚1.4cmに沈線を施し，釣手と90度の位置に半肉彫の右巻き渦巻文様を描き，隆起しているが，両面の沈線は異質で，片方は沈線に添って施された連続刺突が極端に少なく，正面と裏面の区別を示している。釣手部分は正三角形状で，釣手基部より厚さ9.9㎜，高さ4cmの板状粘土帯を巾5cmで，断面を「⊔」状に両端を立て，その空洞部分を4ヶ所で覆うように橋状に，厚さ12.3㎜の平行沈線を施した板状粘土板を貼り付け接合させてあり，釣手部分の施文方法は，頂上部正面に渦巻文を貼りつけ，空間部を余す処なく自在に曲，直線沈線で飾ってある。胴部浅鉢部分は無文で，釣手基部直下には強固な把手（耳）が左右1ヶずつ対になって付いているが片方は曲ってつけられている。把手（耳）部内部及び口縁部（鍔）裏面には顕著な擦痕は認められない。焼成は胴部浅鉢部分は良好で固く焼き締っているが，釣手部分は不良である。尚釣手部分基部外面には二次焼成が見られ，連続刺突の少ない片面の口縁部（鍔）は一面に黒ずんでいる。胴部浅鉢内部は一面に煤状炭化物が付着し，かなり強い二次焼成を受けたと思われる。胎土に僅かながら雲母を含んでいる。

第1号住居址の焼土中より発見された小形浅鉢は底径9.5cm，口径13.5cm，高さ8.4cmの口縁部上面のみに渦巻と沈線の施文を施し，左右に円形の把手を具備している。この鉢と釣手土器との関連性は，重要な意味を持つものと思われるが，今後の研究課題としたい。

本釣手土器は高架橋状釣手構造を具備した香炉型釣手土器で，加曽利EⅡ式に比定されると思われる。

次に参考資料として松本平で発見された釣手土器と称せられる資料を実見し簡単な計測を行い，第

1類1～6釣手形，第2類7～9手提状形，第3類10釣手としての機能を持たないもの，香炉土器形に細分して掲図した。

表2　松本平出土の釣手土器

No.	出土地 遺跡	現状	高さ（A=B+C）cm 総高(A)	釣手部(B)	胴部(C)	最大巾 cm 長径	短径	釣手部断面	把手（耳）	鍔	保管場所	備考
1	松本 柳田	完形	27	18.5	8.5	25.5	24	⊔	有	有	松本日本民俗資料館	
2	山形 三夜塚	〃	23.5	15.7	7.2	20	不明	⊔	無	〃	〃	
3	大町 森城址	ほぼ完	約24	18	6	約21	約16	⊔	有	〃	大町市立北小学校	
4	松本 赤木山	部分	27	19.5	7.5	24	不明	（　）	不明	〃	松本古屋人兄氏	釣手部7ヶ所で接続
5	波田 葦原	〃	不明	17.5	不明	不明	〃	⌓	無	〃	松商学園	
6	波田 麻神	〃	〃	不明	〃	〃	〃	▭	不明	不明	波田町教委	
7	梓川 荒海渡	ほぼ完	26	13	13	21	〃	▯	有	無	梓川村教委	
8	松本 牛の川	部分	不明	不明	不明	不明	〃	▯	不明	不明	松本市教委	
9	波田 葦原	完形	32	15.5	16.5	約16	約17.5	▯	無	無	松商学園	
10	塩尻小 丸山	部分	19	11	8	約24	不明	—	〃	〃	塩尻片丘支所	香炉型のため釣手部断面不記載

特　徴

①は頂上の一部を欠く，底部の割れヒビに特徴があり釣手部分及び胴部浅鉢内面に二次焼成が見られる。②は片側鍔及び頂上ラッパ部を一部欠く，①との類似点は多く，特に頂上部の貼りつけ渦巻文は全く①と同じである。全体に二次焼成あり。③は底部及び片側鍔を欠く，焼成不良。④の釣手部は2本の粘土帯を7ヶ所で接続させている。焼成は良好である。⑤は釣手部分の内側と口縁内部に炭化物の付着がある。⑥は15cmぐらいの釣手部分の破片である。⑦は底部及び釣手上部を欠く，胴部及び釣手部分に二次焼成があり，外面口縁部付近に炭化物が付着している。⑧は径10cmの釣手頂上部の破片，焼成は良好で，固く焼き締っている。⑨は底部を欠く，焼成は良好で，内面胴張り部に炭化物が付着している。

（三村　肇・山越正義・浅輪俊行）

参　考　文　献

波田村麻神遺跡第２次発掘調査報告書

梓川村荒海渡遺跡発掘調査報告書　　1978. 3

長野県考古学会誌第８号　塩尻市小丸山遺跡緊急発掘調査報告書　　1970. 3

（2）　第２号住居址出土土器・土製品

土器及び土製品（第13図１～24）

本遺跡の２号住居址及びその上面に所在した，集石遺構内からの出土土器は，比較的少なく，いずれも破片乃至は欠損品で，完形品には恵まれなかった。従って報告書活用土器も，第13図と第14図にみられる如くであった。以下，類別を試みその各個について記述したい。

第１類土器（第13図１～４）

本類には１～４が所属する。これらは，あるいは同一個体かとみられるが，器厚は0.8～1cmとやま厚手となり，焼成は良く，まだらな黒褐色を呈する。胎土に粒の荒い長石を含み，壁面調整は概してよい。然し内壁には，胎土中の鉄分が焼成時に熔解して吹き出し，ところどころそのまま固着している。１は平縁口縁部の破片で，口唇に1.3cmの巾広い面取りがあり，僅かに外反する。２～４は頸部から胴部にかけての破片とみられる。施文は，口縁部に６cm巾の無文帯を，１条の隆帯を横走させることによって形成し，その隆帯に沿う上部に，内より外へ向けて0.5cm径の穿孔が１箇所みられる。頸部から胴部にかけては，無文地に約2.5～3.5cmの，巾広い平行沈線が山形に施文されている。この施文は縄文後期初頭の，大安寺式や称名寺式の直曲沈線による文様とは，趣を大分異にしており，おそらく中期前半に含まれる１群かと判断される。

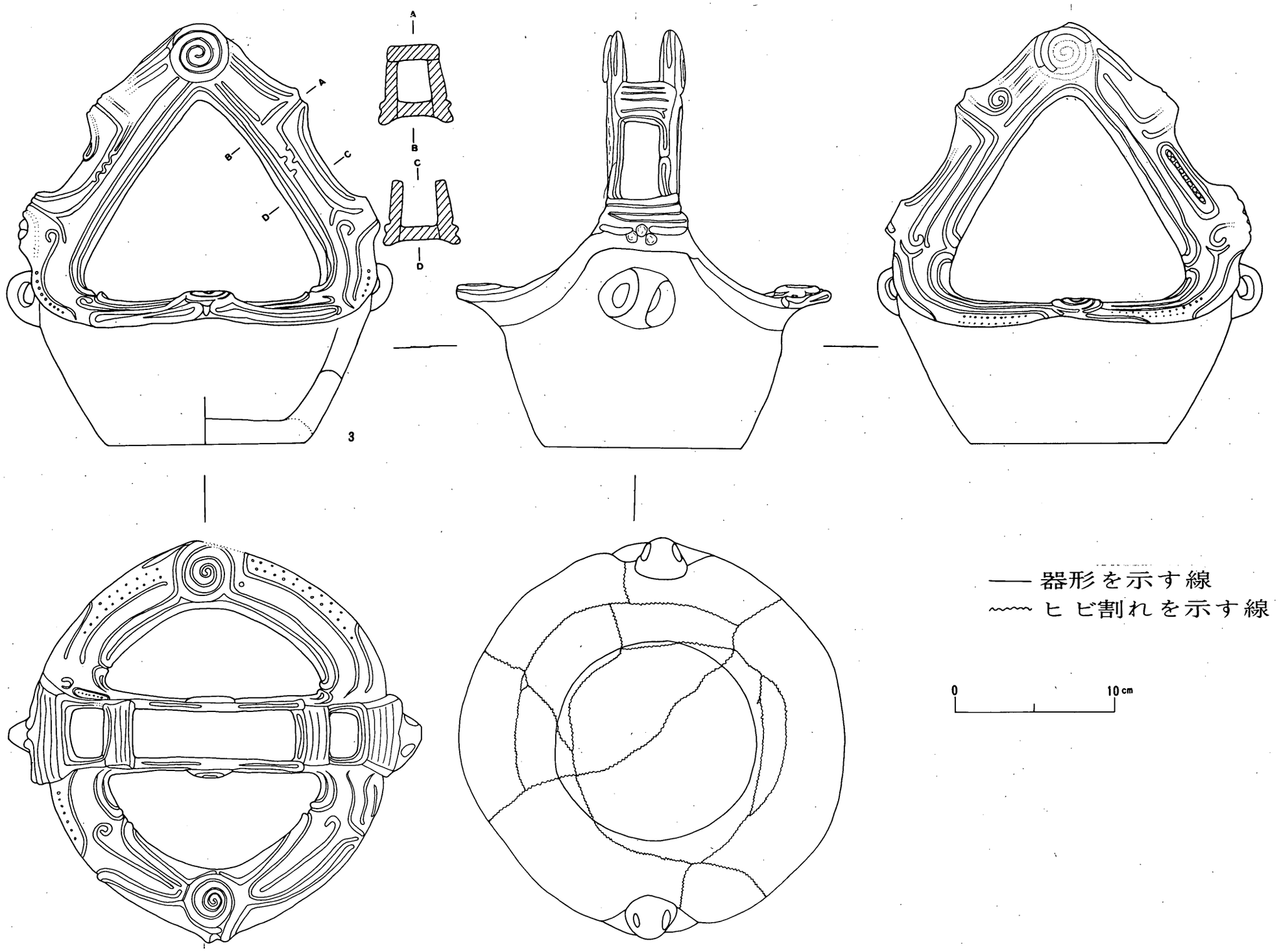
第２類土器（第13図５～８）

いずれも縄文の施された土器を一括した。器厚は，５と８が0.5cm，他は0.8cmとなる。共に焼成は良好で赤褐色となり，胎土に多量の輝雲母を含む。５～７は胴部破片，８は底部に近い部分の破片であるが，縄文中期の勝坂器形の特徴を具現している。

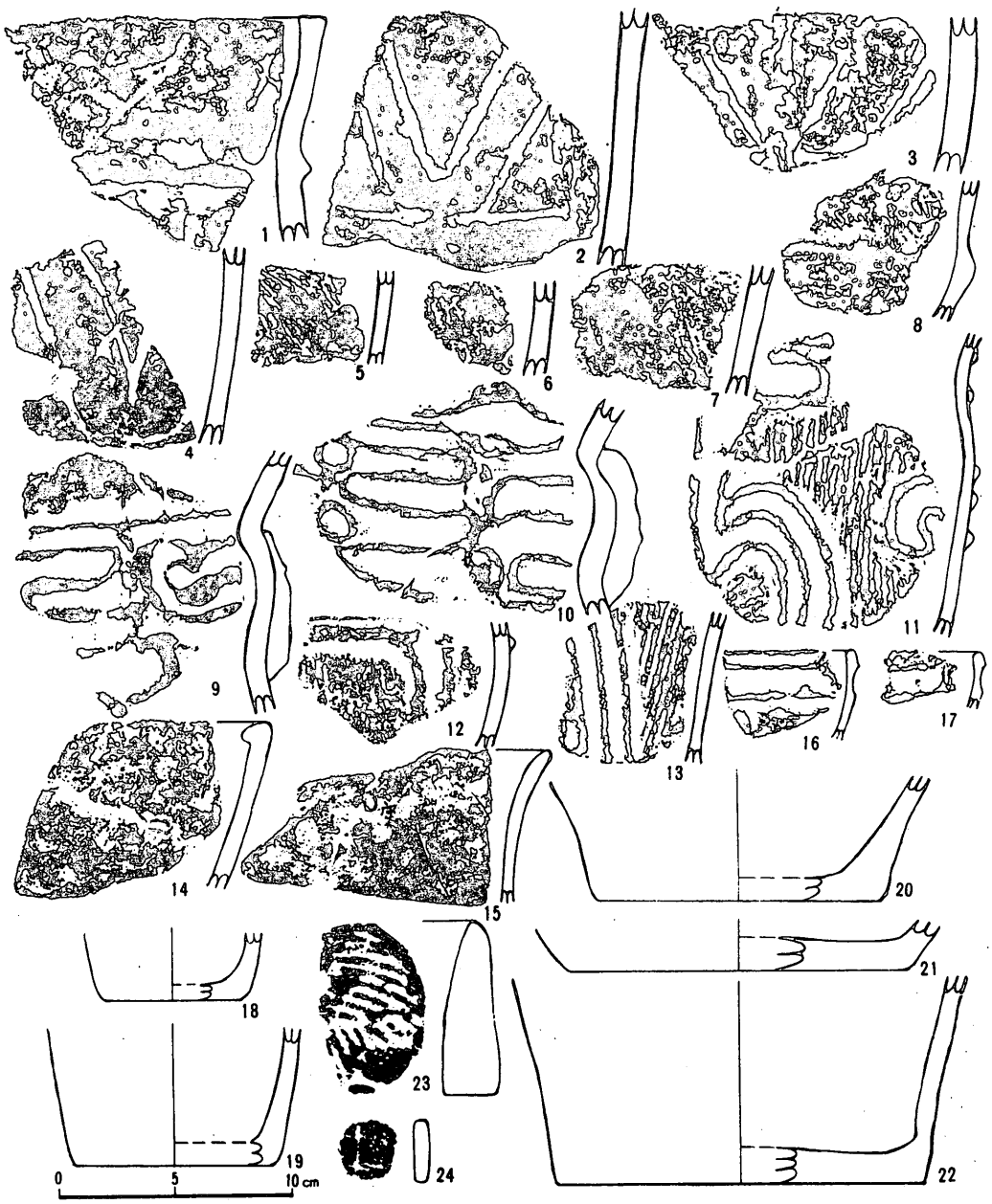
第３類土器（第13図９，10）

本類は９，10の僅か２例である。共に器厚は0.8cm前後の中厚手土器となり，黄褐色を呈する頸部辺の破片である。施文は，粘土紐による太い隆帯を垂下させ，横位に長い文様区画帯をつくるらしく，その内部に数段の粘土紐を積み重ねて，肋骨状の力強い文様を構成している。中期中葉に位置する土器であろう。

第４類土器（第13図11～13）



第12図　第1号住居址出土釣手土器実測図（1：3）



第13図　第2号住居址出土遺物実測図(1)（1：3）

11～13の3例で，共に黄褐色を呈し，器厚は0.5～0.6cmのやや薄手となる。頸部より胴部にかけての破片とみられ，曽利Ⅱ式に比定され得る。2～3条の平行する隆線によって，器面に自由な唐草文が描かれ，その後，空間の地を平行沈線で，くまなくみたしている。

第5類土器（第13図14～17）

縄文晩期に所属するとみられる土器片を一括した。14,15は無文の口縁部破片である。14は器厚0.7cm，黄褐色を呈する平縁で，口唇上に1cmの巾広い面取りが，器の内側に向けて形成されている。15は器厚0.5cmの薄手となり，暗褐色をとる波状口縁部で，16，17は，あるいは同一個体とみられるもので，共に0.4cmとうすく，黒褐色となる平縁口縁部である。概して壁面調整はよいが，いわゆる精製土器ではない。外器面の口唇直下に，1cm巾の凹帯が1条横走し，それによって両端には平行する微隆線が残される。17はその凹帯の横走をとめる，微隆突起がおかれ，一旦集約後再び凹帯をめぐらせている。16の内面には，更に1条の沈線がひかれている。類例は，近くの女鳥羽川遺跡でも多量の出土が知られている。

第6類土器（第13図18～22）

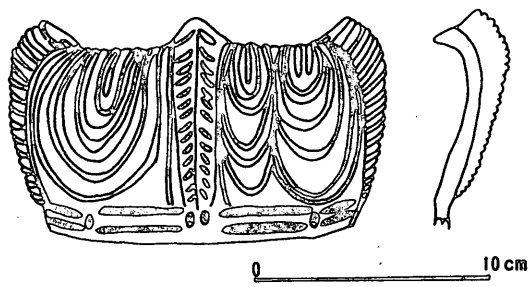
土器底部を一括した。この中18，19，22は赤褐色，他は黄褐色となり，18，22には多量の輝雲母が含まれる。底部径は，18が6cmと最も小さく，19が8.6cm，20が12cm，21が14.4cm，22が大形化して15.6cmを記録している。器の立ちあがりは，18，19が底部より直ちに立ちあがるのに対し，20はやや立ちあがったところで外傾の度を強めており，21はその基部より直接外傾して，大きく開口する。22は大型土器の底部であるが，開口度は中位である。おそらく6，7の縄文施文の破片と個体を同じくするものとみられる。又，痕跡的ではあるが，19，20，22には縄文施文がうかがえる。

土製品（第13図23，24）

23は，把手乃至は土器の装飾とみられるものである。大きさは縦7.3cm，横巾5cm，厚さは下部で2.3cmを数える。文様は両面の下地に平行沈線を密に施し，その上面に沈線と交叉する，ソーメン状の細い粘度紐を貼布して，文様効果をあげている。24は唯一の土製円盤である。暗褐色を呈し，大きさは2.1×2.5cmでやや不整となるが，0.5cmの薄手土器片を円盤状に加工したもので，表面には，縦と横に1条ずつの細沈線が残されている。

炉址内出土の土器（第14図・図版4）

炉址内検出の土器は，頸部から口縁部にかけてのまとまった欠損品であった。口径は約10cm器厚0.5～0.7cm，残存部の高さ8cmとなり，焼



第14図　第2号住居址出土土器
実測図(2)（1：3）

成よく茶褐色を呈する。器の頸部は欠損部の横断面が八角形を示す珍らしいつくりで，その一辺は約5cmに調整されていた。頸部で集約をみせた土器は，口縁部に向け，若干開きながらその上部で内彎する器形を示し，口縁部を4分する縦方向の隆帯が，約2cmの巾広い面取りをもつ口唇上より垂下し，ために口唇上に4個の耳状突起を残しながら，隆帯上には，八の字状の沈線を附している。又，隆帯間には条線による1乃至2の同心円状文がみたされるのが特徴である。

（大久保知巳）

（3） 第3号住居址出土土器・土製品 （第15〜17図・図版5，9，10）

第3号住居址床面上4cm上部の覆土中に多数の半完形土器片が検出されたが，接合部が円く復元可能土器は数点のみに過ぎなかった。時期は縄文中期中葉勝坂期が主体で，1〜2点の後晩期土器が混在していた。

一 類

本類は縄文中期中葉勝坂期に比定される（横体区画文）土器群である。（第16，17図2〜7）

1は胴下部を欠く深鉢の半完形品で，口径18.7cm，高さ約21cm，器厚9mmで胴部より口縁部にかけて大きく朝顔状に拡がって口縁部は逆「く」の字状に内彎し，研磨は内外面とも入念に行なわれ，10cm直下に撚糸文の施された2条の横位隆帯を2cm間隔で廻らし，それに平行して6つの山形隆帯で区画を施し，区画内以下は左斜縄文を一面に施文してある。焼成は良好で，胎土に少量ではあるが雲母を含み，色調は赤褐色で，口縁部外面には二次焼成痕がみられる。

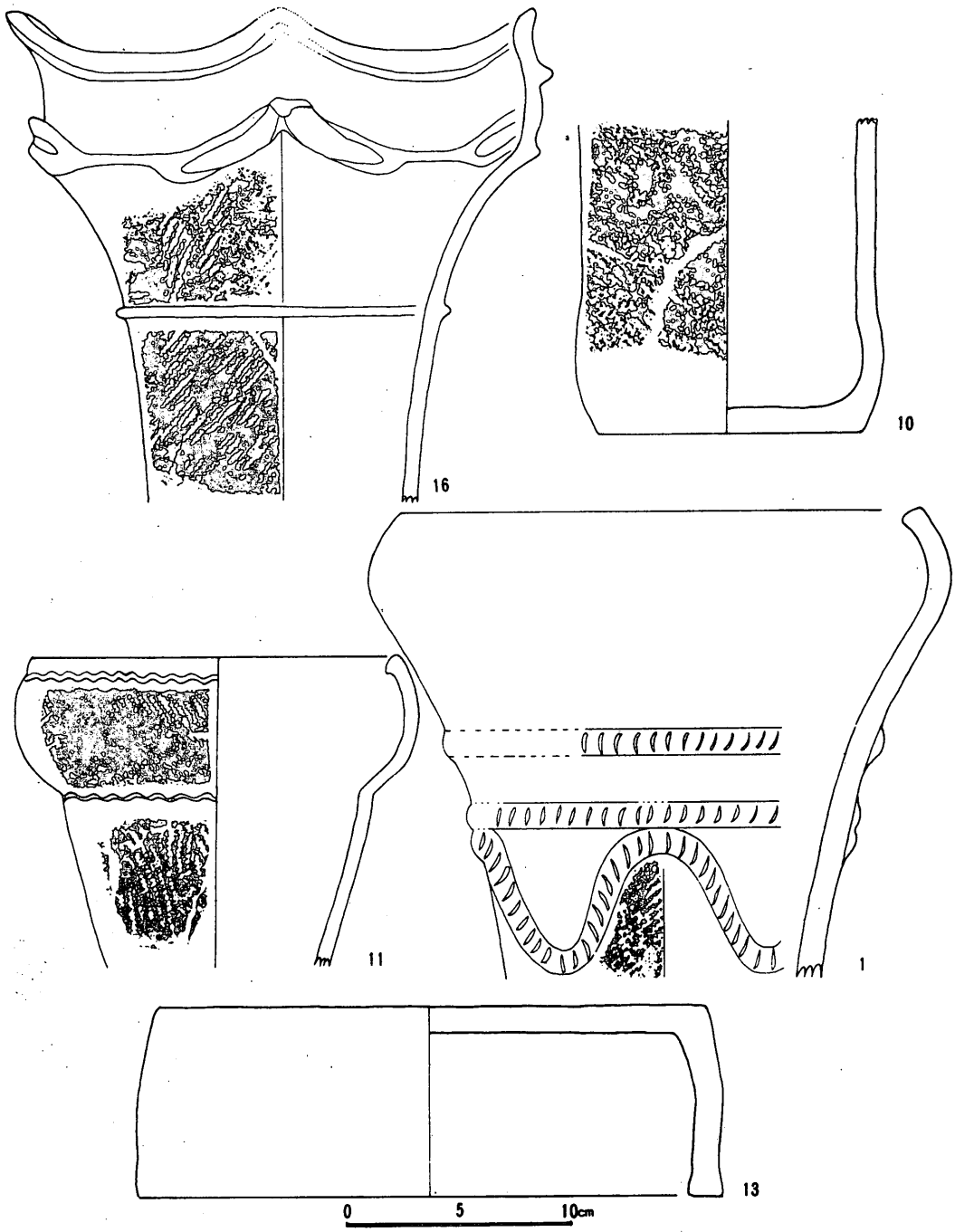
2は，口唇部「冂」状で，2.4mmを計り，ほゞ垂直に立ち上がった口縁部破片で，口縁と5cm下に2本の平行する隆帯を廻らし，その区画内に波形の粘土紐を貼り付けてある。焼成は良好で，色調は赤褐色。口縁部内面に煤状炭化物の附着がみえる。

3は胴部破片で，「U」字形の刻みを付けた隆帯と断面が三角形の施文具による垂下する沈線及び沈線間に横に交互の切り込みを施してある。焼成は良好で，色調は黒褐色，器厚は9mmである。

4は胴部破片で，2本の平行する粘土隆帯の中に楕円区画を持ち，その中には放射状に沈線を施し，横位隆帯の上部は縦と斜めの沈線を施し，下部は平滑りの無文である。焼成は良好で，色調は赤褐色，器厚は9.2mmである。

5は，胴部破片で，刻みを付けた山形隆帯の上部はやゝ深目の垂下する平行沈線を施し，下部は右斜縄文を施してある。焼成は良好で，色調は赤褐色，器厚は7.5mmである。

6は，浅鉢，口縁部破片で，口縁部は「く」の字形で，やや内彎する器形を示す。平行する横位隆帯でビーナス状に区画し，区画内には，太い沈線を施してあり，その直下には数条の細隆帯を廻らしてある。焼成は，良好で胎土に雲母を含み，色調は赤褐色で，器厚は9.9mmである。

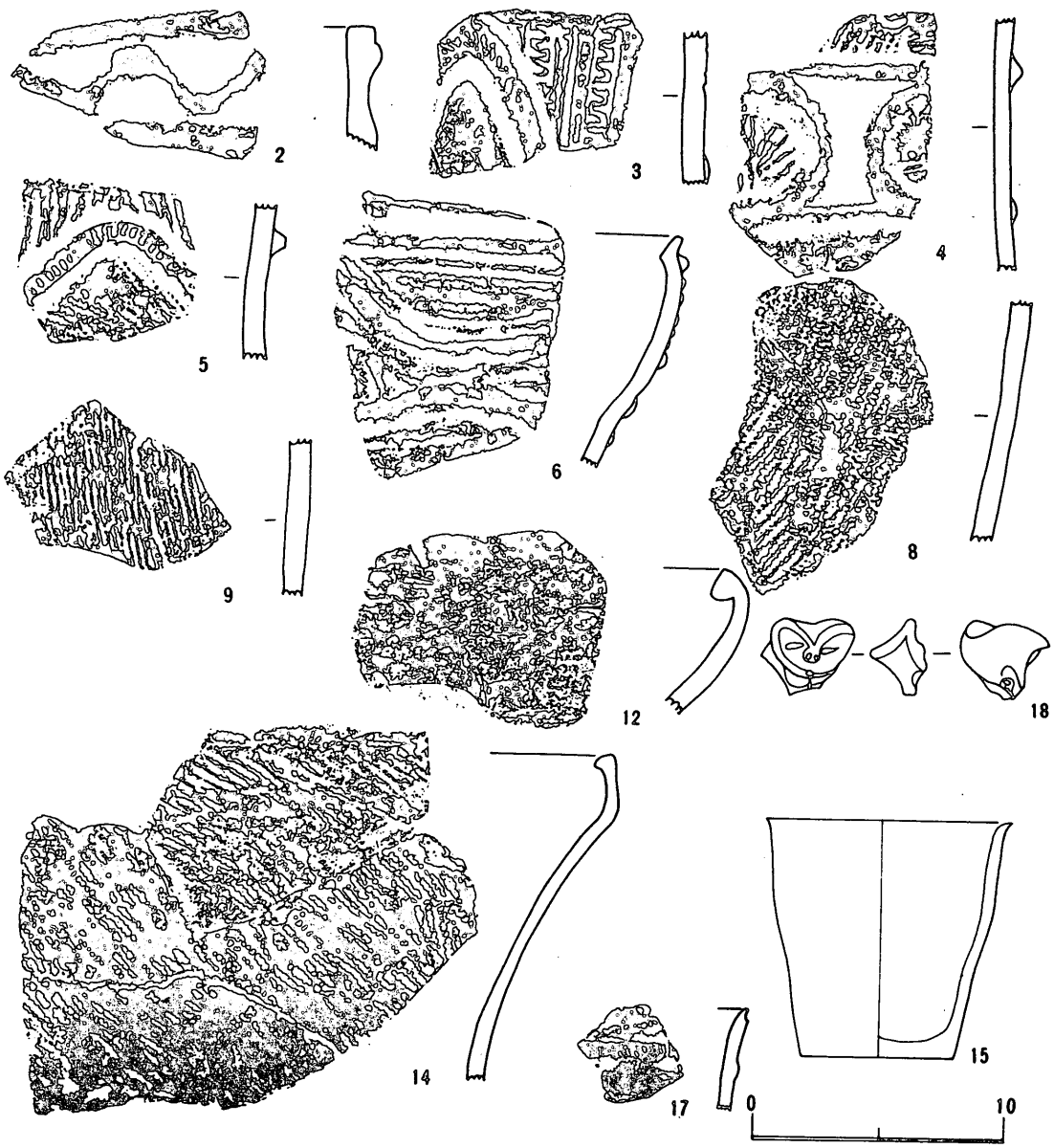


第15図　第3号住居址出土遺物実測図(1)（1：3）

7は，逆「く」字状を呈する大型浅鉢で，口径51.8cm，高さ約16cmを計り，口唇部が内側にふくらみ，口縁部直下3cmに粘土紐を貼りつけ，2cm間隔でつぶし，横位の刺突を繰り返してある。その上部は波形及び直沈線を2本廻らし，口縁部は口唇まで，斜め刻みをつけてある。頸部以下は無文で，内，外面ともに研磨痕が見られ，焼成は良好で，色調は褐色，器厚は8mmである。

二　類

本類は縄文中期中葉勝坂期に比定されると推定される（縄文施文）土器群である。（第15，16図8〜11・図版9，10）

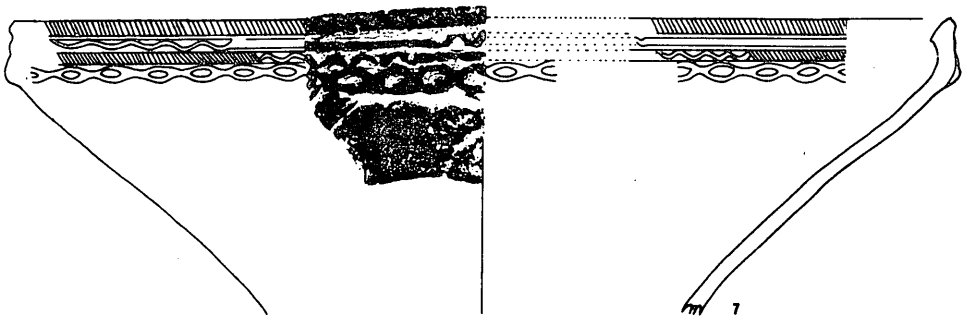


第16図　第3号住居址出土遺物実測図(2)（1：3）

8は，胴部破片で左斜縄文を施してある。焼成は良好で，色調は赤褐色，器厚は8.7㎜であり，表面はやゝ黒ずんでいる。

9は，胴部破片で，右細縄文を施してある。焼成は良好で色調は赤褐色，器厚は8.7㎜である。

10は，口縁部を欠く半完形小型深鉢で底部は勝坂期特有の算盤玉状の特徴を引く形状を持っている。底径11.7㎝，高さ約13.8㎝，胴部上端径13.2㎝を計る。底部より無文帯で外反し，3.4㎝でゆるやかな稜線を見せ，かすかな内寄り曲線を呈し乍ら口縁に向っているものと思われる。胴部一面に右斜縄文が施され形状はほゞ円筒形を呈し，焼成はやゝ良好で，色調は褐色，底部内面は調整が良くゆきとゞいている。器厚は底部11㎜，胴部9.1㎜である。



第17図　第3号住居址出土遺物実測図(3)（1：4）

11は，胴下部を欠く半完形深鉢で円くふくらみを持って内彎する口縁部が特徴である。口唇は「く」字状を呈し，口縁部9㎜下とふくらみを区画するように4.7㎝の間隔を置いて2本の小さな波形沈線を廻らしてある。地文は全体に余す処なく右斜縄文を施文，高さ約14㎝，口径16.9㎝，胴部下端15㎝である。器厚は8㎜で口唇部は12.4㎝。焼成は良好で色調は赤褐色，内面に二次焼成が顕著で円筒形状を呈している。

12は，口縁部破片で，胴部は直線的で頸部で外反し，口縁部はやゝ内彎しているが，ほとんど垂直である。口唇以下全面に右斜縄文を施している。焼成は良好で，胎土に砂が多く，色調は褐色，器厚は8㎜である。尚外面は全体に磨耗がある。

三　類

本類は縄文中期中葉勝坂期に比定される縄文土器群である。（第15，16図13，14，15）

13は，半完形器台形土器であるが復元可能唯一の土器である。脚径25.5㎝，高さ8.7㎝，上部径24.5㎝，器厚（脚部1.6㎝，上部1.23㎝）を計り，脚部は指頭による調整押圧痕が外，内面ともに見られ，製作当初は器面は平滑に調整されていたと思われる。胎土に大量の砂粒を含む為現時点に於ては内，外面共に研磨面とザラザラ面とが共に遺存しているのが観察できる。焼成は良好で，色調は赤褐色及び褐色である。尚この土器は置かれた状態で出土した。

14は，口縁部破片で，内彎した口唇は内側にふくれている。無文で焼成は良好，色調は赤褐色で，胎土に黒母を含み，研磨が良く行きとゞいていたものと思われる。器厚は8㎜である。

15は，覆土出土の口径9.8㎝，底径6.1㎝，器高9.4㎝，器厚4㎜を計るカップ型状無文小型土器である。底部より緩かる脹みを持ちつゝ外反，口縁部は僅かに外へ張り出している。焼成は良好であったと思われるが保存状態が悪くボロボロになっている。胎土に砂粒を含み，色調は赤褐色ないし，黄褐色である。

四　類　（第21図16）

本類は加曽利E期に比定されると思われる土器である。

16は，半完形深鉢であり，ほゞ円筒形の細く締った胴部より頸から口縁部にかけて朝顔状に大きく拡がりを呈している。口縁部は凹みをつけた隆帯による4つの波状口縁を形成していたものと思われ，2.5㎝の無文帯を隔て下部にも同様の波状隆帯を廻らしてある。頸部より胴部全体に斜縄文を施し，頸部と胴部とを区画するように横位隆帯を一条廻らしてある。器面は内，外面とも丁寧に研磨され，外面は磨消しが施されている。焼成は良好で色調は黒褐色，内面は強い2次焼成を受けている。口径23.5㎝，高さ約21㎝，器厚9㍉を計る。

五　類　（第16図17）

本類は混入土器で，晩期大洞Aに比定されると思われる資料を取り上げた。

17は，口縁部破片で，　口縁部に押圧を連続すると思われる押痕が残されている。押圧下2㎝に刻みをつけたかすかな隆起線を廻らしてある。外，内面ともにヘラ状工具で研磨されたように見える。焼成は固く焼き締まり，色調は黒褐色で，器厚は6㎜という薄さが特徴である。

第3号住居址出土の土製品（第16図18）は，土偶頭部で，赤褐色を呈し焼成は良好で，眉及び頬の線は粘土紐を張り付け，やゝ扁平なハート状で表現し，鼻，口，眼は刺突によって表わしている。頭部は扁平で中心より頸部にかけて径2㎜の貫通孔があけられている。

（三村　肇・山越正義）

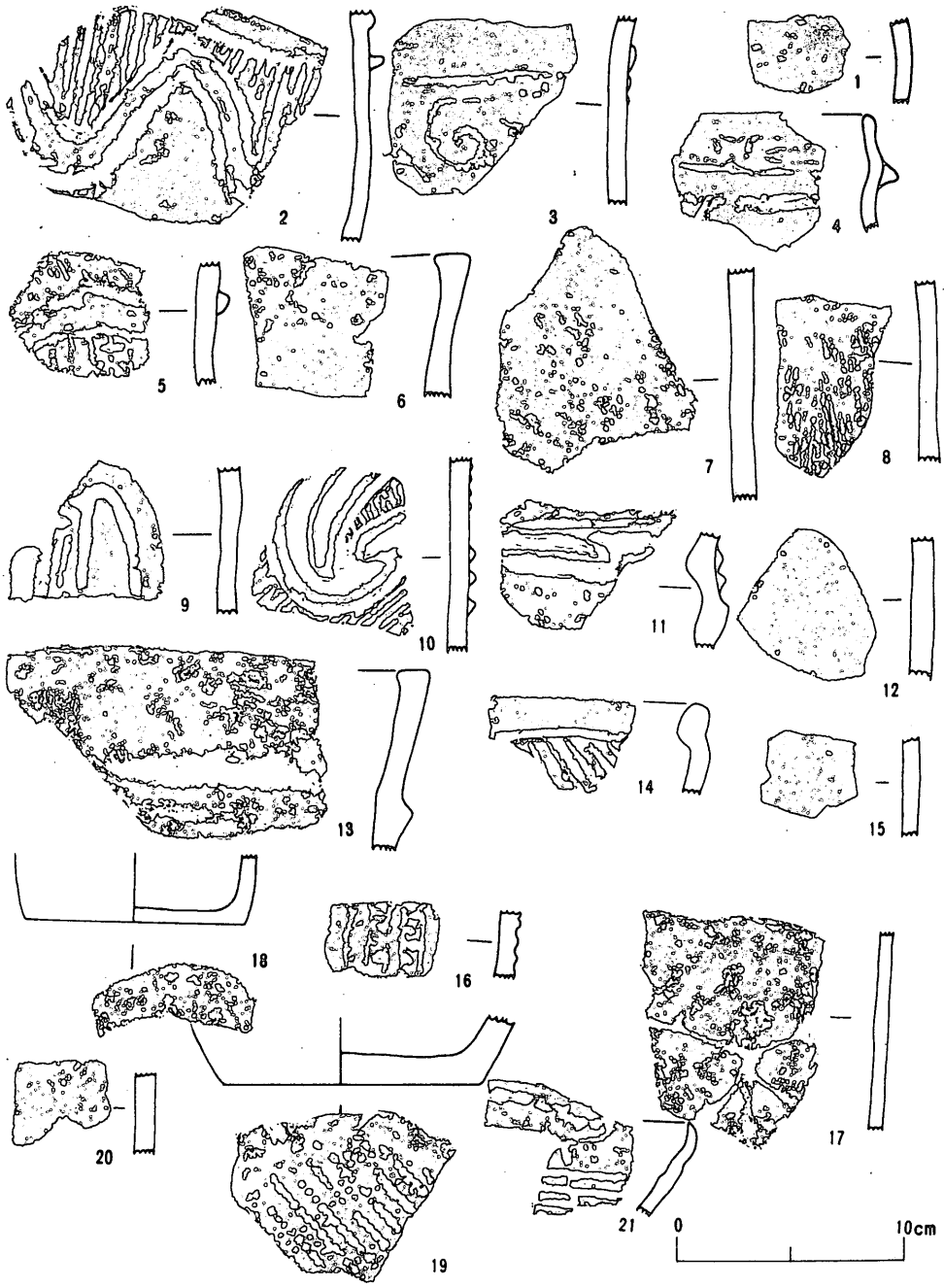
（4）　第3号集石出土遺物

遺物（第18図1～20・図版10）は 第3号集石の覆土及び集石中から検出したものである。混入土器を含めて第一類（前期土器）から第五類（須恵器）迄に分類したが，小破片の混在で取り上げるべき資料に乏しかった。

一　類

本類は混入土器で，本址唯一の前期土器で黒浜期に比定されるものである。

1は，左撚りと右撚りの縄文原体を交互に横位回転した羽状縄文と思われる。焼成は良好で，内面



第18図　第3号集石地出土土器実測図（1：3）

に指頭調成が顕著に見られる繊維土器で，色調は黄褐色で，器厚は7.5㎜である。

二　類　（第18図2〜11）

本類は勝坂期に比定されるもので，横位区画文から無文土器までである。

2は横位隆帯より垂下する沈線を内部に施し山形隆帯で区画し，下部は無文である。焼成は硬く焼きしまり，色調は赤褐色の精成土器で，器厚は7.7㎜である。

3は横位隆帯を2条に走らせ，幅広い垂下渦巻文を施し，その上を連続刺突をかざって空間は無文を配している。焼成は不良，色調は褐色で器厚は9㎜である。

4はやゝ内彎した口縁部破片で上下2条の隆線に連続斜状沈線を施し，内部に細い沈線の区画帯を有し，隆線はするどく外へ張り出してその下方は無文で焼成は良好，胎土は緻密で内壁の指頭調整は良好で色調は赤褐色である。器厚は7.5㎜である。

5は太い隆帯で区画し内部に平行沈線を垂下させ，その間に刺突を施し，下部は斜縄文を配し，焼成は不良である。胎土は砂粒を含み表面はざらざらしており色調は暗褐色を呈する。器厚は9.8㎜である。

6・7は無文で焼成は良好である。胎土に大量の雲母を含み色調は赤褐色を呈する。6は直立口縁部破片で器厚は14㎜，7は器厚11.3㎜である。

8は太く浅い平行沈線と鋭い曲線を施し，焼成はやゝ不良，胎土に砂粒を含み，色調は黄褐色．器厚は10.1㎜である。

9は太い隆起線の曲線を自由にあやつり，無文空間には櫛状工具による沈線を自在に施す。焼成は不良，表面は全体に煤状炭化物が付着し，内面は黄褐色を呈し器厚は7.9㎜である。

10は空間を隆帯曲線文で自由自在に埋めつくし，焼成は不良で色調は灰褐色で器厚は9.5㎜である。

11は特殊器形と思われるものである。無文で水平の口縁の直下に鍔状突帯を配している。器形は樽形と推察される。焼成はやゝ良好，胎土に砂粒を含み色調は褐色で口縁部に二次焼成の煤けた炭化物が附着している。器厚は14.7㎜である。

三　類　（第18図12〜17）

本類は加曽利E期に比定される土器群で，第3号集石ではこれが主体をしめており，編年細分では加曽利EⅡに比定されるものであるが取り上げた資料は数点である。

12は研磨された無文の口縁部に綾杉状沈線が施され，焼成はやゝ良好，胎土に石英粒を含み色調は黒褐色で器厚は9.4㎜である。

13は細い隆帯で区画しその間に連続「⊔」の字形を施文し，その上部に連続して櫛目状に沈線を配している。焼成は不良，色調は赤褐色，器厚は8㎜である。

14は全面に縄文を配し，焼成は不良，色調は赤褐色であり，器厚は8.7㎜である。

15は浅い櫛画き文土器で，焼成は不良，色調は黄褐色で器厚は9.1㎜である。

16は無文底部で焼成は不良，色調は褐色で器厚は9㎜である。

17は網代底部であり，焼成はやゝ不良で，胎土に石英粒を含み，色調は赤褐色，器厚は11㎜である。

四　類　（第18図18・19）

本類は小破片の為明確ではないが後・晩期に比定される資料である。

18はへら状調整が丁寧に施され研磨も顕著で，焼成は良好，胎土に砂粒を含み色調は表面が黒色で，内面は灰褐色，器厚は6.4㎜である。

19は黒色研磨土器で焼成は固く器厚は7㎜である。

五　類　（第18図20）

本類は洪水等による混入の須恵片資料である。

20は保存状態は極めて悪くローリングの痕が生々しい還元不充分で色調は灰色で器厚は10㎜である。

遺構外出土土器　（第18図21）

21は内彎する口縁を持つ鉢型土器の口縁部分で，外面には2.5㎜の浅い沈線が数条横走し内面には口唇直下に浅い刺突文を廻し，その下部に約2.5㎜の巾の平行沈線を廻らしている胎土はちみつで，やゝ石英小粒をまじえ，焼成はやゝ悪くやわらかい感じを得る。色調は外面灰褐色，内面褐色を呈す器厚7㎜である。後期加曽利Bに比定される土器である。

第3号集石址出土の土製品

（図版10　3段右より2番目）は径2㎝，長さ4㎝の土偶の足部破片で，焼成は固く焼き締まり，かつ重い。色調は赤褐色で円筒状で後期に属するかも知れない。

（図版10　3段右端）は口径3㎝，高さ2.5㎝，器厚8㎜，穴の深さ1.2㎝のミニ土製品である。焼成は固く焼き締まり，これ又重い，色調は赤褐色で，内面に朱と思われるものが付着している。

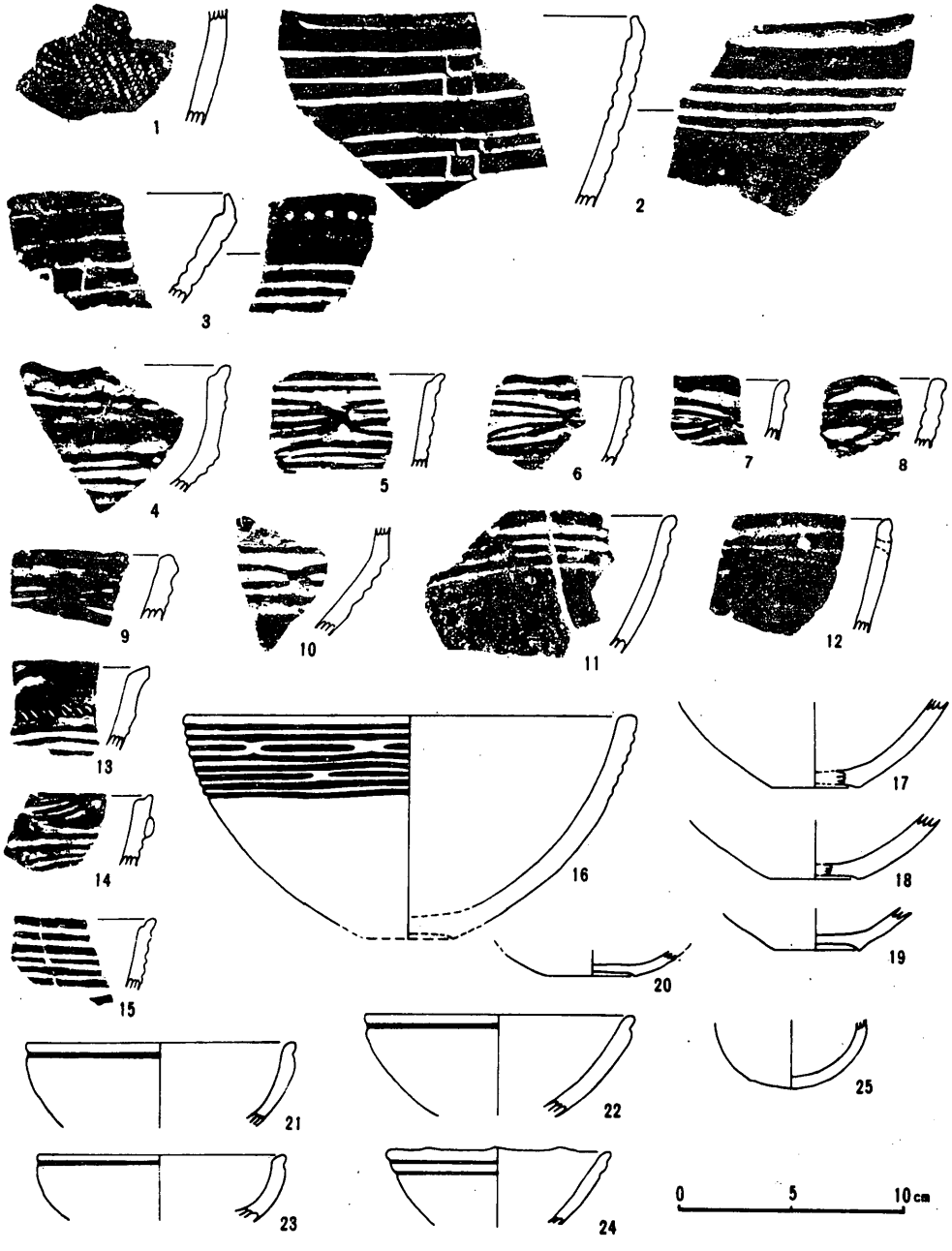
（三村　肇・山越正義）

（5）　縄文晩期遺物出土地点出土土器・土製品　（第19～23・図版11）

C7グリットを中心にした地点で，特に縄文晩期土器片を主体にした遺物の出土があったので記述したい。土器片は総数3,193片を取り扱ったが大部分は縄文晩期の無文土器である。時期別では，縄文中期，後期，晩期，土師期の各期がみられる。全体的に磨滅が多い。

①　縄文中期土器

半截竹管工具による連続瓜形文を施した，橋状の把手をもつ口縁部片の出土がある。茶褐色を呈し，



第19図　縄文晩期遺物出土地点出土土器実測図(1)（1：3）

胎土に砂粒を含むが，焼成と共に良好である。上方に縄文中期の竪穴住居址の確認もあったので，そちらに関連するものである。19図1も中期的な縄文である。

② 縄文後期土器

19図2・3がそれである。2は磨消縄文手法で帯縄文を構成し，それを段おとし状に沈線で切っている。器内面にも平行沈線が施されている。深鉢形の器形をとるものと思われるもので，器表面は灰黒色，器内面は茶褐色を呈し，胎土，焼成とも良好である。流れの中にあったのか口縁部に磨耗がみられる。3は同様手法によるものだが磨滅が器表面にみられるものの帯縄文は施されていないようである。浅鉢形の器形をとるものと思われ，器内面の口縁下に丸い刺突文が並ぶ。ともに後期中葉に比定されるものである。

この他に深鉢形土器の口縁部把手－耳状に突起し，丸い凹みを形作っているものと，注口土器の注口部片と同把手の出土がある。

③ 縄文晩期土器

この時期が主体を占めることは先記した。器形では，浅鉢形，深鉢形，壺形の3つが見られる。

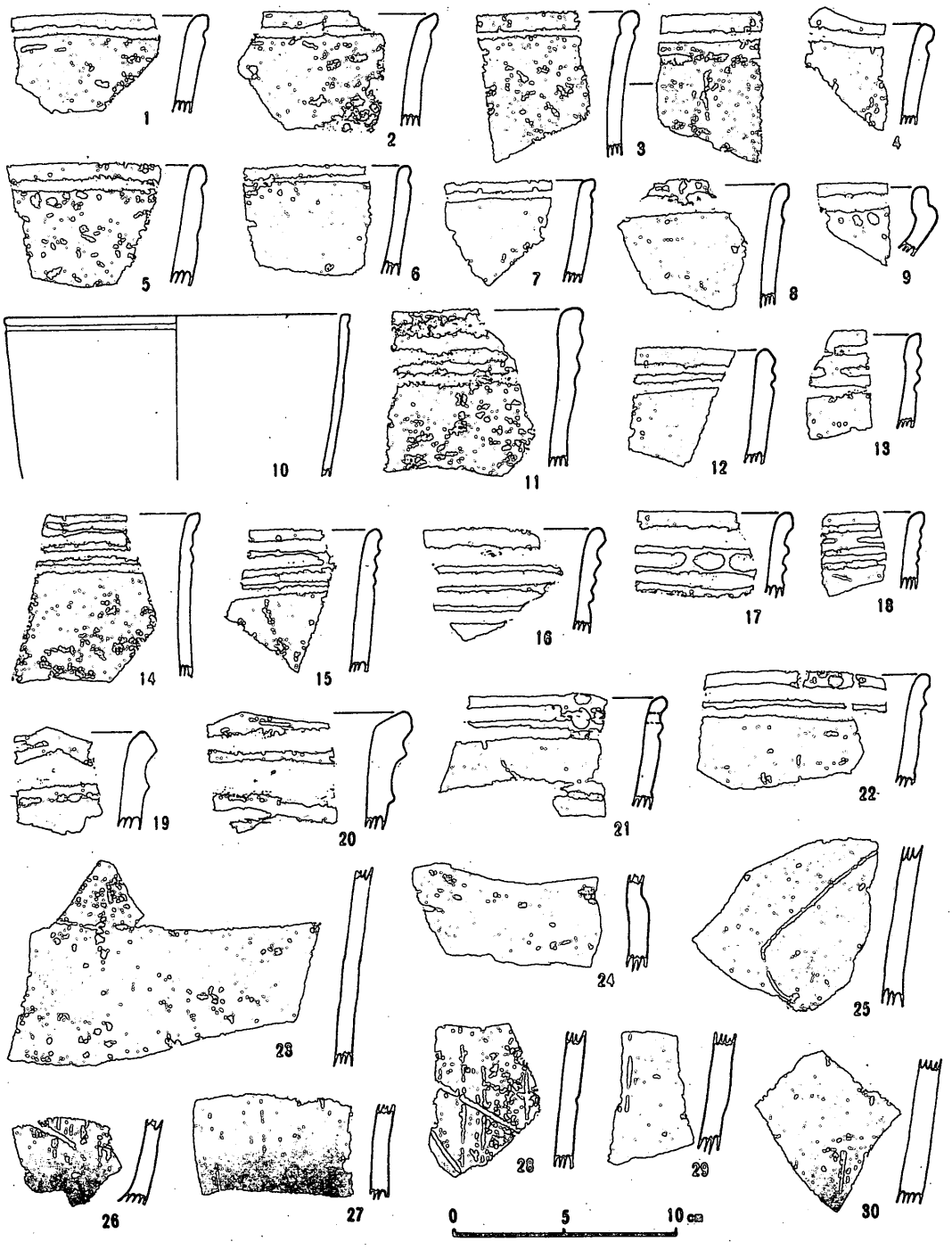
a 浅鉢形土器 （第19図4～25，第21図22）

浅鉢形土器は更に三タイプに大別できる。

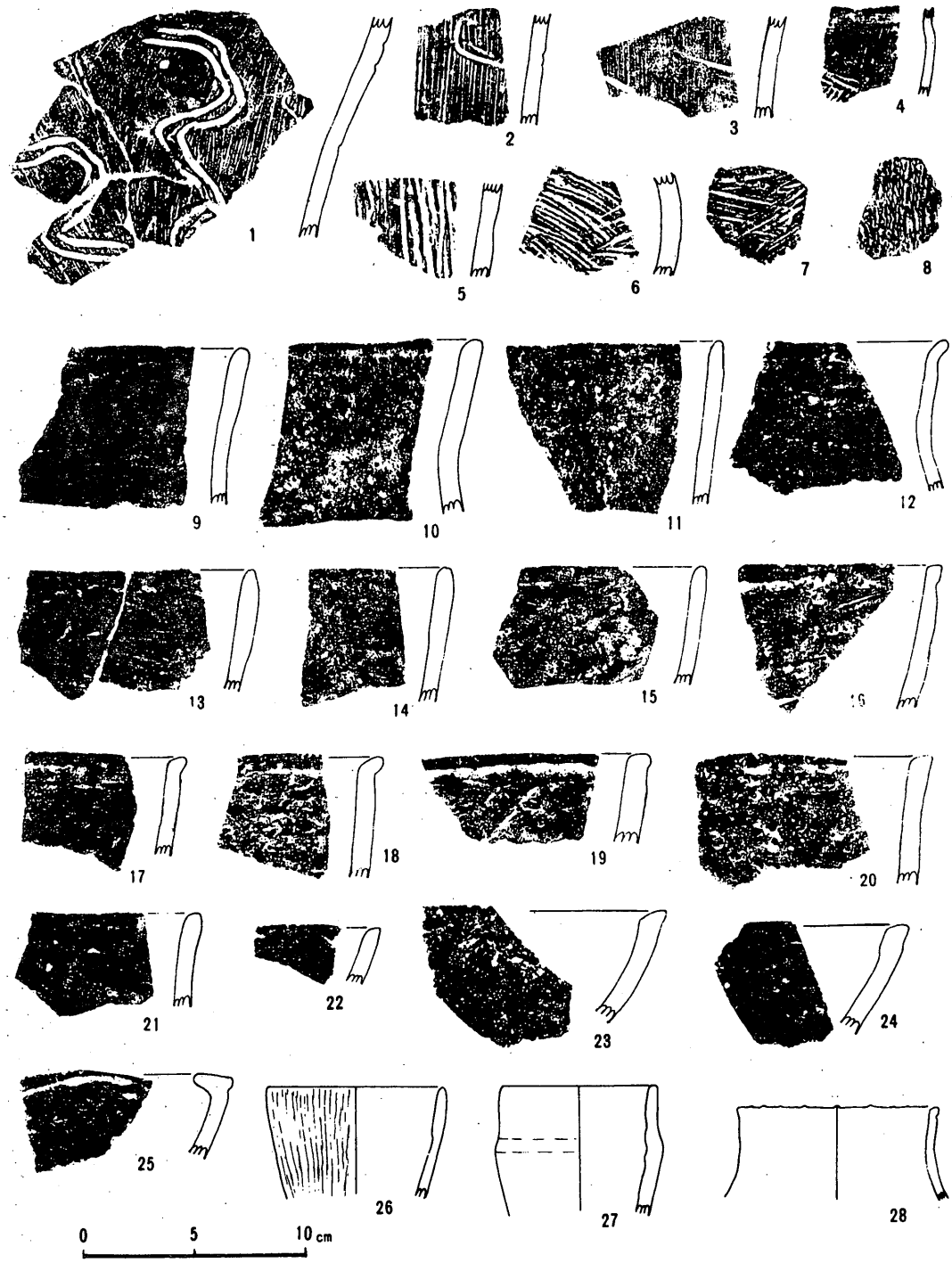
その1は，いわゆる浮線網状文とか変形工字文と呼ばれる文様帯を口縁部下にもつ椀形器形をとるもので，16に代表される。16は口径20cm，高さ約10cm程のもので，黒褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含んでややもろい焼成となっている。磨滅しているが，文様は明確であり，やや粗雑な施文と言える。底部は，17～20にみられる4cm程の径をもつもので上げ底気味になっているのが特長といえる。

1～15の破片は，いずれも茶褐色ないし黒褐色を呈し，胎土・焼成とも良好なものが多く，中には研磨されているものもある。口縁部には，5，11，12，16のような平縁と，4，6，8のような波状をなすもの，更に9のように口外帯をもつものがある。また浮線網状文も4本の細隆線が合する5，6などと2本が合する10，16などがある。この種土器によくみかける小穴が12にはみられるし，14のような突起をもつものもある。

その2は，21～25の口径10～12cm程の小形のものである。口縁は21～23のような平縁と24のような波状口縁があり，口縁にそって，1～2本の沈線が施されている。茶褐色を呈し，胎土，焼成とも良好といえる。25は黒色を呈する丸底の手捏ねのものであり，胎土に砂粒を含んでややざらざらした感じだが焼きしまって固い。20図22も小形で，この範疇に含めてよいかと思われるが無文であるのが異なる。器外面に朱塗りが施されるという特色をもっている。



第 20 図　縄文晩期遺物出土地点出土土器実測図(2)（1：3）



第 21 図　縄文晩期遺物出土地点出土土器実測図(3)（1：3）

その3は，20図23～25にみられるようなやや大形の浅鉢形土器である。 23，24は無文であり，25には口縁にそって1本の沈線がみられる。25は巾広い口縁で逆「つ」の字状に隆帯を器内面に形作っている。そのため器内口縁はえぐられた感を呈している。黄褐色の胎土，焼成とも良好なものである。

b　深鉢形土器　（第19～21図）

大別して有文（19図1～30，20図1～5，8，26）と無文（21図9～21）に分けられる。また土器底部（22図1～14）からしても判るように大形のものと小形のもののあることがわかる。ここでは，便宜的に3大別して記述したい。

その1は，20図10に代表されるもので，口縁にそって1～2本の平行沈線のみを有する深鉢形土器である。10は推定口径31cmのもので口縁にそって1本の沈線が施されている。灰褐色を呈し，砂粒を多く含んでいるが，焼成と共に良好で固い。3は器内面にも口縁にそって沈線が伏されており，4には口縁に突起が付されて波状を呈している。8は沈線と言うよりは凹帯をもつといった方が適切であり，口外帯を付している。

その2は，21，22に代表されるもので，口縁にそって1～3本の隆線または沈線をめぐらせ，胴部に櫛状工具による条線文をもつものである。

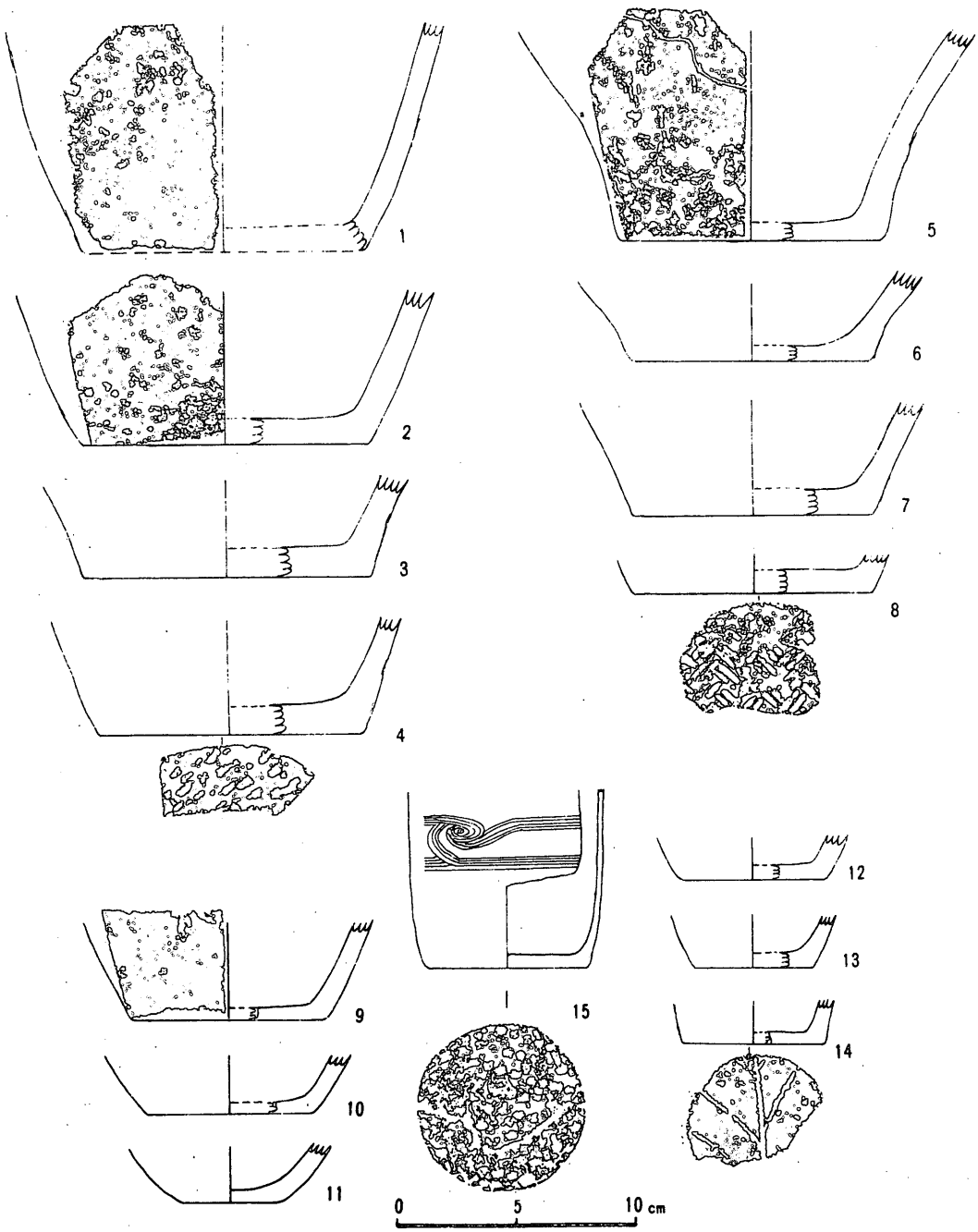
口縁部についてみると14～18のように浮線網状文の部類に入るものと，21，22のように2本の平行沈線のために作り出された隆線をもつものとがある。19，20は山形の突起をもつため波状口縁となり，ともに肥厚した口縁となっている。21，22は口外帯をもち，21にはその下に小穴が穿たれている。

次に胴部文様であるが，18のように口縁部下をとりまく隆線に続いて条線文の付されるものと，21，22のように若干の無文帯をおいて施されるものとがある。櫛状工具による縦方向の条線文が大部分であるが，他に21図5のような貝殻条痕文，8のような撚糸文の付されるものも極少量存在している。

また20図25～30，21図1～4のように条線文上に斜め方向から付される文様のあることである。稲妻文とも呼ばれるものであるが，他遺跡に比べ本遺跡のものは粗雑な手法を見せる。氷遺跡，庄ノ畑遺跡のそれは鋸歯状に屈折しているが，それに類する手法をとるのが21図4であろう。他は21図1，2にみるようにS字状というか曲線的に施されている。これらは岡谷市新井南遺跡に類例がみられる。

21図26は条線文のみの手捏ね小形土器である。口径8cm程のもので，磨滅はしているが，黄褐色を呈し，胎土も焼成も良いものである。

その3は，全くの無文土器である。21図9～21で，茶褐色ないし黒褐色を呈し，胎土に砂粒または小石を含むものが多い。口縁は直立気味の11，幾分外反気味の10，胴部に広がり口唇が外反する



第 22 図　縄文晩期遺物出土地点出土土器実測図(4)（1：3）

12などの違いがみられる。

27は手捏ねの小形土器で肩部に有段状のふくらみをもつ。黄土色をし，焼きしまっている。

次に底部であるが，壺形土器または浅鉢形土器のものが含まれるかもしれないが，ここで扱っておく。1～8は，底径10～12cmのもので大きい部類であり，1のように直斜状のもの，5のような彎曲気味のものがみられる。4，8のように底面に網代痕を持つものもあるが，無文が多い。胎土・焼成は一定していないがやや粗雑な感じを受ける。9～14は，底径4～8cmの小形のものであり，胎土，焼成は概して良好である。14には木葉痕がある。

c　壺形土器　（21図6・7・28）

明確さを欠くが壺形土器片らしきものが極く少量存したので区分したが問題は残る。

有文のものは，21図6，7の貝殻条痕文であり，彎曲から考えて壺形土器とみたい。次に28であるが無文の無頸壺で，口径18cmを計り，小突起を口唇にもつ。黄褐色を呈し，胎土，焼成ともに良好であり，箆状工具で横になでて調整してある。少量ではあるが，条痕文系の土器の存在は，東海地方との関係を考える資料であり，弥生文化の伝来を考える資料でもある。

④　土師器

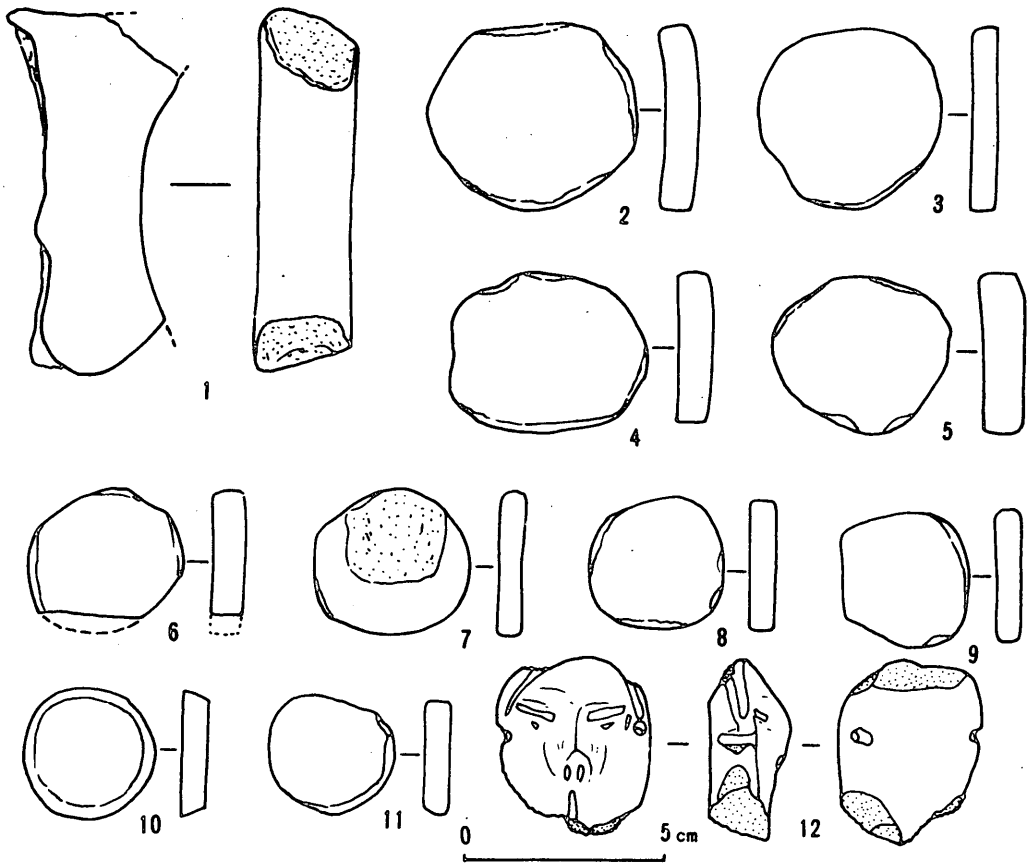
土師器の小破片と土師器高坏脚部，須恵器坏口縁部片の出土をみたが，土師器の遺物はわずかに混在していたにすぎない。

（山田瑞穂）

22図15は整理後復元できたもので胴部以上を欠くが，器形はほぼ判るものである。底部は約7cmを計り，網代痕がある。底部より胴部へほぼ垂直に立ち上がっており，口縁へも同様に移行するものと思われる。残存胴部は2～3mmという器厚を示し，極めて薄い印象を与える。焼成は良好であるが，外面施文箇所及び内面はザラついている。外面の底部に近い部分は研磨されている。胎土に砂の混入を見る。外面は褐色，内面は灰色を呈す。外面の底部より4cm上った箇所以上に流水文的沈線を施している。沈線は5条で溝は深くなく，計測値は0.5mm以内である。沈線は直線と渦巻の部分からなっている。

以上であるが，この土器の特徴は，「①器厚が薄く，研磨痕を示すこと。②底部に網代痕があること。③流水文的沈線を施していること。」以上の3点であろう。この点を中心に考えると，C－7出土の他の縄文式土器と大差ないものであろう。

（浅輪俊行）



第23図　縄文晩期遺物出土地点出土土製品実測図(5)（1：2）

土　製　品

C地区より土偶片1と土製円板10の出土をみた。

土　偶　（第23図1，12）

1は体部正中線より2分損したもので，手，足，頭部を欠く。現存体部9cm，厚さ2.7cmの板状のものである。黒褐色をし，胎土，焼成とも良好である。

12は頭部の破片である。巾3.8cm，最大厚2cmを計る。頭の上部を欠いているが，ほぼ原形を知り得る。原形はほぼ円形を呈したものだろう。顔面は盛り上り写実的である。額と頭髪を区別するかのような沈線を施し，以下に目等を表わしている。目は1cm程の沈線で示しているが，沈線下に刺穴があるのでこれが目を示すのかもしれない。その場合は，沈線は「まゆ」を示すものであろう。鼻は顔面をより盛り上らせて，実際感を出している。鼻は稜をもちその下部に2ケの刺穴で鼻の穴を示している。口は鼻の穴の直下に垂下する沈線で示している。なお，耳を示すものと思われる径3～4mm程の穴を2ケあけている。片方は欠けている。後頭部はほぼ平坦で何も施していない。焼成は良好，胎

土に小石と砂を含み，黄褐色を呈する。

土製円板　（第23図2～11）

10個とも土器片を利用したもので，周辺を打ちかいたり，研磨したりして作成してある。いずれも無文土器片を使ってあるが，胎土，焼成からして縄文晩期に比定されるものである。1は5.3cmと大きく，10は3.3cmを計り，大きさに若干の違いがある。10は断面台形によく研磨して形が整っている。

近くでは女鳥羽川遺跡で出土をみているし，南安穂高町離山遺跡でも多量の出土をみている。使用目的等明確にされていない遺物である。

（山田瑞穂・浅輪俊行）

（6）　その他のグリットよりの出土土器　（第24～27図）

A～Dグリットからの出土土器は縄文中期より土師・須恵期までにわたり，この遺跡が複合遺跡であることを示しているが，遺構外ということで一括して拓本・実測図で示した。

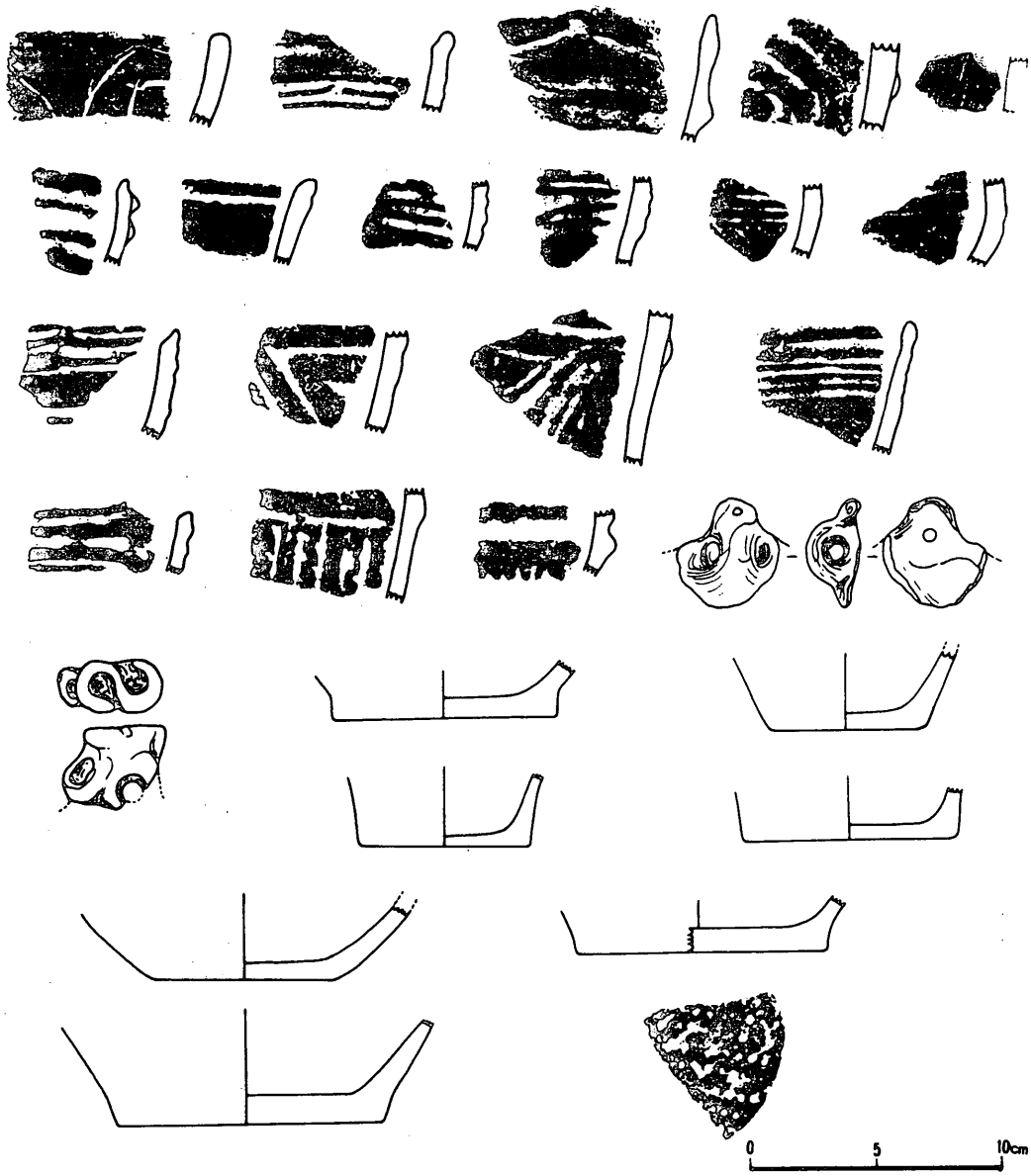
Aグリット（第24図）では縄文中期中半と縄文晩期土器が比較的多く，土器底部は平底で無文が多かった。

Bグリット（第25図，第26図上段）に図示したものは主にB－4，6出土のものである。施文は縄文のあるものは少なく，平行沈線のものが多く，胎土は粗くわるいものが多い。

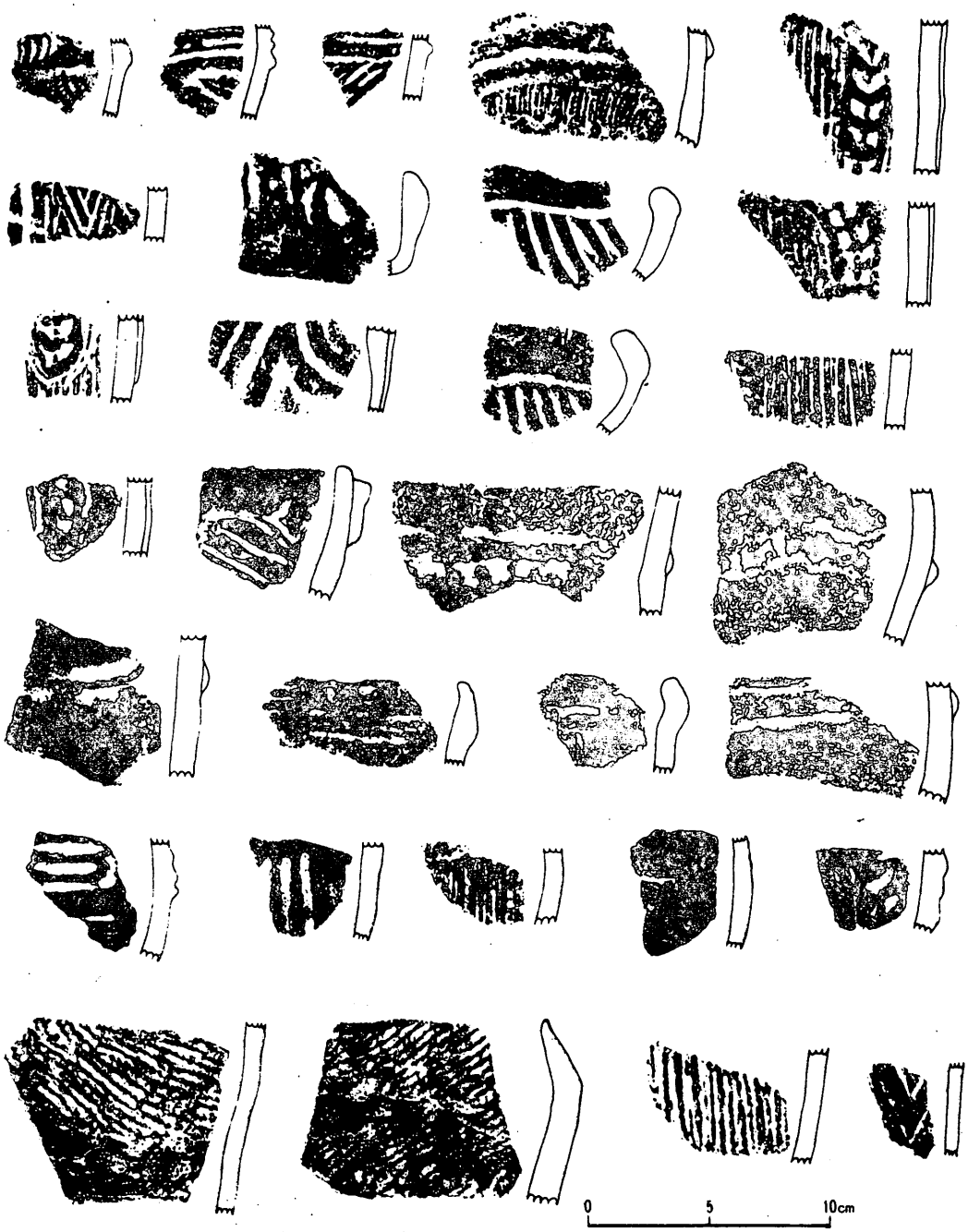
Cグリット（第26図下段，第27図上段）でも出土土器片は多いが，摩滅しており，文様の判別しやすいものは少なく，第26・27図の実測図9点は同一個体のものと思われるが，口縁は大小二種類の波状口縁を持つものと思われ，M字状の突期を5つ以上有するものであろう。主体となる文様は沈線の組み合せのみである。

Dグリット（第27図下段）からの土器の出土は少なかったが，坏・蓋坏，土師甕底部の他，径11cmの厚手の盌様の坏で黒褐色の重い土器である。

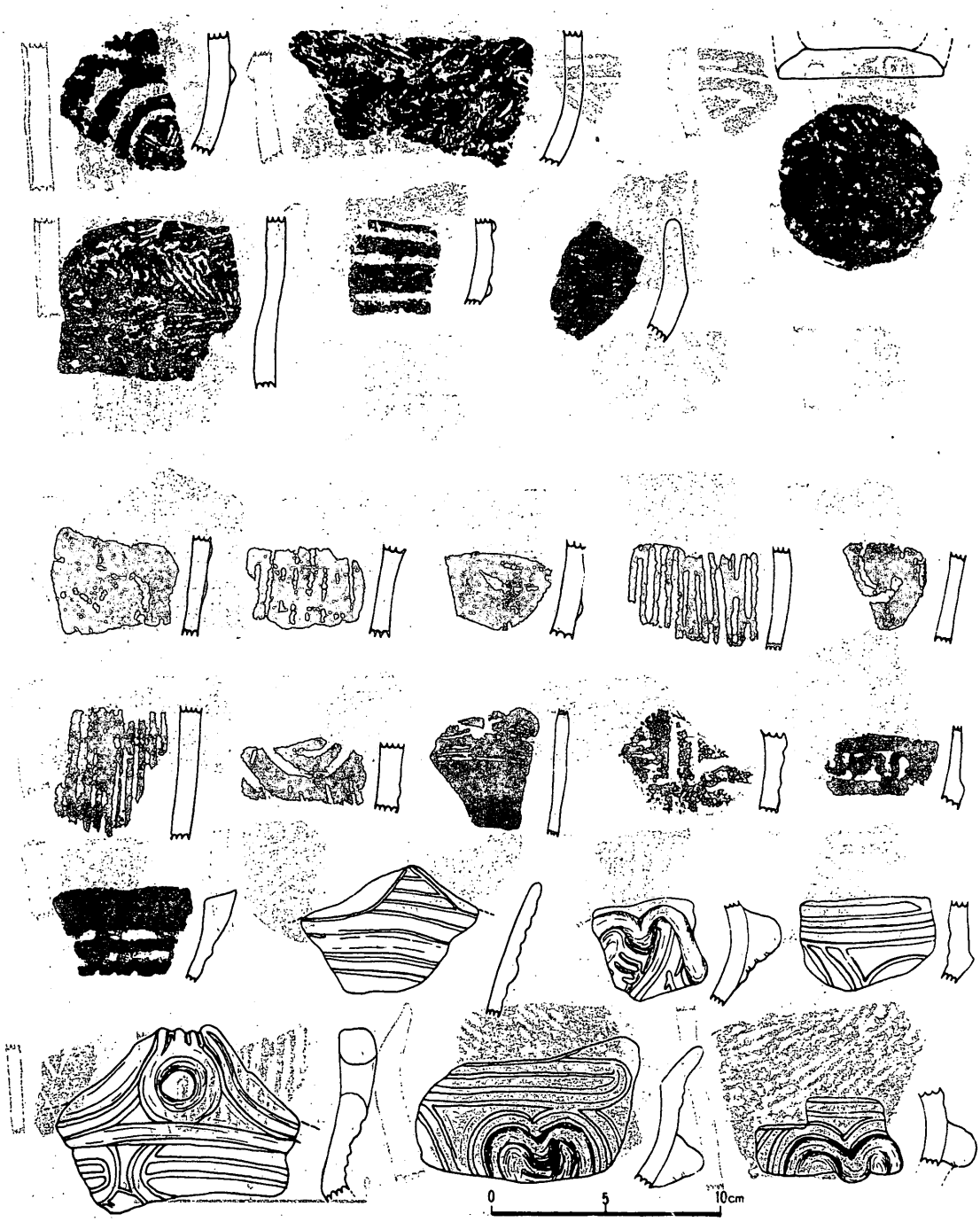
（宮城孝之）



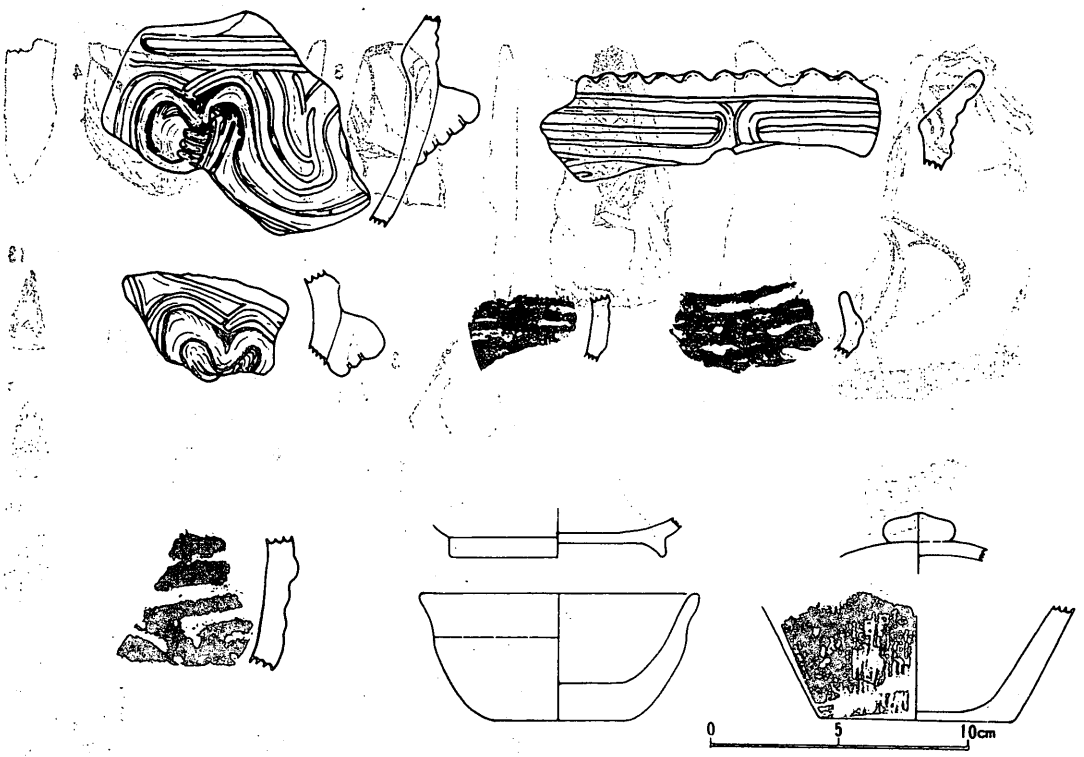
第24図　Aグリット出土土器実測図（1：3）



第 25 図　Bグリット出土土器実測図(1)（1：3）



第26図　B，Cグリット出土土器実測図(1)（1：3）



第27図　C，Dグリット出土土器実測図（1：3）

第2節　石器・石製品

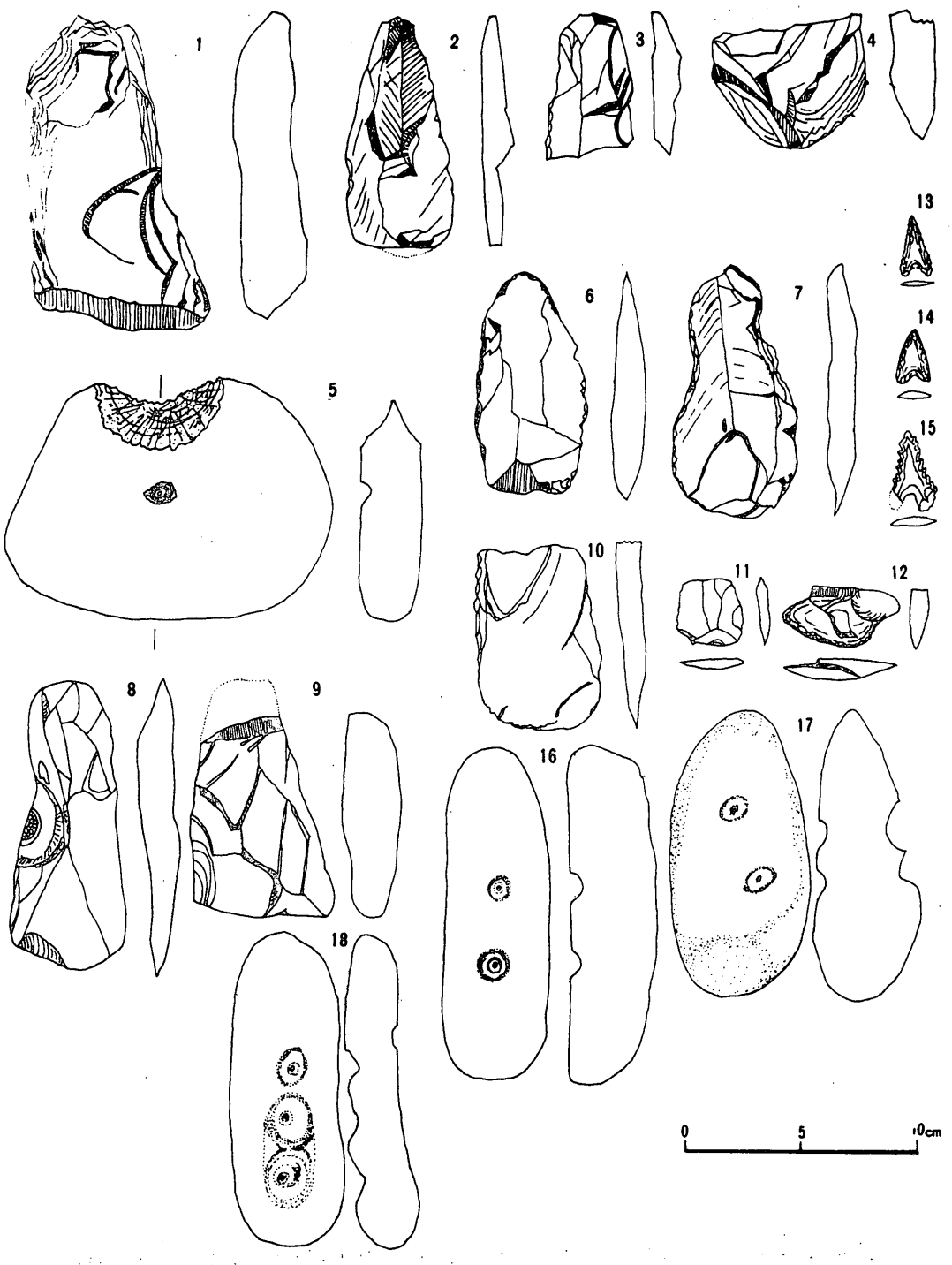
（1）　第2号住居址上面集石中の石器　（第28図・図版12）

打製石斧

1. 短冊形　泥質凝灰岩の核そのものを上下左右よりの打撃を受けた細長い平らな剝離作業面の連続で構成されている。殊に両側面は見事な剝離痕が併行している。刃部は欠損している。平らな表裏両面には摩滅部分が帯状に走っている。着柄の為か作業中に生じた使用痕を示すものか不明。何れにしろ本址中では大型，重量感に富んだものである。

2. 撥形　頁岩の剝離面を利用し基本形をつくり，両側面は粗な鋸歯剝離を頭部を除いて全周に施してある。薄手で鋭利であるから小細工用には手頃である。

3. 短冊形　暗緑色チャートの縦長剝片の側面にはつりを加えて分割痕を反復して体形を整えている。本斧は中央部で横に切断されている。新製品の時すでに切損を受けた為か刃部に使用痕らしきもの不明。



第28図　第2，第3号住居址上面集石中の石器実測図(1)（1：3）

4. 刃部のみ残す打製石斧　形は短冊形であったらしい。河原石の泥質凝灰岩を加工して両側面より細長い縦長の剝離痕を残して仕上げた大形石斧であったろう。刃部先端部は表裏両面から剝離されて粗な蛤刃形をなしているが，磨滅度が高度に進んで鈍化している。高度の使用に耐えた器であろう。

凹　石

5. 平盤状の安山岩　平面の片面ほぼ中央に凹孔が1つだけあり，外縁に噛り取られたような彎曲する打裂痕が表裏面に残り，凹孔は指掛の支えとして使用したと考える説もあるが最近発火器説は顧みられなくなってきている。

（2）　第3号住居址上面集石中の石器　（第28，29，30図・図版12～16）

打製石斧

6. 撥形打製　剝離片の安山岩の左右の側面を表裏両面より剝離を加え鋸歯状の刃部を造り出している。先端部は多少欠損している。土木用具だけでなく小形という点でナイフ的な使用方法も考えてみたい。
7. 撥形打製　泥質凝灰岩の剝片を利用して両側端を粗雑に欠き取って外側に湾曲した刃部を造成している。誠に軽量な作品である。溝掘に実験してみると良好な作業ができた。
8. 短冊形　安山岩を縦長に剝離した粗末な造りで本体はねじれていて調整は非常に不良である。石質，石目の判断をあやまった為かも知れない。
9. 撥形打製　質のよくない泥質凝灰岩の左右表裏より打痕調整している。頭部欠損刃部磨滅痕あり，相当期間使用されたものか，使用頻度が大であったらしい。
10. 短冊形　頭部欠損し黒色緻密でかたい頁岩を使用した薄手仕上げである。刃部は磨滅痕と削痕が見られる。

石　匙

11. 母指の爪形に似た暗緑色のチャート片（20ｇ）の両面剝離調整してあり，頭部以外の側縁は全て細かい剝離の連続による弧線上の刃付が行なわれている。一応石匙に入れたが掻器と呼ぶ人もあるかも知れぬ。
12. 暗緑色チャート製（未完成品）　8割方作製してあるが上部つまみ部分の片面だけは剝離して形を付けてあるが，その反対側の部分は原石のまゝで中止している未完成石匙である。形は横型で非常に細かい鋸歯形の刃がつけられている。

石　鏃

13. 黒耀石製無柄でわたくりがあり，鋸歯形に刃部を剝離調整し全体の形は二等辺三角形に仕上げてある。

14. 黒耀石製無柄であるが，慈姑葉形で刃部は鋭く破砕され剝離調整はよい。

15. 黒耀石製無柄でやや大形品。刃部は切込みの深い鋸歯仕上げで刃の１つ１つが小突起状に鋭く外刺している。後晩期の特色を現わした刃付と言われる。

凹　石

16. 安山岩の片面に２個の凹孔ある長方形自然石，２孔共小打痕の集中した場所が凹孔となり，その後凹孔には何かの理由で回転状の削痕が付着されたらしい。

17. 安山岩の両面に各縦に並んで２個の凹孔あり，何れも回転摩耗痕が明瞭に示されている。最初から回転穿孔されたらしい。

18. 長方形の軟質砂岩の河原石に片面に縦に３個の凹み，その裏面に１個の凹みを持つ，３個連なる凹部は径が大きい。使用の瀕度もさることながら石質の軟弱さによるものではないか。これらの凹孔は何れも小打痕の集中した部分が凹みになりその凹みにつけられた回転跡は後次的なものであろう。凹みは浅いものが普通である。

19. 砂岩　叩石兼用に使用したと見え両先端部及び側面に小打裂痕が蜂巣状を呈している。凹孔は何れも小刺突打痕の集中部分が凹みを形成したものである。

20. 安山岩　扁平小板状で両面に凹孔，３凹孔所有面は広範囲の打痕の中で集中度の大な個所が凹みとなり，それに回転磨耗による擦痕跡が伴っている。１孔面は一様に砥磨を受け平滑化が進んでいる。磨石としての役目も荷っていたのであろう。

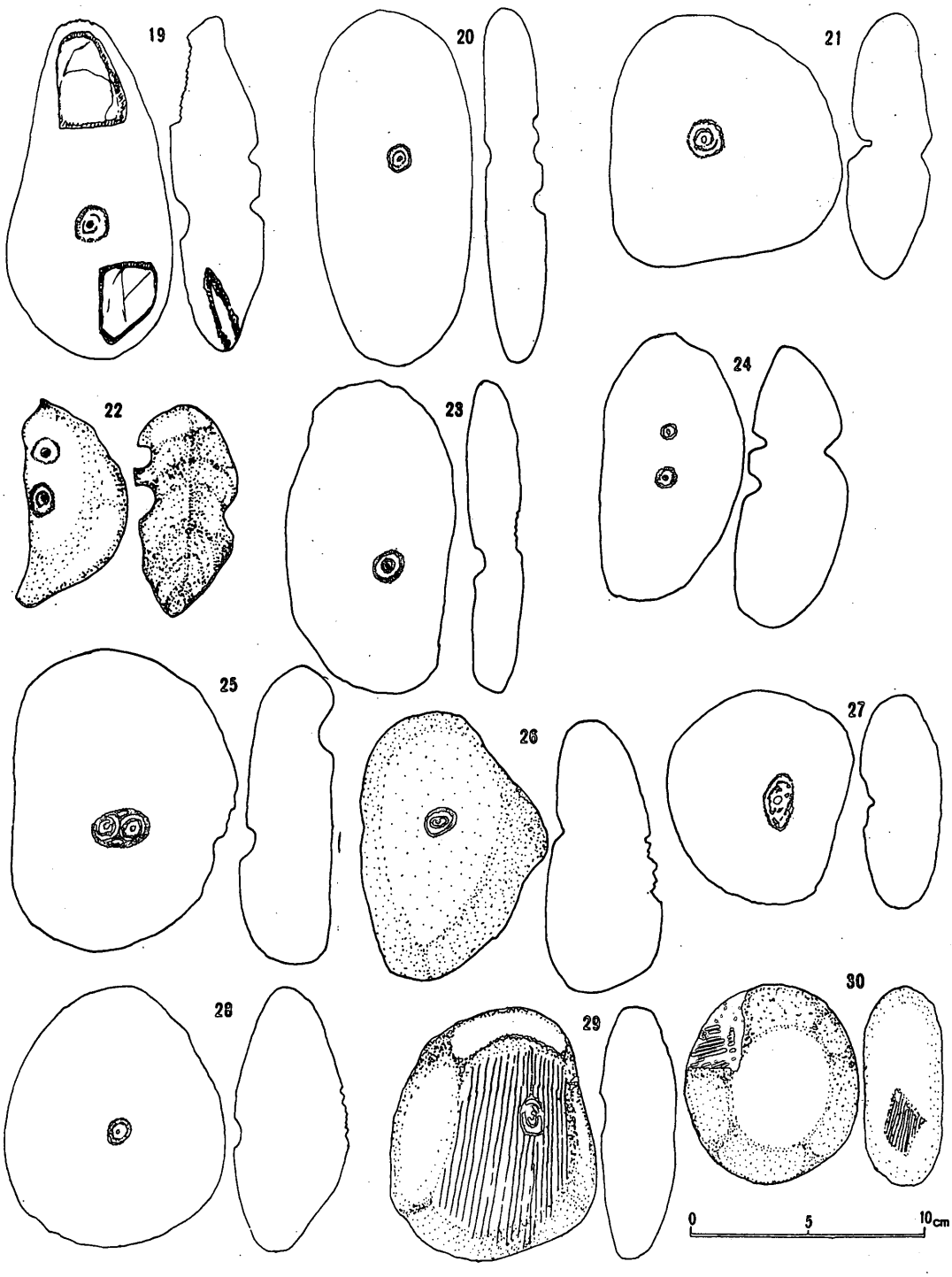
21. 砂岩　両面に１凹孔ずつ存する。１孔は刺突の集中痕の作用で構成されたものであり片面１孔は滑らかな回転擦痕の結果生じたものである。

22. 泥質凝灰岩で軟質である為，元来は球状であったものが半分に割れ，凹みは１孔と２孔であるが何れも大きく深い回転擦孔となっている。

23. 凝灰岩　凝灰岩で原石はあばた面が多い。そのあばたを利用して両面に小打撃の集中を加えて凹孔１孔ずつ形成している。

24. 粒子の粗雑な砂岩２孔と片面に１孔を有するが，何れも回転擦痕で，同心円弧状横線が凹孔内に認められる。

25. 砂岩　一面に密接して擦痕回転孔２つ並んでいる。裏面上部は小指がはいる程の擦痕凹孔である。凹みの最奥部は鈍化して内湾状をなしている。



第29図　第3号住居址上面集石中の石器実測図(2)（1：3）

26. 軟質粗粒子の混じった凝灰岩　片面1孔のみ，反面は多数の小打痕を広く受けて，打裂痕化して凹孔をつくらず，叩石的となっている。

27. 安山岩　片面に1孔を有す。最初は2孔であったものが回転磨耗化の進行により一体化したものである。

28. 灰白色泥質凝灰岩　硬度のある平滑な両面のほぼ中央に何回も小砂裂痕を集めて凹孔をつくっている。片面は1孔を備え得たが反面は何ヶ所かの小打撃痕に終ってしまっている。

29. 凝灰岩　1凹孔を有する平面は縦にほぼ併行線状の削痕がある。凹石から磨石に転用されたものか，扁平楕円形の故麻石的条件も備えた石である。

磨　石

30. 安山岩　扁平円形で表裏の平面に磨滅痕あり，側面部分に削擦痕あり。

31. 粗粒子を多分に含む泥質凝灰岩　表裏両面平滑な砥磨面を備えている。石質は脆弱すぎ製粉用としして石皿上で使用した場合崩壊石細粒も混じ使用し難いもの故他の用途，例えば土器製造過程の叩き，整形又は住居址構築等の道具として使われたかも知れない。

32. 灰白色泥質凝灰岩　三角状をなし三面が平滑に砥磨状擦痕が上下方向につながっている。

(3)　縄文晩期遺物出土地点（C地区）集石中の石器　（第30,31図）

打製石斧

33. 灰黒色の安山岩　両側面を打割って板状の粗形を造り，更に四隅の部分を調整して短冊形に仕上げている。頭部にわずか原石の表皮を残し先端刃部は欠損している。

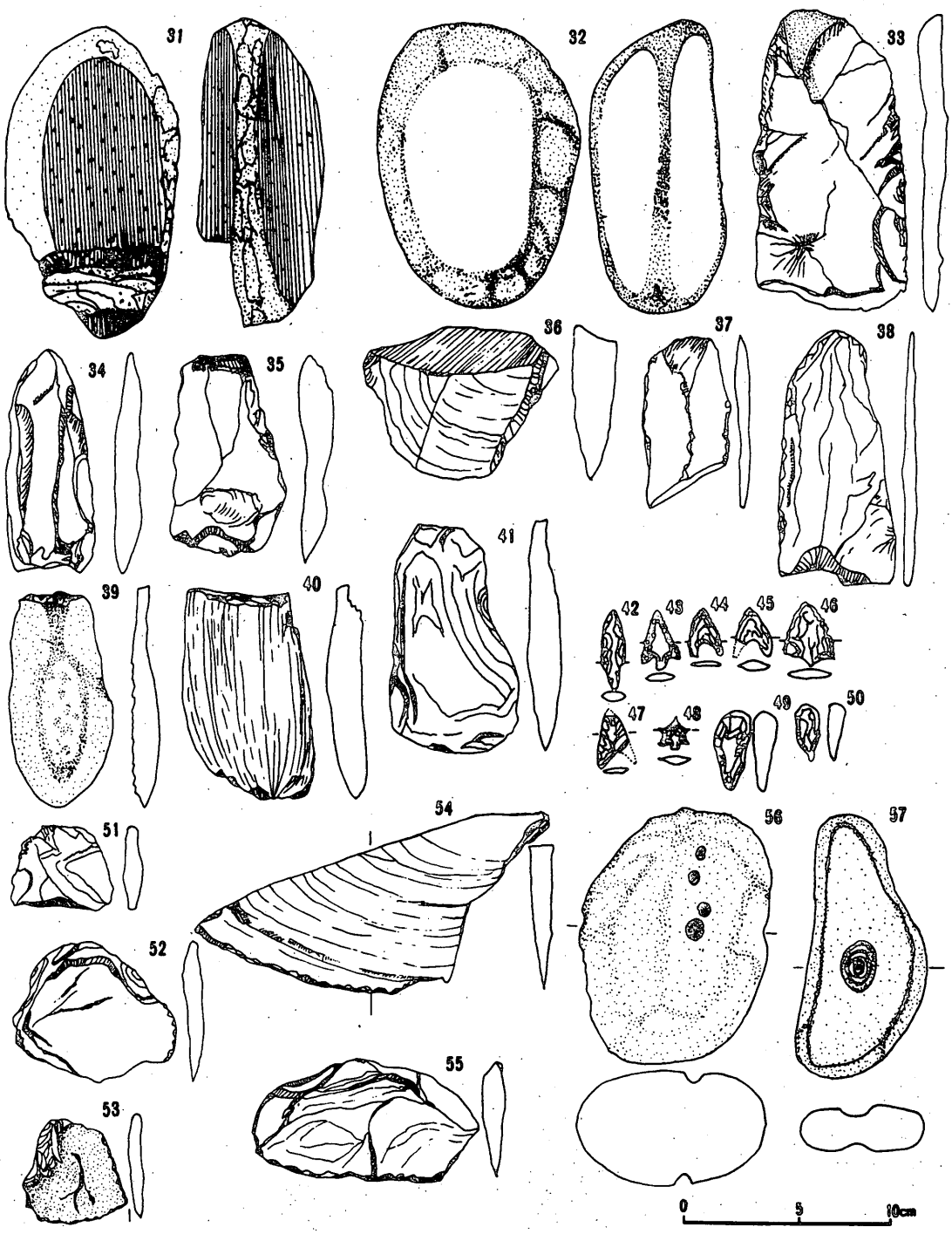
34. 粒子密な安山岩　棒状の原石の両側面を剝離して扁平撥形に仕上げてある。器全面は長年使用の故か刃部及び打裂によるひだ等は磨滅して鈍化した稜角となっている。使用痕顕著な好例石器の1つである。

35. 灰白色の安山岩　撥形。石核の剝離片を利用したもので，わずかに内湾している。薄手小形軽量仕上げで頭に敲打痕あり。

36. 灰黒色硬質砂岩　本址としては大形石斧の横断された先端部で，製作後多く使用されぬうちに廃棄されたらしく刃部の鋭角面が磨滅せず残存している。

37. 安山岩　表皮面を剝離加工した短冊形で中央胴部で斜に切断され下体部は欠損。小形薄手仕上げで両側縁の打裂痕は磨耗されず鋭利である。

38. 灰黒色堅緻な泥岩　最大厚0.5cmという非常に薄い剝片を利用した左右両端は鎌の刃の如く鋭利な刃部となっている。扁平部表裏とも磨耗痕が比較的明らかで，着柄痕が考えられる。後晩期的生



第 30 図　第 3 号住居址上面集石及び縄文晩期遺物出土地点集石中の石器実測図(3)（1：3）

産面につながる道具と見るべきか。

39. 硬砂岩　剝片を加工調整したもので，表皮を片面に留め裏面は剝離面で表裏極めて対照的である。刃部は多少刃こぼれはあるが鋭利である。

40. 緑泥片岩　頭部欠損，刃部は刃こぼれ多大。全面に縦縞状の擦痕が見える。

41. 泥質凝灰岩　川原石を撥形に調整し胴部中央部側面に括りがつくられ周辺部はきめ細かい磨耗面となっている。

石　鏃

42. 柳葉形　黒耀石製，断面菱形に近い感じ。完形品である。刃部は全面的に磨耗度が進み鈍化しているから相当実用化に供されたものであろう。「この形式の主として多く現われるのは後期以後で東日本に限られる」と考古学辞典に記されている。

43. 有柄形で頁岩　全て丹念な仕上げ，鋭利な二等辺三角形で本体の側面は細かい鋸歯形に切込みが付され，正に後晩期の代表的なものとして挙げられる。

44. 無柄，頁岩製で先端部欠損，総じて刃部の磨耗度は進んでいる。

45. 無柄，黒耀石で片方のわたくり欠損，磨耗度は進んでいる。

46. 有柄，頁岩柄は短く断面は左右菱形状にひろがっている。慈姑葉形に先行するものと聞いている。

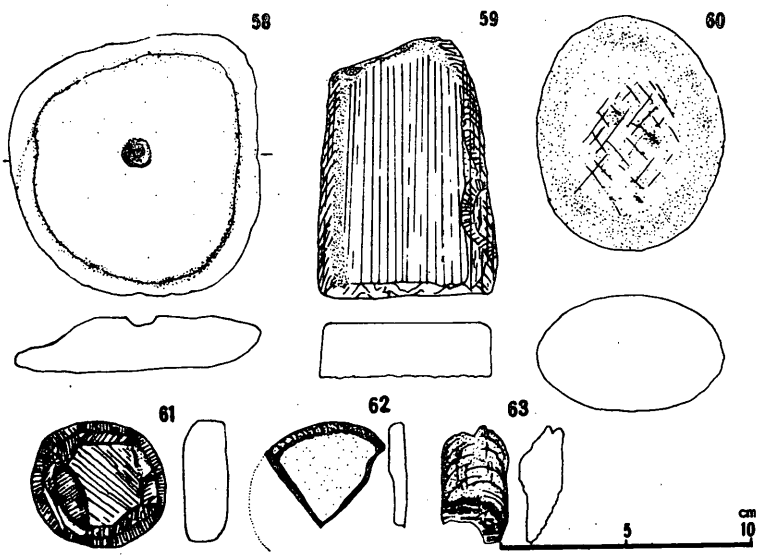
47. 無柄慈姑葉形　黒耀石製，雁股と先頭部欠損している。刃部は磨耗鈍化している。

48. 有柄，飛行機形，黒耀石製。左右の側縁に2個所の小突起があり晩期特有のものと吉田格氏は「関東の石器時代」の中で述べている。本址（後晩期主体）では最小，軽量且つ唯一のものである。

石　錐

49. 頁岩で錐の先端は使い古した鉛筆の芯の如く短くなり回転による磨滅度の大と使用頻度の激しさを表わしている。

50. 黒耀石　先端部欠けている。最近有径石鏃と見えるものを石錐として使用した例もあり慎重論が出ている。



第31図　縄文晩期遺物出土地点集石中の石器実測図(4)（1：3）

表3　出土石器一覧表（単位cm・g）

（註　数字は各々最大値）

図No.	No.	遺構名	種別	形体	長	巾	厚cm	石質	重g	備考
28	1	A区2号集石	打製石斧	短冊形	17.0	6.0	2.5	凝灰岩	460	刃部欠損
〃	2	〃	〃	撥形	7.0	4.6	1.2	頁岩	60	完形
〃	3	〃	〃	短冊形	6.0	3.2	1.2	チャート	40	刃部欠損
〃	4	〃	〃	〃	5.4	6.5	1.7	凝灰岩	100	胴部欠損
〃	5	〃	凹石	版画1凹	14.1	9.5	2.8	安山岩	680	一部崩壊
〃	6	A区3号集石	打製石斧	撥形	10.0	5.6	1.4	〃	70	完形
〃	7	〃	〃	撥形	11.0	5.3	1.2	凝灰岩	100	〃
〃	8	〃	〃	短冊形	13.0	4.5	1.6	安山岩	120	〃
〃	9	〃	〃	撥形	9.0	5.3	2.6	凝灰岩	160	頭部欠損
〃	10	〃	〃	短冊形	8.1	5.4	1.1	頁岩	60	〃　刃に削痕が見られる
〃	11	〃	石匙	母指形	3.0	2.8	0.5	チャート	20	完形
〃	12	〃	〃	横形	2.6	5.1	0.8	〃	15	未完成
〃	13	〃	石鏃	無柄	2.5	1.4	0.2	黒耀石	0.2	完形
〃	14	〃	〃	〃	2.5	1.5	0.3	〃	0.2	〃
〃	15	〃	〃	〃	3.4	2.1	0.3	〃	0.3	刃部鋸歯仕上
〃	16	〃	凹石	版画2凹	15.0	4.6	3.6	安山岩	400	完形
〃	17	〃	〃	両面に各2孔	12.7	6.0	4.4	〃	330	〃
〃	18	〃	〃	片面3孔 裏面1孔	14.3	6.8	3.6	砂岩	250	〃
29	19	〃	〃	片面1孔 裏面2孔	14.	9.7	3.8	〃	450	叩石兼用
〃	20	〃	〃	片面1孔 裏面3孔	15.1	6.6	2.5	安山岩	460	磨石も兼ねる
〃	21	〃	〃	表裏各1孔	11.1	10.0	3.4	〃	550	完形
〃	22	〃	〃	片面2孔 裏面1孔	9.0	4.5	4.3	凝灰岩	180	球形状が半割になっている
〃	23	〃	〃	片面1孔	14.0	7.2	2.5	〃	350	完形
〃	24	〃	〃	片面2孔 裏面1孔	16.0	5.9	4.2	砂岩	550	〃
〃	25	〃	〃	片面2孔 裏面1孔	12.8	9.5	3.6	〃	850	〃
〃	26	〃	〃	片面1孔	11.5	7.8	5.0	凝灰岩	560	叩石兼用
〃	27	〃	〃	〃	9.2	7.7	3.0	安山岩	310	完形
〃	28	〃	〃	〃	13.0	9.5	4.8	凝灰岩	560	〃
〃	29	〃	〃	〃	18.0	8.5	3.0	〃	420	磨石兼用
〃	30	〃	〃	楕円形	8.6	7.3	3.5	安山岩	270	〃
30	31	〃	磨石	長方形2面	13.0	7.5	5.0	〃	500	完形
〃	32	〃	〃	3面のプリズム形	12.8	9.6	5.6	凝灰岩	600	〃

図No.	No.	遺構名	種別	形体	長	巾	厚 cm	石質	重 g	備考
30	33	C区集石	打製石斧	短冊形	12.9	6.5	0.8	安山岩	170	先端刃部欠損
〃	34	〃	〃	撥形	7.5	3.6	1.0	〃	50	完形
〃	35	〃	〃	〃	7.1	4.6	1.4	〃	48	〃
〃	36	〃	〃	不明	5.0	8.5	2.0	砂岩	110	胴体部欠損
〃	37	〃	〃	短冊形	7.0	3.7	0.6	安山岩	20	胴部下体部なし
〃	38	〃	〃	撥形	11.0	4.3	0.5	泥岩	40	完形　薄手仕上
〃	39	〃	〃	短冊形	9.8	4.5	1.0	砂岩	50	完形
〃	40	〃	〃	〃	9.0	6.0	1.5	緑泥片岩	170	上部折損
〃	41	〃	〃	撥形	10.0	5.0	1.5	凝灰岩	110	完形
〃	42	〃	石鏃	柳葉形	3.0	1.0	0.3	黒耀石	0.4	〃
〃	43	〃	〃	有柄形	2.3	1.5	0.2	頁岩	0.4	〃
〃	44	〃	〃	無柄	2.0	1.8	0.3	〃	0.3	先刃部折損
〃	45	〃	〃	〃	2.1	1.0	0.3	黒耀石	0.2	わたくり一部欠損
〃	46	〃	〃	有柄	2.7	2.2	0.4	頁岩	0.3	完形
〃	47	〃	〃	無柄	2.6	0.6	0.3	黒耀石	0.3	わたくり欠損
〃	48	〃	〃	ヒコーキ形	1.5	1.3	0.3	〃	0.1	完形
〃	49	〃	石錐		3.5	1.5	1.5	頁岩	4.0	〃
〃	50	〃	〃		2.1	1.0	0.8	黒耀石	0.3	〃　尖端磨耗大
〃	51	〃	石匙	縦形	3.5	3.0	7.0	頁岩	20	〃
〃	52	〃	〃	横形	6.0	7.0	8.0	硬砂岩	50	〃
〃	53	〃	〃	縦形	4.5	4.2	0.5	頁岩	10	〃
〃	54	〃	〃	庖丁形	6.1	16.0	1.0	凝灰岩	170	〃
〃	55	〃	〃	横形	5.0	9.8	1.0	硬砂岩	100	〃
〃	56	〃	凹石	楕円	11.0	8.0	5.0	砂岩	550	片面4孔　裏面3孔
〃	57	〃	〃	長楕円	11.5	5.3	2.0	〃	180	完形
31	58	〃	〃	不整円板	10.0	9.5	2.1	安山岩	300	〃
〃	59	〃	砥石	長方形	11.1	7.0	2.1	凝灰岩	330	砥面上と左右にあり
〃	60	〃	磨石	楕円	9.5	7.4	4.6	砂岩	320	完全
〃	61	〃	石製品 石製円盤	円形	5.3	4.8	0.8	〃	60	〃
〃	62	〃	〃	〃	6.0		0.7	〃	10	不完全 全形の$\frac{1}{4}$の残欠品
〃	63	〃	石棒	棒状	4.5	2.6		結晶片岩	60	〃（残存部分のみ）

（中島豊晴）

石　匙　本址からは整った摘のついたものはなく粗製である。

51. 頁岩製で刃部欠損。

52. 硬砂岩　核を両面から打欠いて，先端にいくつかの小剝離を加えている。

53. 頁岩　剝片を利用して薄手に仕上げてある。

54. 泥質凝灰岩製で剝片を利用した出刃庖丁形仕上げで小剝離痕の連続で精密につくられている。胴部に同心円状の剝離痕あり。

55. 硬砂岩　横刃庖丁形で刃部は磨耗している。

凹　石

56. 扁平な楕円形をなし，側面及び特に長軸の両端は無数の小打痕を受けアバタ面となっている。粒子の粗な砂岩で表面に4孔，裏面3孔を穿っている。これら凹孔は何れも打痕面を擦ることによって生じた浅い凹みである。

57. 砂岩川原石で表裏面に各1孔が穿たれている。母岩の堅緻なものは凹孔の数は少ないが，凹孔の方は大となる傾向が見られるという。

58. 安山岩　不整形のせんべい形で一面にのみ1凹孔を有し，周縁部には磨耗痕が見られる。この孔は穿孔回転によって生じたものらしい。打痕らしきもの見当らず。

砥　石

59. 凝灰岩　扁平長方形で上面と両側面は砥として使用された顕著な研き出し面が見られる。裏は全くの自然面である。側面の厚さ2㎝の砥磨痕は片減りの為ゆるい斜角面をなしている。

磨　石

60. 砂岩　分厚扁平卵形をなし両面は縦横に直線的な細削擦痕が走り微小な打裂痕の集中部も見られるが，全体的には平滑な研磨面におおわれている。

石製品

61. 石製円盤　灰白色軟質砂岩で5×5㎝，厚さ2㎝。表面は平滑に研磨され円周縁は不整形隅丸に研磨され，一見円形を呈しているが，細部は約2～1㎝の研磨面7個所を持つ不整円である。径5㎝，厚さ2㎝で表裏側面全て入念な砥磨を受けている。本県では稀有な存在ではなかろうか。用途に関しては石器，土器等を砥磨調整する研磨用工具と見るか祭祀・装飾的なものか不明である。とに角数少ない全面研磨面におおわれたやや不整形円盤であるから，一応土製円盤に対して石製円盤

と仮称する。

62. 硬質砂岩で原形の$\frac{1}{4}$位の残存部分で扇形をした厚さ 0.5 cm，半径 3.6 cm の円盤の一部分である。裏面は火熱を受けて赤変し剝落部分もある。元来は現在よりは厚味を保っていたと推定される。外側の縁は細かい打痕によって円弧に仕上げ更に研磨を加えて修正した極めて丁寧な仕上げになっている。用途については不明。前記と同じく石製円盤として置く。尚これら石製円盤は晩期特有のものではあるまいか。

63. 石棒　晩期に多く見かける小形細身の残片である。結晶片岩製で本体の大部分を失っている。この岩石は三峰川水系産のもので此の辺には見当らぬ。運移が考えられる。

（中島豊晴）

（4） 住居址内及び各グリット出土石器 （第 32 ～ 36 図）

ここでとりあげた石器は集石中出土のもの以外であり，第 1 号住居址他各グリットより出土したものである。

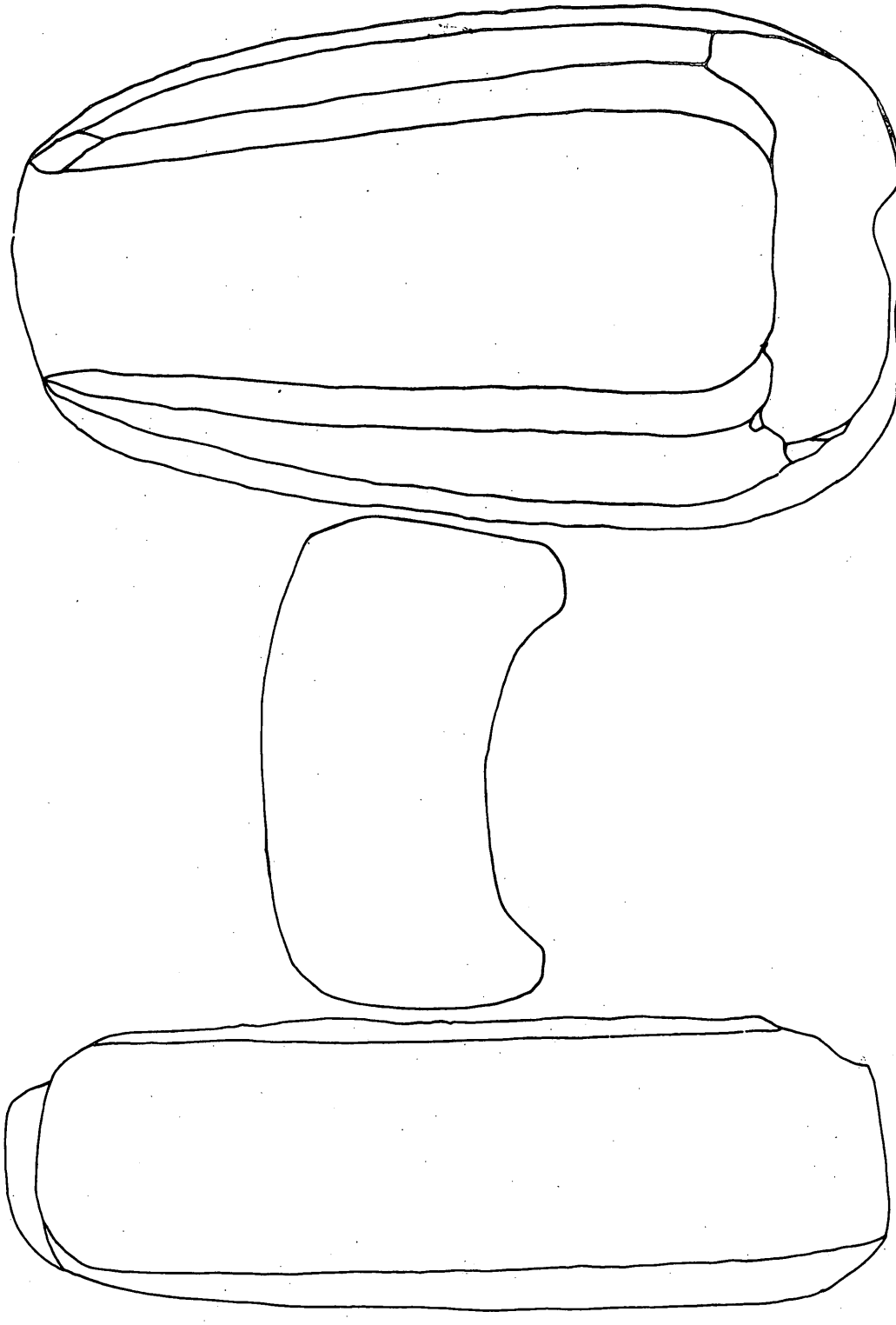
第 32 図は第1号住居址床面に伏った状態で出土した石皿でやや細形の完形品である。安山岩製で磨面は深くくぼめてある。

A グリット出土石器は石鏃 4，打製石斧 13，スクレイパー 3，磨石 6，凹石 5，石錐 1，石棒 1，剝片石器 8 が出土している。

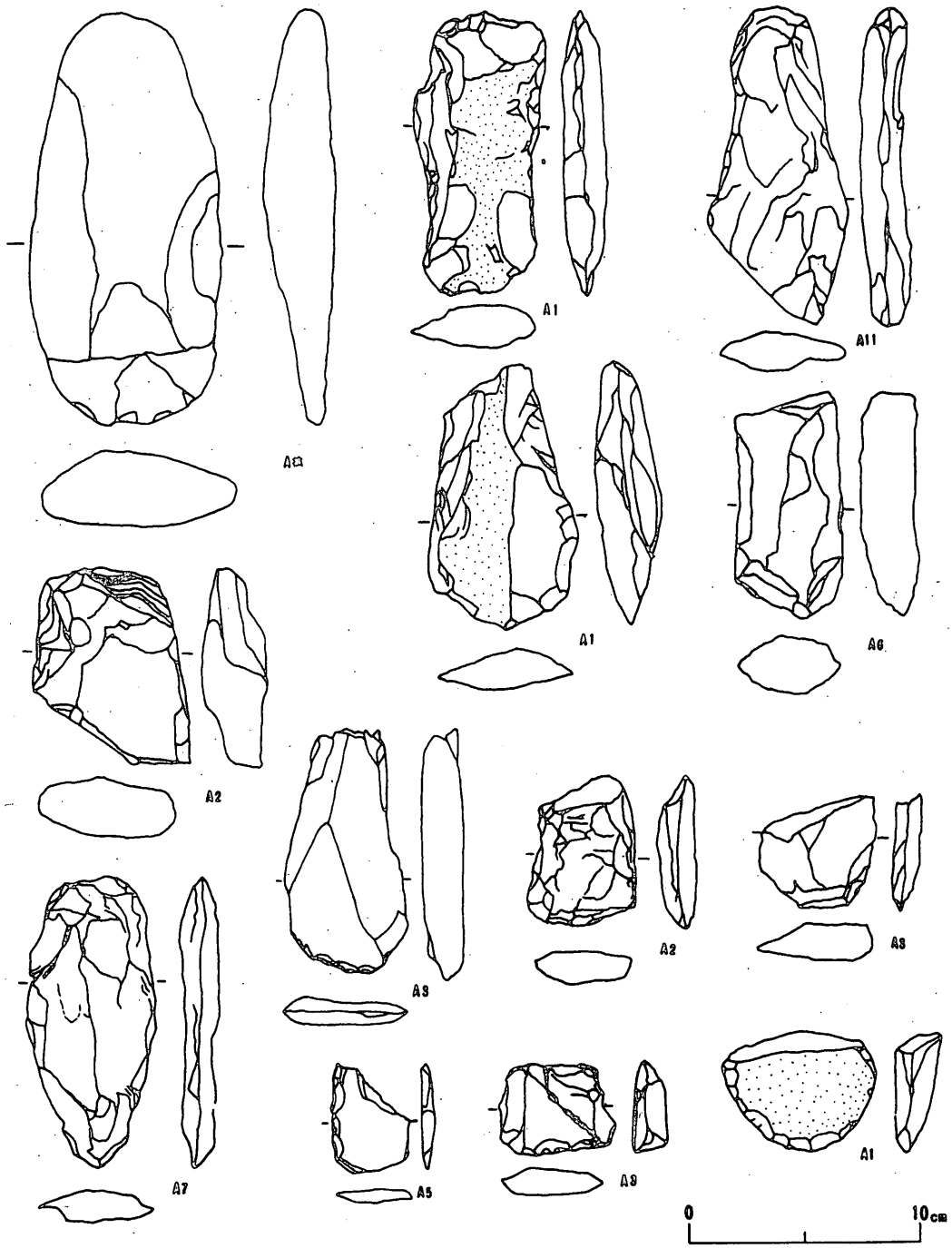
B グリットでは石鏃 1，打製石斧 2，凹石 2 と少なく，各グリットから黒耀石片が数多く検出されたが多少とも加工痕の見られるものはなかった。

C グリットでは石鏃 6，打製石斧 5，磨製石斧 1，凹石 2，磨石 1，石皿片 1 である。

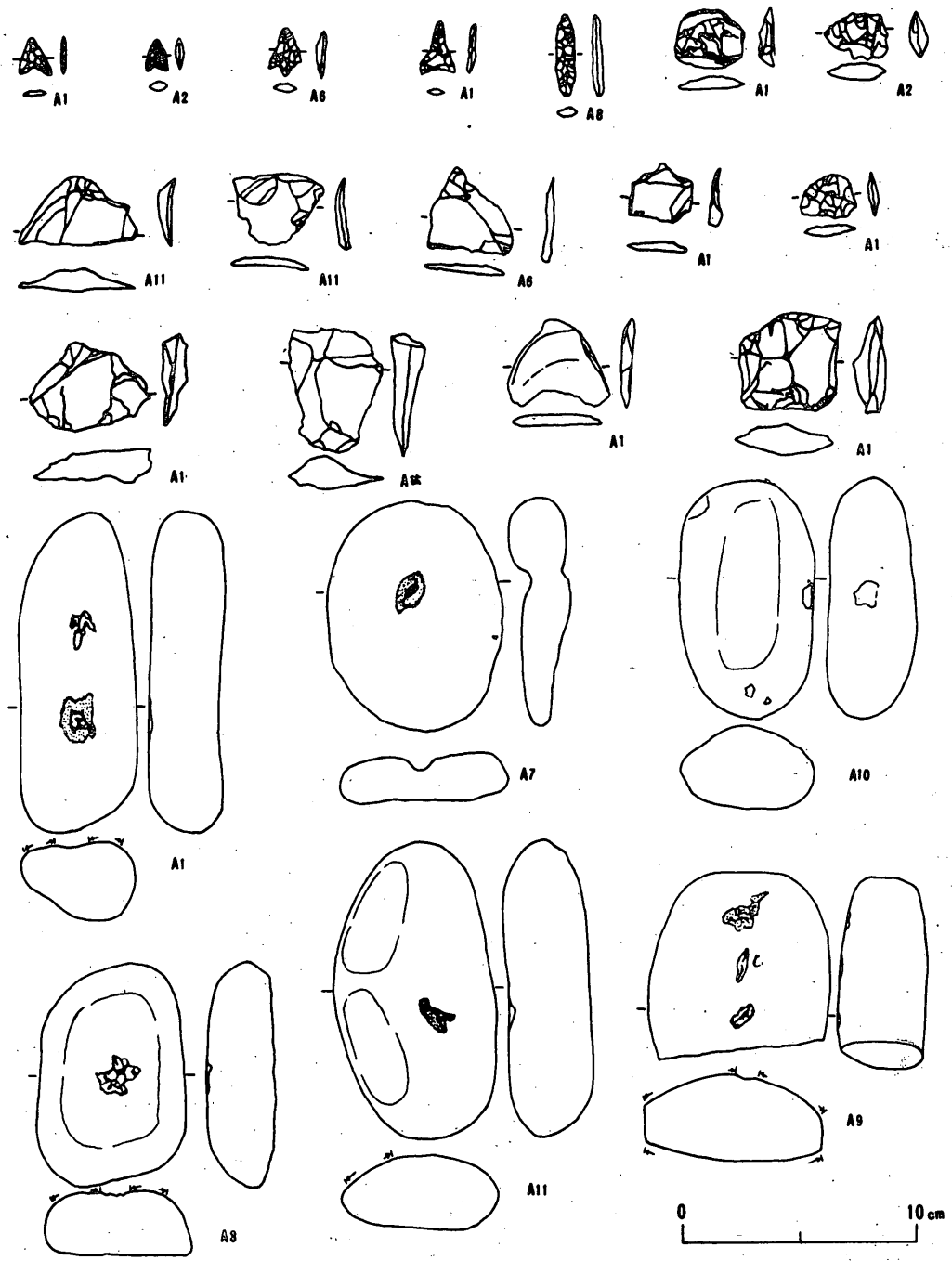
（宮城孝之）



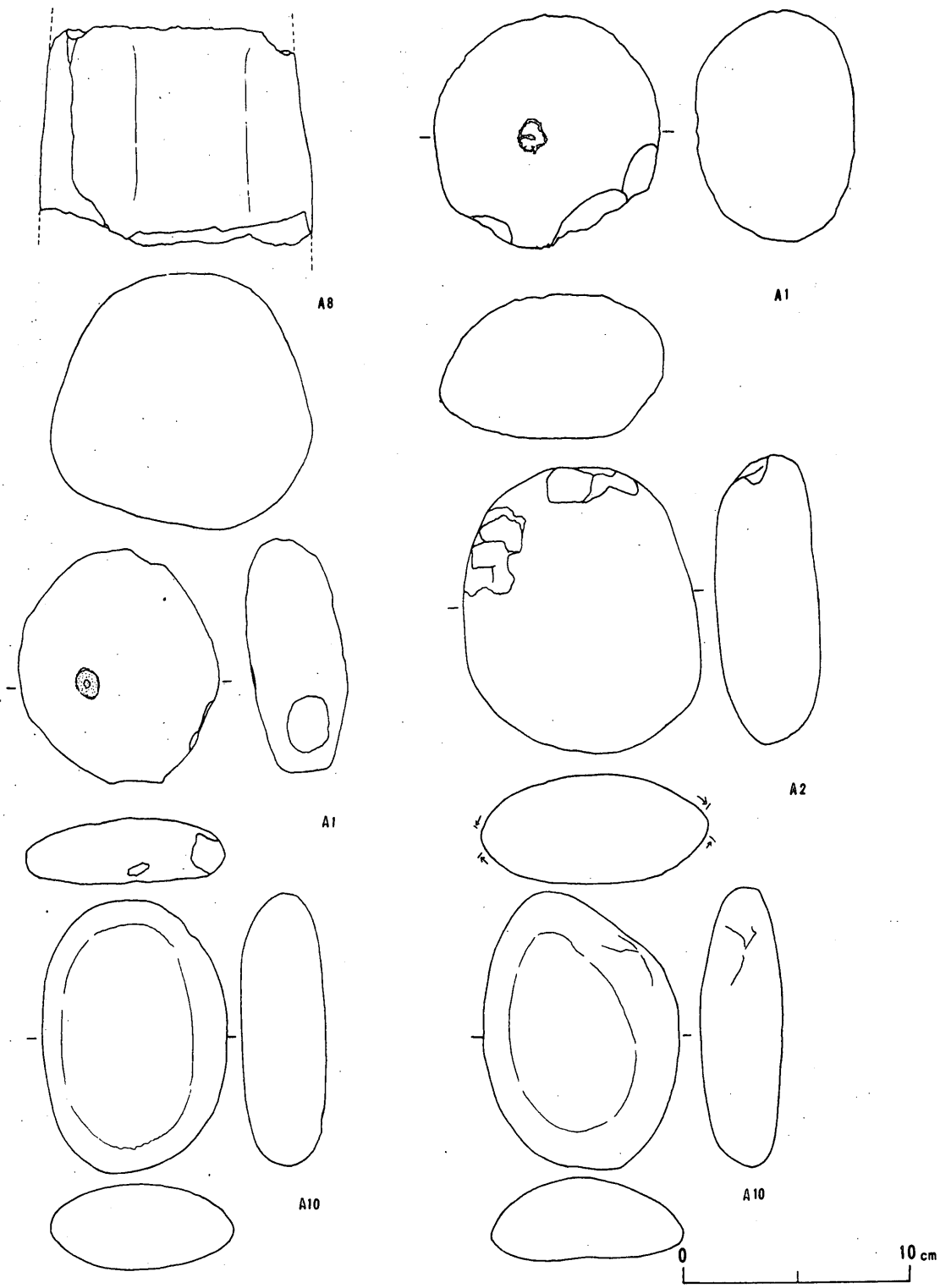
第 32 図　第 1 号住居址出土石皿実測図（1：3）



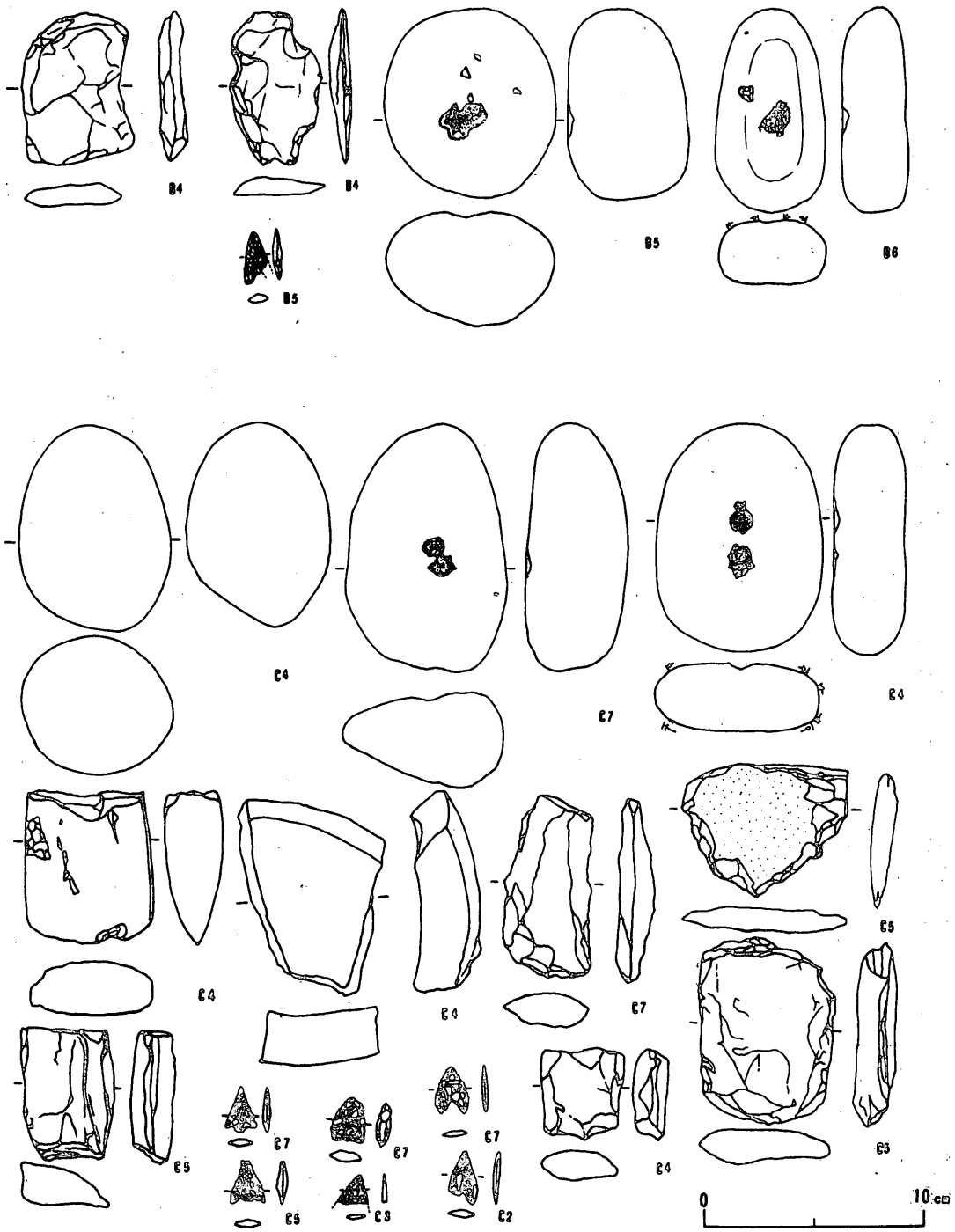
第33図　Aグリット出土石器実測図(1)（1：3）



第34図　Aグリット出土石器実測図(2)（1：3）



第35図　Aグリット出土石器実測図(3)(1：3)



第36図　B，Cグリット出土石器実測図（1：3）

第5章　動　植　物

第1節　動　物

出土骨類について

A，Cトレンチのそれぞれに微細な骨類が検出された。いずれも動物骨と見做されるものであるが，種等の同定に足る資料ではない。

第2号住居址出土　内部の炉址中の充塡土上方に包埋されていたものである。数ケの細片で，いずれも白色を呈する焼骨であるが，形状は究め難い。

第3号住居址出土　住居址の南壁に附着し，床面より僅かに浮上した位置で検出された。故に覆土よりの陥ち込みか，又は隣接する第2号住居址との関連も考えられる。周囲に焼土や炭化物の分布は見られなかった。出土時において，長さ約3.5cm，太さ約1cm程度の短小な長管骨で，骨表面に一部黄褐色を残すが，全体に白色，横断面は灰白色の焼骨である。火熱により亀裂を生じ，彎曲する性状を残すが，形態，部位の鑑定は不可能である。

C－7トレンチ出土，本トレンチよりの骨類の出土状態は，遺物の出土がかなり輻輳を極め，遺構の確認に難渋したのと同様に，全く判然としない。しかしトレンチ北寄りの濃密な集石に伴う遺物類に共伴し，点状に散布する傾向が窺える。多くは密集する小礫の間隙や下部に附着する状態で遺存する。それらは総て骨片化し，形態や部位の確認はできないが，骨の緻密質は堅緻で，表面は滑沢，管状部が彎曲している。いずれも焼骨である。

以上が本遺跡における骨類の出土状況であるが，例えば古人骨の場合，骨質は脆く，表面は粗造性に富むのを特徴とするが，本資料は色調，硬化度等に火熱による変化を勘考しても，すべて動物骨と見做して差し支えなかろう。

僅かな骨片よりする類推は早急であるが，焼けた骨類が遺存する意味については，昨今，多角的な照射が得られている。骨類の保存に不適な中部高地においても，焼骨（人骨を含む）の出土が頻々と伝えられている。長野県内でも，縄文中期より終末期に至る遺跡で，特に敷石，配石，又は集石遺構に伴う，焼けた獣骨の存在が認められる傾向がある。これらも一般的に焼けた骨類を伴出しない竪穴住居址との関連からも，その多様性が指摘されるが，(註)本遺跡における焼けた獣骨の散在は，単なる食料残滓である可能性も含めて，逆に未確認の生活址の存在を示唆するものがあろう。

（西沢寿晃）

註．高山純　1976：配石遺構に伴出する焼けた骨類の有する意義　史学47巻4号，48巻1号

第2節　植　　物

炭質物について

炭化物（炭）の原材質を知ることにより，当時の植生を知る手がかりとなるので，床面上のものについて調べた結果は，他地域の同時代のものと，よく似ており，落葉広葉樹のクリ，ナラが主で，他に小片となっていて，樹種の決定困難ではあるが，広葉樹であることは間違いないものが2～3種含まれていた。針葉樹は極めて少なく，小片がわずかに存在するのみであった。つり手型土器の方向に向いて横たわっていた炭化丸太は，半ば炭化した，太いクリ材であることがわかった。

以上，炭質物から見る限り，針葉樹が少し混ざったクリとナラの多い落葉広葉樹林であったと推定される。

（森　義直）

第6章　結　　語

最初に感謝を申し上げたいこと。

「干泥荒処」という語が古文書に見えるが柳田遺跡はまさにそれであった。土質は浅い表土を一皮剝げば日干し練瓦の如く堅く，雨水を受ければたちまち泥濘と化すと言った典型的な悪土であった。発掘作業は夏の草いきれと燃えるような炎天下で干泥荒処との対決は結局月余に及ぶこととなった。此の発掘は市教委事務局を主軸とし綿密な計画設定のもとに体制が組まれ，信州大学生諸君の若さと学をもとめて止まない旺盛な探求心と中信考古学会員の経験と体得した豊かな知識と的確な状況判断力等の綜合力の結集が此の度の報告書となった。その他にも他大学生，高校生及び斯学に関心を持たれた方々の数々の御協力の多大であった事も決して忘れ得ない。

地形地層について

本址は美ヶ原山系に源を発する大六沢と通称される小流の右岸で北方より南東に緩傾斜する水田地帯にあり西方500 mの所は女鳥羽川が南流し，縄文晩期の川底遺跡として知られる女鳥羽川遺跡とも近接した類似性の地形に属し縄文晩期の遺物も多く検出している。

大六沢は本址付近を潤し大村部落の主要水源となり南流し惣社部落で山辺地区から西流する湯川と合流して女鳥羽川に併さる流路の短い小流であるが往古より渇水したことなく，何れにしても女鳥羽

川東辺山麓の小村を育てて今に至っている流れの一つである。

本址の属する地層は，黒色土が上下二層位に分かれている。これはかつて洪水のあった事を示すものであると森氏は述べている。表土の直下は赤褐色土層となり，その下部に再び黒色土層が現われ，礫の多い所，少ない所，又は全くない層が見られるが，これは河川堆積物の一般的現象である。礫層は一般に南東方向に流水作用を受けた傾向が見られるから女鳥羽川の水勢を強く受けた時代もあり，大六沢の小流は山沿いに押され乍らも小地形の生活面を造立して今日に至ったと思われる。尚本址西方200ｍに所在する本郷高校及び国司塚古墳は南北に延びる女鳥羽川の自然堤防上に位置し，本址との比高差は約１ｍ高く，縄文期以来安定部分と不安定な氾濫部分とが錯綜していたと考えられる。

本址の遺物について，Ａ地区における遺物は表土中からもその下の赤褐色土及び更に下がる礫混りの黒色土層とその直下の褐色土層の堺目（漸移層）の黒褐色土層からも発見されているが，概して上層部は微量の縄文前期の小破片（諸磯Ｃ）と大部は中期及び中期半と晩期と少数の土師，須恵片の混在が見られる。これらは在地の遺物か氾濫流入による他からの遺物か不明のものが相等量存在した。下部の黒色土層，特にＡ地区においては時期的にも縄文中期をやや下がる安定した遺構と大量の遺物が最も確実な状態で検出されている。

Ｃ地区では晩期を中心として後期を含む脆弱な土器の細片がバラバラと散布状態で発見され且つ多様な石器類の検出も見られたが，明確な遺構は突き詰め得なかった。

Ａ地区に於て注目されることは縄文中期をやゝ下まわる時代に属する釣手土器と称される浅鉢形の器に橋状の釣手を付し，それに吊り下げる為の装置を設けた数すくない逸品の出土である。藤森栄一氏は照明具と明言しているが他に防虫香炉説もあり，何の遺跡からも発見されるという普遍性を持った器でもない。これが完形で姿を見せたのは幸いであった。釣手形土器と呼ばれる器の分類については，藤森氏がその著「縄文農耕」に示された分類と「長野県埋蔵文化財発掘調査要覧・その１」・「信濃考古資料」等に記載されている内容とは異なっている。両者共に釣手形と認めるものと前者が釣手としたものを後者は香炉形としている点は特に際立を見せてくれる。この種の器の分類について詳説は避けるが釣手形・懸垂形・香炉形・香炉等と時代別，祖元器形別・紐掛の装置の有無等によって分類区分けする諸説も根強いから円弧を描く釣手だけの部分のみを見て即断する事のないよう留意する事も必要である。

２号址の石囲炉内の火つぼは倒立させて４つの耳状突起を持つ口縁部を火床中心部にすえ首部を残し胴部を輪切状に切断した加曽利Ｅでもやや古い方に位置づけられる小形壺で，逆位の火つぼ例は曽利Ⅱ式に多く見られる現象である。火つぼは火種を保存する為のものであったと言われている。この種の土器は埋甕として口唇部床面に埋めて使用された例は非常に多く，無疵の出土例はたくさん知られていると藤森栄一氏は「縄文式土器」の中で述べている。そして特殊な埋甕として用いられ，この種のものは石蓋のないのが原則である。逆位の火つぼも特別な意味を蔵するものであろう。

石器類（126個）の中で打製石斧は38個，凹石は27個であった。打製石斧と凹石が多量であることは何処の遺跡でも常識化されているが本址の場合もそうである。何故かくも共通して他石器類に比して多量であるかという事の結論は用途と共に不明瞭になってくる。

打製石斧の用途は結論は出なくとも土掘り具を主とし木材の伐採，根切り，枝下し等とその用途の多様化に伴う量産化が思考されるが，凹石となると極めて難解である。凹石は発火のため，堅果を潰す為といっても余りにも多量すぎる。凹孔は小打痕の集中化によって形造られたものが多い。これは塩尻市小段遺跡，波田町麻神遺跡においても同様であるが回転磨耗痕によるものと打痕の中に回転磨耗痕の見られるものとの3つの凹孔に分けられそうだ。現今発火具説は色褪せてきているが火鑽杵の上置の重し石が杵の回転の結果の凹か又は別なものゝ回転磨耗なのか，又はクルミ割りの結果生じたものであろうか。

藤森氏は多量な凹石の必要理由として焼畑の携帯用発火具と考えられないかとの仮説を立てられたこともある。

本址出土の凹石の凹孔の直径の平均値は1.5㎝である。この極めて浅い凹孔を有する石は早期に現われて弥生時代迄存続する一握りの礫器にすぎないが，不思議な命脈を保った器で凹孔の解明はずっと先のこととなるだろう。

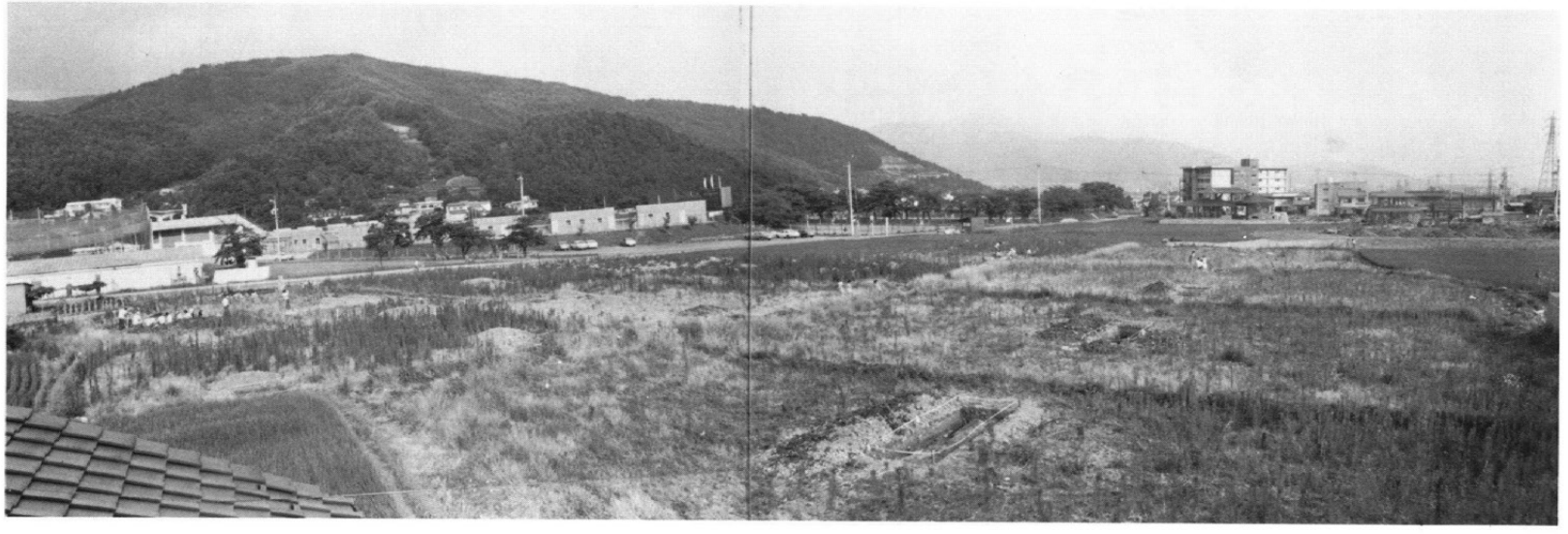
所謂「土器溜り」についてであるが，A地区3号址直上に折り重なって累集して発見された土器群のパターンは主として縄文中期全般を通して見られる現象でありこれもその現象と同一のものである。この説明について，「土器だまりともいわれる蝟集していたものは」・「蝟集」・「土器だまり」の土器類とは，等の表現で記されている文章を時折拝見するが，「蝟集」と「土器だまり」とは別なもの異質だと理解できそうだが実は同義語のものだったりで誠に難解な悪文となっている。蝟集とは何か辞書で当って見ると，「一時にむらがり集まること・旺文社国語辞典」「はりねずみの毛のように沢山のものが1ヶ所に集まってくる・三省堂国語辞典」「蝟の毛のように沢山集まること・岩波国語辞典」「はりねずみの毛のように一時にむらがり集まること・小学校漢和辞典」「はりねずみの毛のように一時に多く集まること・岩波広辞苑」等と出ている。明らかに「土器溜り」と「蝟集」とは別な語意を有するものである。又「土器が蝟集している」というよりは，はりねずみとか蟻といった動物が蝟集しているというのが本来的な使い方である。土器が蝟起（はりねずみの毛が立つように事がむらがり起こる）している。蝟縮（はりねずみのようにこわがって縮まる）しているといったら読者は一層困惑してしまう。統一用語がないからどんな用語でも差しつかえないという訳にもいくまい。

土器捨場・蝟集場・集積場と言えばこれにはそれぞれの意味が伴う，そこで「土器だまり」と言った言葉が現時点では最も穏当ではないかと思う。「水だまり」と同じように，往々「土器だまり」の下部には住居址が存在する。廃居に捨てられて溜ったものか。しかし廃棄にしては一寸修理すれば立派に再生可能なもったいない程の器もある。事実復元可能な土器はこの中からいくつも出ている。

元来縄文人は土器を大切に扱い割れたものを穿孔してつなぎ合わせて迄も大事に使用した痕跡もわれわれはしばしば見てきている。

どうも廃棄処分にする程の粗雑さも見えない，かと言って整然と配置した様子も全く見られない。この種の土器片には使用痕跡の顕著なものも少ないと言う。当時は土器は各自の家でこねられ，乾かされ晩秋初冬の燃料の富有な頃村合同で広場の一隅の露天で焚火で焼かれた。キズ物を始末した場所ではないか，悪質な流行病が猖獗をきわめ，廃居と化した無住居に悪霊の憑代として土器類を賽の川原の石の如く累積し鎮魂を祈った跡なのか，当時においては一種異様な精神的雰囲気を醸し出す場所であったにちがいない。

（中島豊晴）



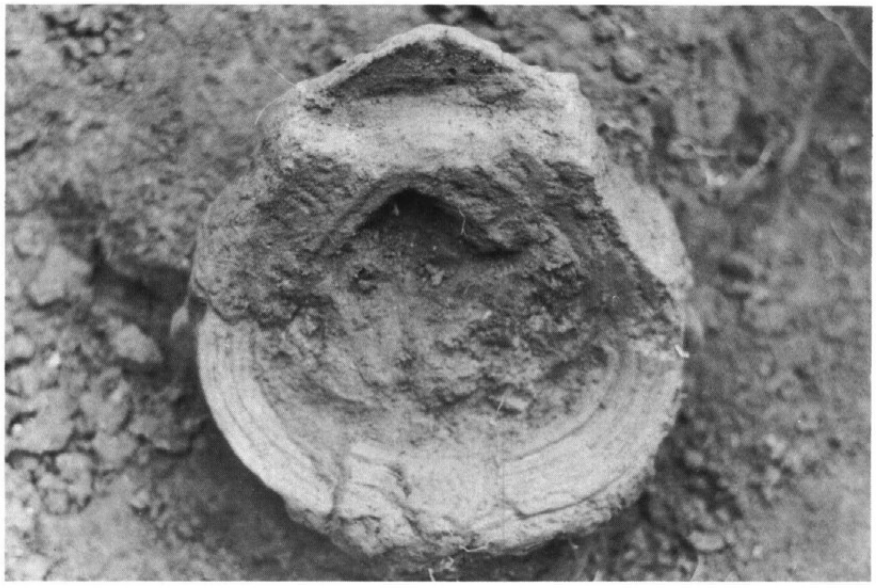
図版1　　柳田遺跡全景（北西より）

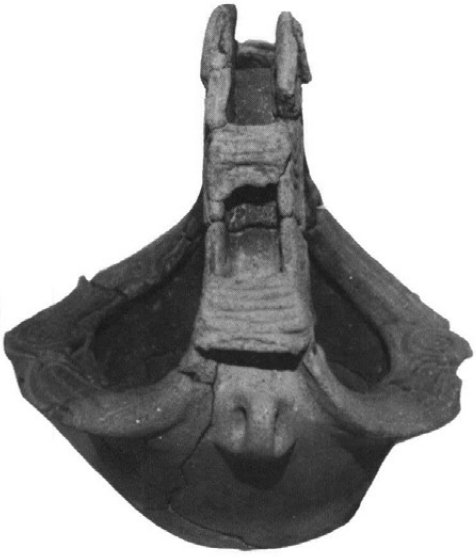
図版 2　　第 1 号集石および第 1 号住居址

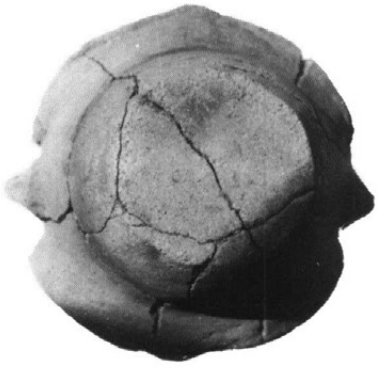
図版 3　　第 2 号集石および第 3 号集石

図版 4　　第 2 号住居址及び炉址・炉址内出土土器

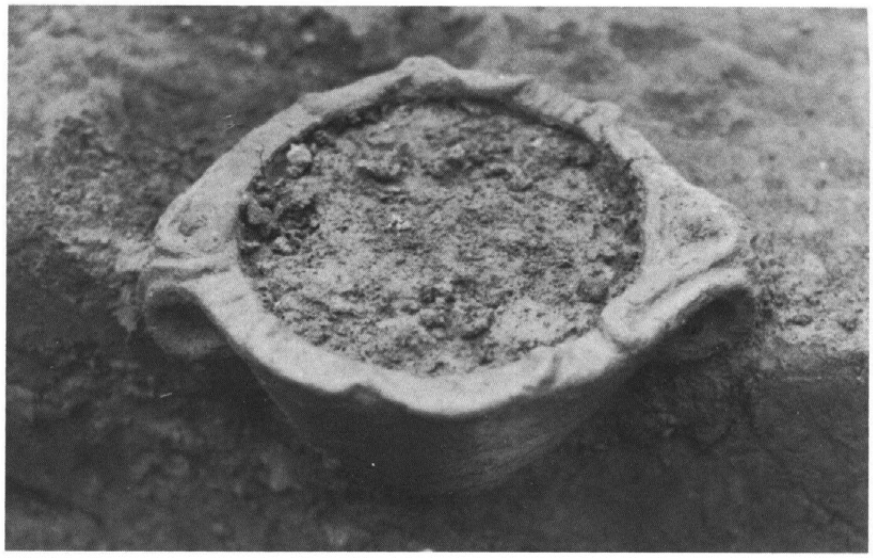
図版5　第 3 号 住 居 址







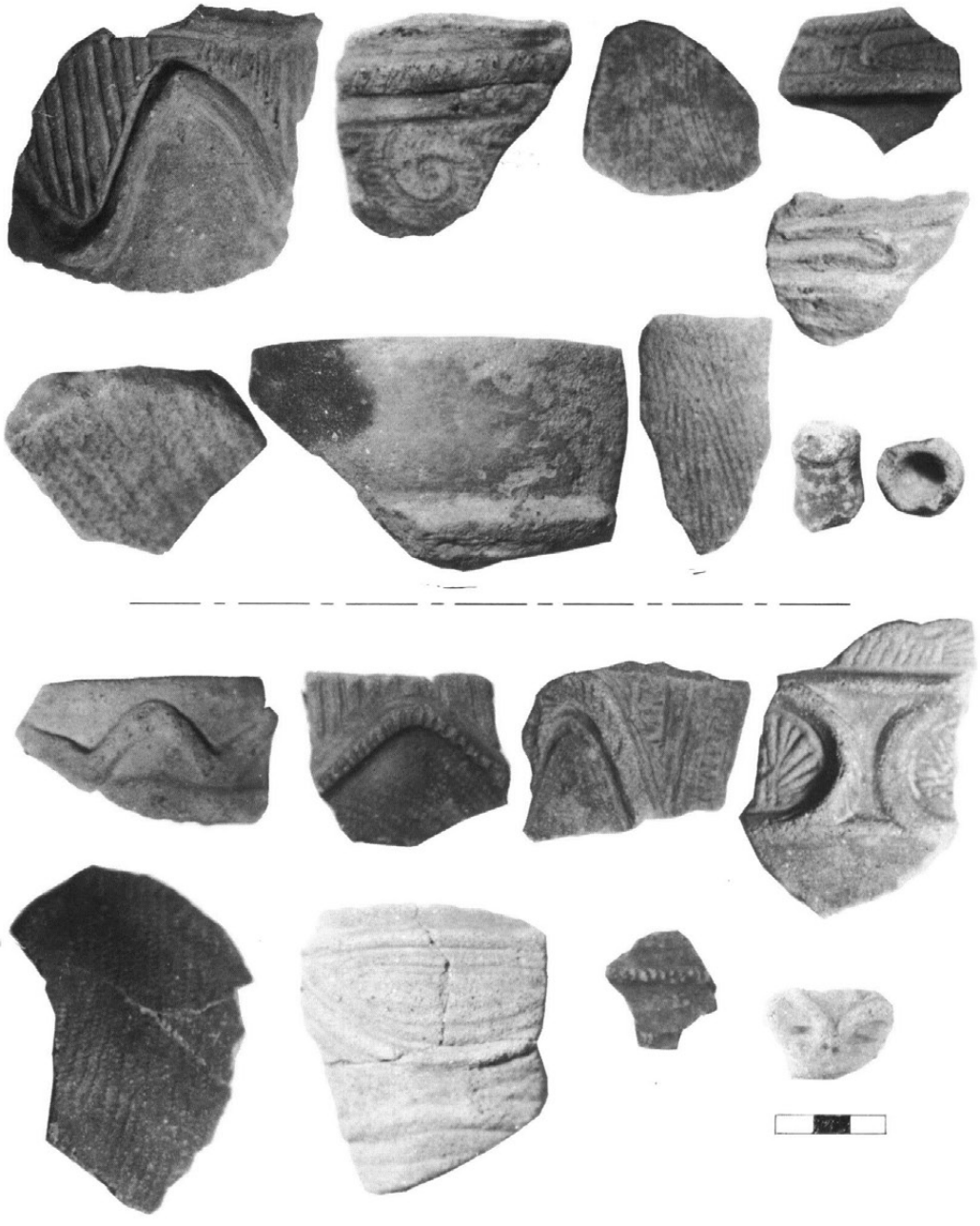
図版 6　　釣手土器および出土状況



図版 7　　鉢型土器および出土状況

図版８　　第１号住居址および遺構外遺物出土状況

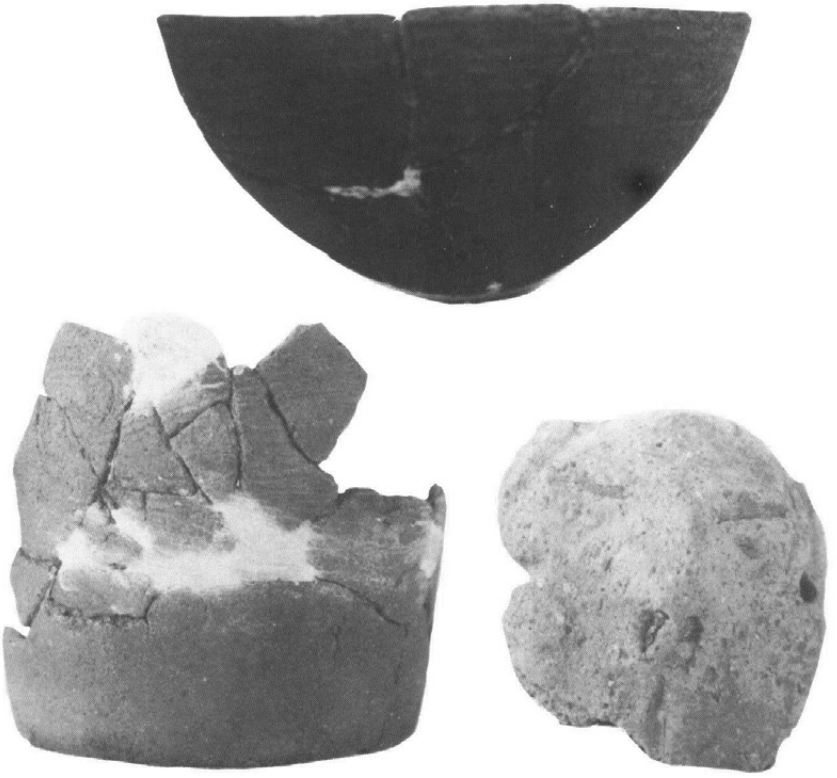
図版9　　第3号住居址出土土器



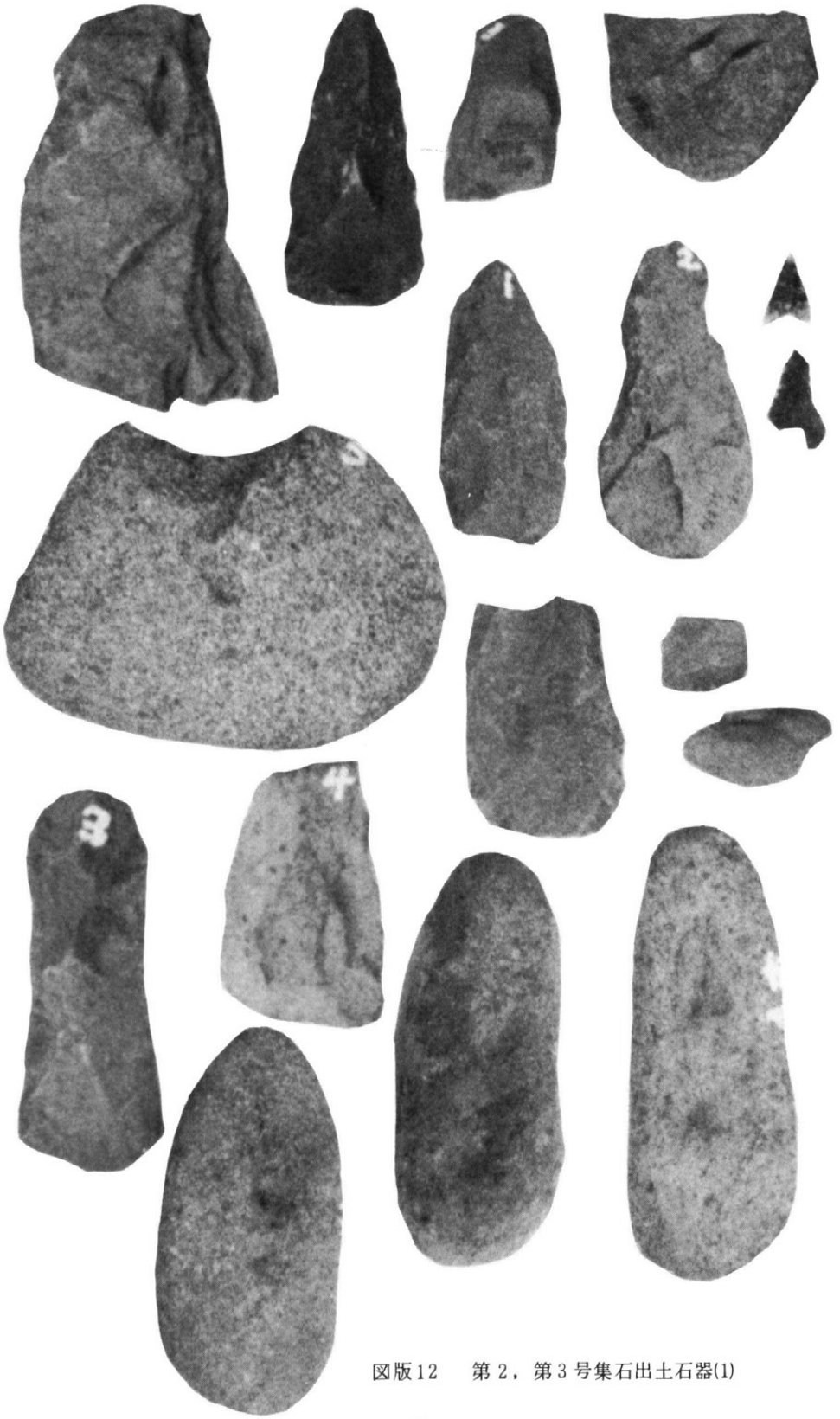
図版10　第3号集石および第3号住居址出土遺物

上段　第3号集石出土土器及び土製品

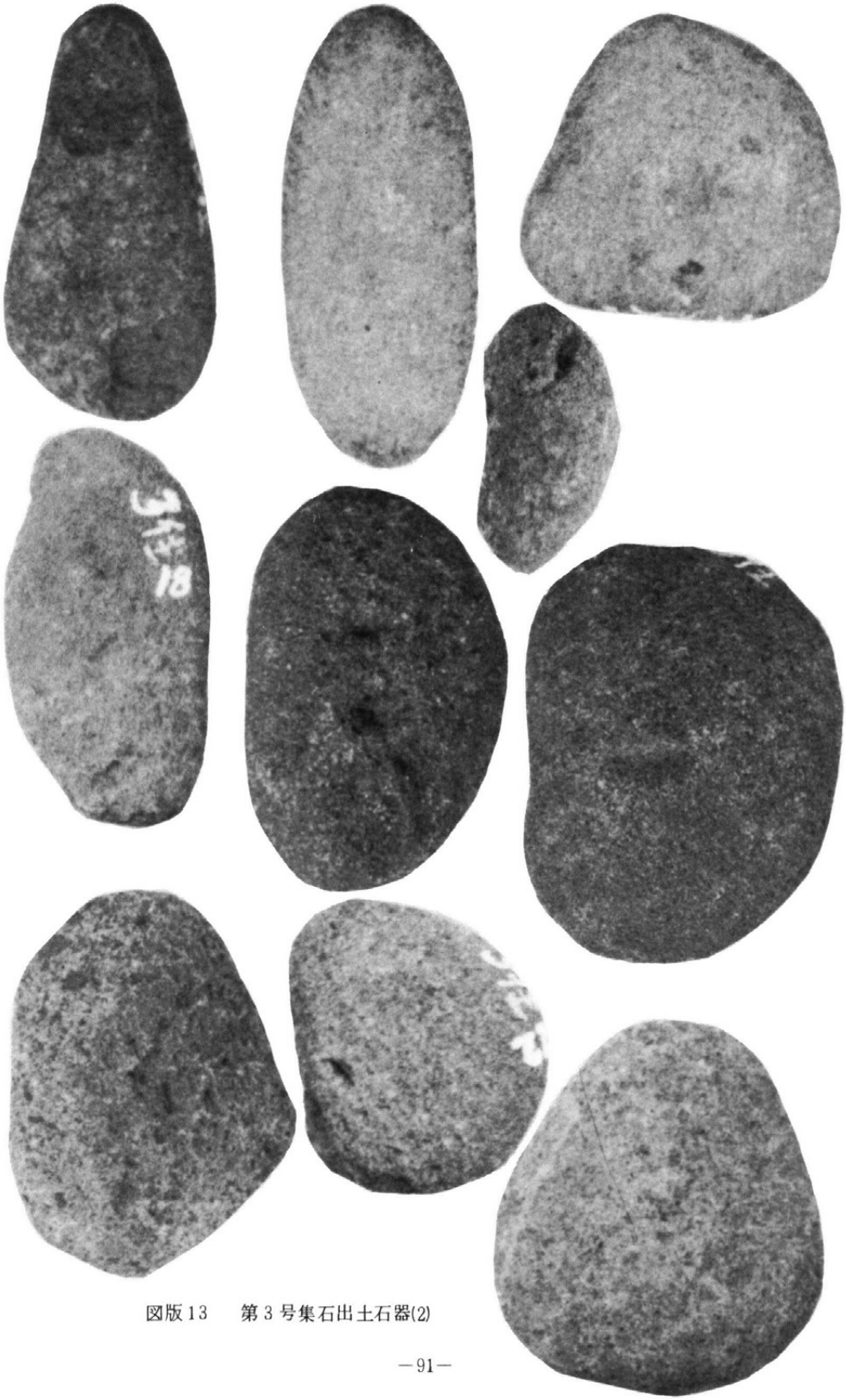
下段　第3号住居址出土土器及び土偶



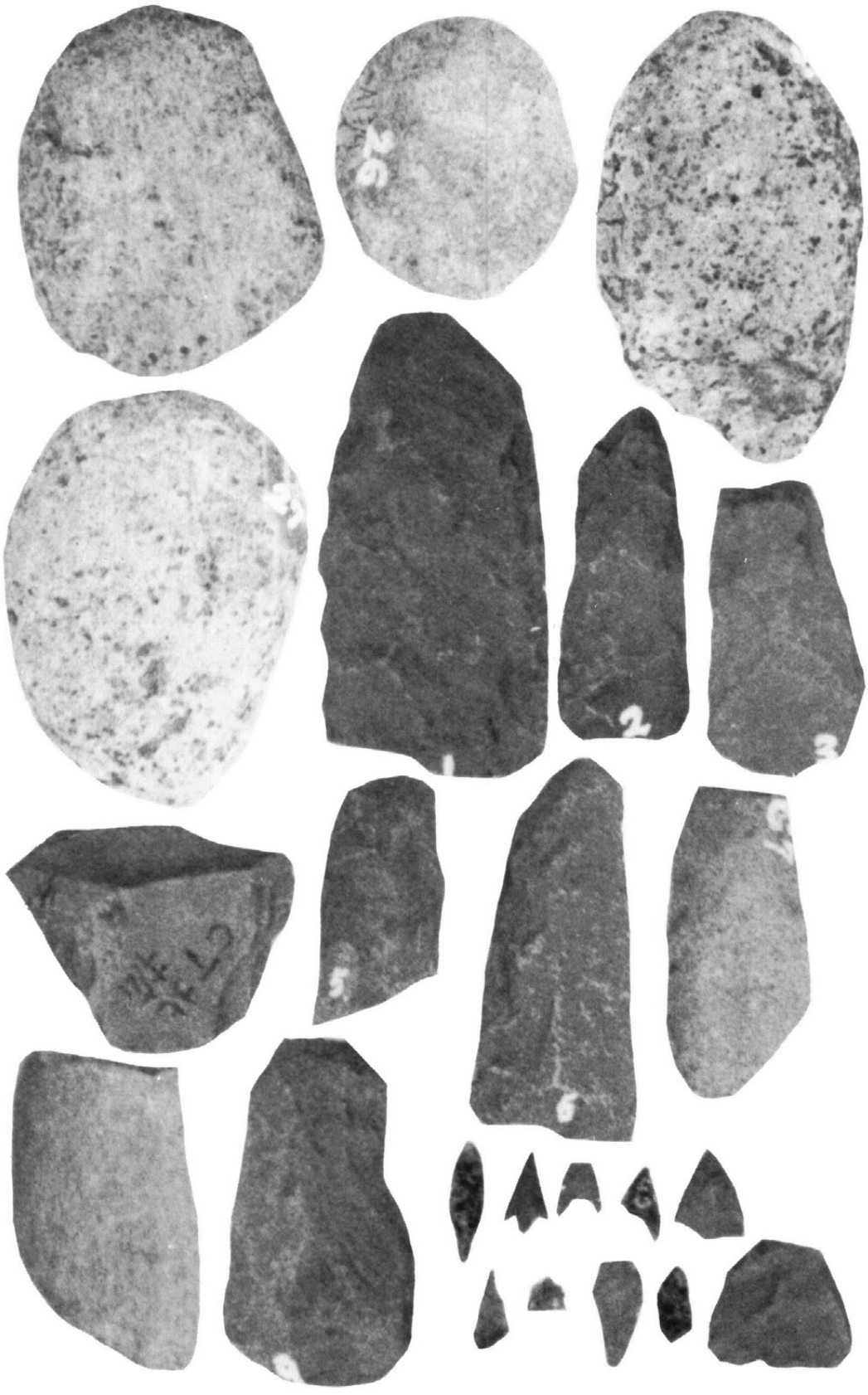
図版 11　縄文晩期遺物出土地点及び出土遺物



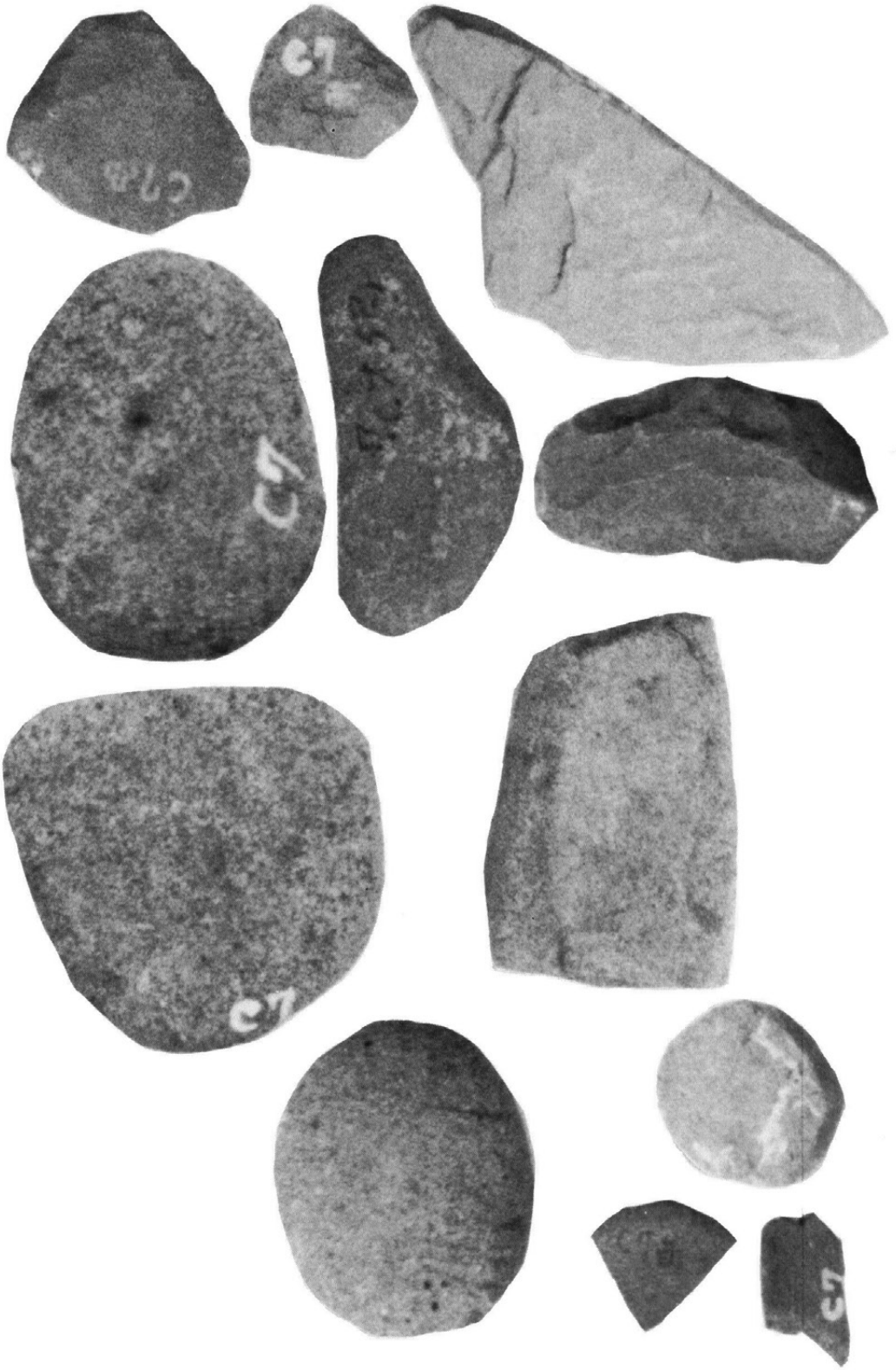
図版12　第2，第3号集石出土石器(1)



図版13　第3号集石出土石器(2)



図版14　第3号集石および縄文晩期遺物出土地点出土石器(3)



図版 15　縄文晩期遺物出土地点出土石器(4)

松本市大村遺跡群柳田遺跡
分布確認調査報告書
（非売品）

1979年12月28日 発行

発行　松本市教育委員会
松本市丸の内3番7号

印刷　すみれタイプ
松本市開智2－3－33
TEL (32)－5803